

325
220

事故本
欠ページ
P613-624
P1463-1466
1994.5.6



始





真言宗聖典

古義真言宗聯合長者
新義真言宗智山派管長
新義真言宗豐山派管長
權大僧正 浦上隆應
密門大僧正 伊藤大僧正
岩堀大僧正 伊藤大僧正
師序並校閱 岩堀大僧正
題辭 伊藤大僧正

長松俊恭師編

大正
3. 5. 23
丙交

東京 無我山房發行

藏書印

衣冠見光

無名氏

其字宗也者

大德寺宣範

宣範印

宗也印

鷲貴君羊眠迷自心
平寺顯澄在四爻

大德正宗年有書



野有客
在在在

花

大正癸丑仲夏
吉野山
大信山
吉野山
大信山



325-220

眞言宗聖典序

經云大毘盧遮那如來金剛手菩薩に告げて言はく如何なるか
 是れ菩提とならば謂はく實の如く自心を知るなりと實の如
 く自心を知れば則ち不轉肉身得無漏果の人のみ衆生顛倒此
 意を解すること能はず或は心外に法を求めて永く外道の深
 坑に落ち或は事理隔歴して深く三乗の偏眞に着し一乘圓融
 の機に至りても尙ほ未だ其の源底を盡くすこと能はず甘ん
 じて顯露淺略の域に耽溺す如來之を惑むが故に法界宮殿の
 中に在まして法然自爾の大法を開示し給ふ其の大要に曰く
 若し行者手に本尊の印契を結び口に本尊の眞言を唱へ心三
 摩地に住すれば三密相應するが故に父母所生の身を捨てず
 して現に遮那の眞身を成就し二利圓滿すと是れすなはち如
 實知自心の要道にして顯密諸教の歸止するところ等覺十地
 も室に入ること能はず如何に況んや二乗凡夫其の堂に昇る

序文

一

ことを得むや稱して如來祕奥の教眞言陀羅尼宗といふ亦宜ならずや竺土震旦展轉相承して現に我日域に在り閱歲茲に一千有餘遺法儼焉たり世衰へ人稀にして機根絶絶たりと雖も文華旺盛の今日豈に其の人なしとしも謂はむや慧果和上の曰く冒地の得かたきにあらず此法に遇ふことの易からざるなりと長松俊恭君夙に此處に見るあり吾宗所傳の經論章疏を蒐集和譯して眞言宗聖典と名け廣く公衆の閱覽に便し勝縁を此法に結ばしめむとし屢々予の禪扉を叩き其の校正を要む予修禪の餘暇を以て略々之を點檢すと雖も未だ多少の遺漏なきを保せず大方の君子幸に是正して可なり編纂成るに及むで一言を題せんことを請はる乃ち其の梗概を叙すと云爾

大正二年十一月二十三日

高野山寶壽院門主權大僧正 浦上隆 應謹識

自題

指南車裂嘆途窮

巨手誰能制俗風

一部眞言宗聖典

自期三寶見興隆

自序

輓近、文運大に開け、密教研尋の聲漸く高く、哲學、宗教に志あるの士は、争つて其の祕密の庫を開かんとする、されど汗牛充棟も啻ならざる祕密の三藏、其の正所依の經論すら得るに易からず、況や一般密部に屬する書を、是を以て學者をして望洋の歎を懷かしむる豈に遺憾ならずや、世は駸駸として日月と共に進み、活版の術盛に百科の書及び各宗の經論續續版成り、學者を裨益する亦尠少なざるなり

余や菲才その人にあらずと雖も佛恩に沐浴する深し、時世に鑑み感ずる所あり、謹みて佛恩報謝、三寶興隆、密教弘布の爲に事に盡瘁する既に歳餘、漸く祕經論藏等一百餘種を摘み、併せて之を和訓し、以て一卷と爲し、名けて眞言宗聖典といふ、今や幸に權大僧正浦上隆應和上の校閱を了り、梓に刻す、求法者之

に由て、其の關鑰を開くの指南たりせば、編者望外の望は足る發刊に臨み一言を序す

大正甲寅四月

長松俊恭謹識

例言

一、本聖典は、自性法身大毘盧遮那如來が自受法樂の故に自眷屬の如來と與に説きたまへる五部の祕經等及び高祖諸大徳の律論一百餘種を摘集したり。此れ衆生利濟の大法なれば廣く四海の同胞に提供したる所以なり。此れを名けて眞言宗聖典と爲す。

二、本聖典を繙かんと欲するものは、先づ佛教に二種あることを知らざるべからず。二種とは、顯教と密教とこれなり。顯教とは、印度出現の釋尊所説の教法を總稱するものにて、密教とは、生身釋尊の本地内證たる大日如來が法界心殿中に説きたる説なり。故に顯教は淺略の説にして因分は説くも果分は不可説なるに、密教は此の果分を説きたる深奥の説なり。故に顯教にては、豎に三大無數劫を経て漸く成佛するも、密教

は横に三妄執を斷じて即身成佛するものと爲し、二教論には二教の差別を説いて『夫れ佛に三身あり、教は即ち二種なり、應化の開説を名けて顯教と曰ふ』とあり。付法傳には『法身大毘盧遮那如來、自眷屬法身如來と與に祕密法界心殿中に於て自受法樂の故に常恆不斷に此の自内證智三摩地を演説す』と爲す。佛教の奥祕を究めんと欲する人、本聖典によらば裨益するところ尠少ならざるを信す。

三、密教には、事相と教相とあり。此の二者は車の兩輪の如く鳥の雙翼の如き關係を有す。事相とは、實修の行法をいふ、此語は、大疏に灌頂の祕密道具を授くる所以を説くときに『總べて祕密宗の中には皆因縁の事相に託して以て深旨を喻ふ、故に此くの如く傳授を爲すなり』とあるを本據とする者にして擇地、造壇、灌頂、修法、印契、眞言の威儀動作の諸事象を皆事相と稱す。後に此の事相の印契所作の異によりて、小野、廣澤の分

派を始め事相三十六流、或は事相七十二流を出すに至れり。教相とは、諸の教義の性相を説明するをいふ。此の語は、大日經の『秘密主云何眞言法教』とあるを大疏に解して、『阿字門等なり。これ眞言の教相なり。相體に異ならず。體相に異ならず。相は造作の修成にあらず人に示すべからずと雖も、而も能く解脫を離れずして聲字を現作す、一一の聲字は即ち是れ入法界門なるが故に、名けて眞言法教とすることを得るなり』と、之を此の語の本據となす。而して其の組織は當相即道即事而眞即ち現象即實在を根本原理と爲し、法の源底に人法を併存して之を大日如來と稱し、金剛界曼荼羅、胎藏界曼荼羅を物心二元の本體と爲す。萬有を六大體大、四曼相大、三密用大の三大に分ちて觀察し、その修行は五相成身三密秘觀に依り義理を述ぶるに四重秘釋十六立門を用ふるをいふなり。

四、眞言密教の經論は、他に口傳に待つもの多かるべし。され

ば之を繙くものは、阿闍梨に親炙して其の傳授を受くるを要す。例へば大日經疏に『十二口傳ありて明師に就かざれば自ら疏を讀み、法を修すること能はざるなり。若し強ひて之を犯さば越三昧耶罪といひて盜法の罪あり』と云云。

五、次に口傳とは、阿闍梨の口づから弟子に傳ふるをいふ。密教は、此の口傳を以て教權とするなり、大疏には其の趣旨を説いて『此の如來の密藏は、もろくの漫法の人、師に従つて受けざるものを防がんが爲に經文を變亂す、故に須く口傳相付すべし』とあるを本據とするものにして口傳を受けざれば一文半偈をも解し、一事一法をも行すること能はざるものとせり。故に此の口傳面授を以て密教は最後の教權とするものにして、古來儀軌と本經と異なりたるときは儀軌を採り、儀軌と口傳と異なりたるときは口傳を採る。されど口傳萬能なればとて口傳のみを偏重して遂に白を變じて黒と爲すも顧みざ

るにあらず。故に其の口傳の全く經軌の軌道を離れたりや否やを見るは、是れ眞言行者の用心の存する所と爲す。

六、梵字は、印刷所にて始めての使用なりしかば、非常の困難を來たし、爲に魯魚を生じ、其他校正の間にも烏焉なきを保する能はざるは、眞に慚汗に堪へざるなり、再版を竣ちて訂正せんのみ。

七、由來眞言密教の三藏は、殆ど梵漢混淆文にして初學者の困難多大なるを慮り、漢文は和訓し且つ傍訓を附したるは、本邦未曾有の業にして、これ唯一片の婆心、この擧を敢て爲す、如來照覽の下その罪業を銷隕するを得ん。

八、本聖典編纂に關しては、密門宥範大僧正、伊藤宗盛大僧正、岩堀智道大僧正諸師は題字を賜はり、浦上隆應僧正は序文を寄せさせられ、本聖典に光彩を添へられたるは、余の深く光榮とするところ茲に記して鳴謝す。

九、本聖典の成効に關しては、浦上隆應僧正が多忙の間、嚴肅なる校閲と教訓とを與へられたると、佐伯隆運僧正、恩師良曉阿闍梨の諸師に、或は教を受け、或は材料借覽の便を得たるとは、余の深く感謝するところなり。

大正三年四月

編者謹識

眞言宗聖典目次

| | | |
|----|------------|-----|
| 一 | 大日經和譯 | 一 |
| 二 | 金剛頂經和譯 | 二〇五 |
| 三 | 蘇悉地經和譯 | 二七二 |
| 四 | 瑜祇經和譯 | 四二〇 |
| 五 | 念誦經和譯 | 四八二 |
| 六 | 理趣經 | 五三一 |
| 七 | 金剛界禮懺 | 五四三 |
| 八 | 胎藏界禮懺 | 五四〇 |
| 九 | 般若心經 | 五五〇 |
| 一〇 | 觀音經 | 五五五 |
| 一一 | 尊勝陀羅尼 | 五六三 |
| 一二 | 寶篋印陀羅尼 | 五六四 |
| 一三 | 阿彌陀如來根本陀羅尼 | 五六五 |
| 一四 | 四智梵語 | 五六六 |
| 一五 | 心略梵語 | 五六六 |
| 一六 | 不動證 | 五六六 |

目次

| | | |
|----|----------|-----|
| 一七 | 四智漢語 | 五六七 |
| 一八 | 心略漢語 | 五六八 |
| 一九 | 佛讚 | 五六八 |
| 二〇 | 千手陀羅尼 | 五六九 |
| 二一 | 如意輪根本陀羅尼 | 五七〇 |
| 二二 | 仁王般若經 | 五七一 |
| 二三 | 大日經住心品 | 六二一 |
| 二四 | 如來壽量品 | 六二六 |
| 二五 | 孟蘭盆經 | 六三三 |
| 二六 | 九條錫杖 | 六三六 |
| 二七 | 使咒法經 | 六三九 |
| 二八 | 金剛般若經偈 | 六四三 |
| 二九 | 法身偈 | 六四三 |
| 三〇 | 舍利禮 | 六四三 |
| 三一 | 至心回向 | 六四四 |
| 三二 | 回向文 | 六四四 |
| 三三 | 同回向 | 六四五 |
| 三四 | 同回向 | 六四五 |
| 三五 | 回向輪陀羅尼 | 六四六 |
| 三六 | 禮文 | 六四六 |
| 三七 | 五大願 | 六四七 |

| | | |
|----|-----------|------|
| 三七 | 普賢十大願 | 六四八 |
| 三八 | 諸部真言 | 六四九 |
| 三九 | 諸尊真言 | 六六一 |
| 四〇 | 塔婆種子真言 | 六六三 |
| 二 | 梵網經附布薩法 | 六六五 |
| 四一 | 佛遺教經和譯 | 六七二 |
| 四二 | 七佛略戒經 | 六八二 |
| 三 | 即身成佛義和譯 | 六八四 |
| 四三 | 聲字實相義和譯 | 六九七 |
| 四四 | 吽字義和譯 | 七二 |
| 四五 | 辯顯密二教論和譯 | 七二八 |
| 四六 | 秘藏寶輪和譯 | 七五九 |
| 四七 | 般若心經秘鍵和譯 | 八二七 |
| 四八 | 發菩提心論和譯 | 八二七 |
| 四九 | 大日經住心品疏和譯 | 八三七 |
| 五〇 | 釋摩訶衍論和譯 | 九七七 |
| 五一 | 唯識三十頌 | 一三五七 |
| 五二 | 大乘百法明門論 | 一三五九 |

| | | |
|----|------------|------|
| 五三 | 中論八不偈 | 一三六一 |
| 五四 | 立義分 | 一三一 |
| 五五 | 密嚴院發露懺悔文和譯 | 一三六三 |
| 五六 | 障子文和譯 | 一三五 |
| 五七 | 五輪九字祕釋和譯 | 一三六 |
| 五八 | 灌頂一異義和譯 | 一四一五 |
| 五九 | 密嚴淨土略觀和譯 | 一四二 |
| 六〇 | 阿彌陀祕釋和譯 | 一四二八 |
| 六一 | 真言宗義和譯 | 一四三三 |
| 六二 | 顯密不同章和譯 | 一四三九 |
| 六三 | 阿字祕釋和譯 | 一四四四 |
| 六四 | 觀字義和譯 | 一四五〇 |
| 六五 | 孝養父母觀念和譯 | 一四五七 |
| 六六 | 真言三密修行問答和譯 | 一四九九 |
| 六七 | 以呂波略釋和譯 | 一四六三 |
| 六八 | 三界唯心釋和譯 | 一四六七 |
| 六九 | 大日遍照釋和譯 | 一四六九 |
| 七〇 | 阿字觀和譯 | 一四七二 |
| 七一 | 大日略觀和譯 | 一四七三 |
| 七二 | 自身觀和譯 | 一四七八 |

| | | |
|----|--------------|------|
| 七三 | 法身說法頌和譯 | 一四八〇 |
| 七四 | 顯密不同頌和譯 | 一四八二 |
| 七五 | 月輪觀頌二十頌和譯 | 一四八四 |
| 七六 | 月輪觀頌和譯 | 一四八五 |
| 七七 | 無相觀頌和譯 | 一四八七 |
| 七八 | 一心自覺頌和譯 | 一四八八 |
| 七九 | 勸發頌和譯 | 一四九一 |
| 八〇 | 阿字觀頌和譯 | 一四九三 |
| 八一 | 祕密曼荼羅十住心略頌和譯 | 一四九四 |
| 八二 | 自受法樂讚和譯 | 一四九六 |
| 八三 | 五大明王功能和譯 | 一四九九 |
| 八四 | 鐵塔事和譯 | 一五〇一 |
| 八五 | 末代真言行者用心和譯 | 一五〇三 |
| 八六 | 謝德成佛頌和譯 | 一五〇四 |
| 八七 | 八祖忌日頌和譯 | 一五〇六 |
| 八八 | 大師十號 | 一五〇七 |
| 八九 | 阿字觀 | 一五〇八 |
| 九〇 | 一期大要祕密集和譯 | 一五二 |
| 九一 | 在家勤行法則 | 一五五 |

| | | |
|----|---------|------|
| 九二 | 真言宗安心和讚 | 一五三六 |
| 九三 | 光明真言和讚 | 一五三八 |
| 九四 | 舍利和讚 | 一五三九 |
| 九五 | 弘法大師和讚 | 一五四二 |
| 九六 | 興教大師和讚 | 一五四四 |
| 九七 | 御垂示安心 | 一五四七 |
| 九八 | 密宗安心教示章 | 一五四九 |
| 九九 | 密宗安心章 | 一五七〇 |

真言宗聖典目次終

開經偈

無上甚深微妙法

我今見聞得受持

百千萬劫難遭遇

願解如來真實義

| | |
|---------|---------|
| 吾觀諸法譬如幻 | 總是衆緣所合成 |
| 一箇無明諸行業 | 不中不外惑凡情 |
| 三種世間能所造 | 十方法界水蓮城 |
| 非空非有越中道 | 三諦宛然離像名 |
| 春園桃李肉眼眩 | 秋水桂光幾醉嬰 |
| 楚澤行雲無復有 | 洛川廻雪重還輕 |
| 封著狂迷三界熾 | 能觀不取法身清 |
| 咄哉迷者孰觀此 | 超越還歸阿字營 |

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第一

入眞言門住心品第一

是の如く我れ聞き、一と時薄伽梵、如來加持廣大金剛法界宮に住し給ふ、一切
 持金剛者皆悉く集會せり、如來の信解遊戯神變の生ずる大樓閣寶王は高して中
 邊なし、諸の大妙法を以て種種に間飾せり、菩薩の身を以て師子座と爲し、その
 金剛を名けて虚空無垢執金剛、虚空遊歩執金剛、虚空生執金剛、被雜色衣執金剛、善行
 步執金剛住一切法平等執金剛、哀愍無量衆生界執金剛、那羅延力執金剛、大那
 羅延力執金剛、妙執金剛、勝迅執金剛、無垢執金剛、刃迅執金剛、金剛如來甲執金剛、如來句
 生執金剛住無戲論執金剛、如來十力生執金剛、無垢執金剛、金剛如來秘密主と曰ふ、
 是の如きを上首として十佛刹微塵數等の持金剛衆と俱なり、及び普賢菩薩慈氏菩薩
 妙吉祥菩薩除一切蓋障菩薩等の諸大菩薩前後に圍繞して而も法を演説し給ふ、所
 謂三時を越えたる如來の日加持の故に身語意平等句の法門なり、時に彼の菩薩に
 は普賢を上首と爲し、諸執金剛には秘密主を上首と爲す、毗盧遮那如來加持の故
 に身無盡莊嚴藏を奮迅示現し、是の如く語意平等無盡莊嚴藏を奮迅示現し給ふ、

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第一

誰か一切智を尋求する、誰か菩提の爲に正覺を成ずるもの、誰か彼の一切智を
 發起する、佛の言玉はく、秘密主、自心に菩提及び一切智を尋求す、何を以ての故
 に本性清淨なるが故に心は内に在らず外に在らず、及び兩中間にも心不可得な
 り、秘密主如來應正等覺は青に非ず黃に非ず赤に非ず白に非ず紅紫に非ず、水精
 色に非ず長に非ず短に非ず圓に非ず方に非ず明に非ず暗に非ず男に非ず女に非ず
 不男女に非ず、天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人趣に非ず、無色界と同性
 に非ず、虚空相の心は諸の分別を離れ無分別なり所以となれば性、虚空に同なれば即
 ち心に同なり、性、心に同なれば即ち菩提に同なり、是の如く秘密主心と虚空界
 と菩提との三種無二なり此れ等は悲を根本となして方便波羅蜜満足す、是の故に
 秘密主我れ諸法を説くこと、是のごとし、彼の諸の菩薩衆をして菩提心清淨にし其
 の心を知識せしむ、秘密主若し族姓の男族姓の女菩提を識知んと欲はば當に是く
 の如く自心を識知すべし、秘密主云何か自ら心を知る、謂く若しは分段或は顯色
 或は形色或は境界若しは色若しは受想行識若しは我若しは我所若しは能執若し

は所執若しは清淨若しは界若しは處乃至一切分段の中に求むるに不可得なり、秘
 密主此の菩薩の淨菩提心門を初法明道と名く、菩薩此に住して修學すれば久しく
 勤苦せずして便ち除一切蓋障三昧を得るなり、若し此れを得れば則ち諸佛菩薩
 と同等に住して當に五神通を發し無量の語言音陀羅尼を獲、衆生の心行を知り諸
 佛に護持せられ生死に處すと雖も染着無く法界衆生の爲に勞倦を辭せず、住無爲
 戒を成就し邪見を離れ正見を通達すべし、復次に秘密主此の除一切蓋障に住する
 菩薩は信解力の故に久しく勤修せずして一切の佛法を満足す、秘密主要を以てこ
 れを言はば是の善男子善女人は無量の功德皆成就することを得、爾の時に執金剛
 秘密主復偈を以て佛に問ひ上る。
 云何か世尊この心に菩提生ずることを説き給ふ、復云何なる相を以て菩提心を
 發すことを知る、願はくは識心と心と勝れたる自然智生ぜることを説き給ひ大
 勤勇幾何の次第あつてか心續を生ずる、心の諸相と時と願はくは佛廣く開演し
 給ひ、功德聚も亦然かなり、及び彼の行を修行すると心と心に殊異あると唯し
 大牟尼説き給へ。
 是くの如く説き已て、摩訶毗盧遮那世尊金剛手に告げて言たまはく善哉佛眞子廣

大の心を以て利益す勝上大乘の句心續生の相は諸佛の大秘密なり、外道は識ること能はず我今に悉く開示せん一心に諦に聽くべし、百六十心を越えて廣大の功德を生ず、その性常に堅固なり知るべし彼れ菩提生なり、無量なること虚空の如し、染汗せずして常住なり諸法も動すること能はず、本より來た寂にして無相なり、無量智を成就し正等覺顯現す供養行を修行してこれより初めて發心す秘密主無始生死の愚童凡夫は我名我有に執着して無量の我分を分別す、秘密主若し彼れの自性を觀せざれば則ち我我所生ず、餘は復時と地等の變化と瑜伽の伽と建立の淨と不建立の無淨と若しは自在天若しは流出及び時若しは尊貴若しは自然若しは内我若しは人量若しは遍嚴若しは壽者若しは補特伽羅若しは識若しは阿頼耶知者見者能執所執内知外知社但梵意生儒童常定生聲非聲と有りと計す、秘密主是の如く等の我分は昔より以來分別と相應して順理解脱を希求す、秘密主愚童凡夫の類は猶し羝羊の如し、或る時には一法の想生ずることあり、所謂持齋なり彼れ此の少分を思惟して歡喜を發起し數々に修習す秘密主これ初めの種子善業の發生するなり、復たこれを以て因として六齋日に於いて父母男女親戚に施與す、これ第二の芽種なり、復たこの施を以て非親識のものに授與す、これ第三の疱種なり、

復た此の施を以て器量高德のものに與ふこれ第四の葉種なり、復たこの施を以て歡喜して伎樂の人等に授與し及び尊宿に獻すこれ第五の敷華なり、復たこの施を以て親愛の心を發して之を供養すこれ第六の成果なり、復次に秘密主彼れ戒を護て天に生ずる是れ第七の愛用種子なり、復次に秘密主この心を以て生死に流傳して善友の所に於いて是の如くの言を聞くこれ第八の心なり、復た此の施を以て歡喜するもの若し虔誠に供養すれば一切の所願皆滿つ所謂自在天梵天那羅延天商羯羅天黑天自在天日月天龍尊等及び俱吠藍毗沙門釋迦毗樓博又毗首羯磨天閻魔閻魔后梵天后世の宗奉する所火天迦樓羅子自在天后波頭摩德又迦龍和修吉商佉羯句啖劍大蓮俱里劍摩河泮尼阿地提婆薩陀難陀等の龍或は天仙大園陀論師なり、各各に善く供養すべしと彼れ是の如くなるを聞いて心に慶悅を懷いて殷重に恭敬し隨順し修行す秘密主これを愚童異生の生死流轉の無畏依の第八の嬰童心と名く、秘密主復次に殊勝の行あり、彼の所說の中に隨つて殊勝に住して解脫を求むる慧生す所謂常無常空なり是の如くの說に隨順す、秘密主彼れ空と非空と常と斷と非有と非無とを知解するに非ず、俱に彼れは分別を以て無分別とす、云何が空を分別す諸空を知らざれば彼れ能く涅槃を知るに非ず、是の故に空を了知して斷常を離る

爾の時に金剛手復佛に請うて言さく唯し願くは世尊彼の心を説き給へ、是の如く
 説き已て佛金剛手祕密主に告げて言給はく祕密主諦に聴け心相といふは謂く
 心無貪心瞋心慈心癡心智心決定心疑心暗心明心積聚心闘心諍心無諍心天
 羅心龍心人女心自在心商人心農夫心河心井心守護心慳心狗心狗心天
 心鼠心歌詠心舞心擊鼓心室宅心師子心鵝心鳥心刺刀心須彌心窟心風心水
 心顯色心板心迷心毒藥心牽索心械心雲心田心鹽心刺心心海心火心泥
 生心なり祕密主彼れ云何か貪心謂く染法に隨順す云何か慈心謂く勝増上の法に隨順す
 順す云何瞋心謂く怒法に隨順す云何智心謂く殊勝増上の法に隨順す
 心謂く隨順して不觀の法を修す云何疑心謂く常に不定等の事を收持す
 定心謂く尊の敬命説の如く奉行す云何疑心謂く常に不定等の事を收持す
 慮無くして修行す云何積聚心謂く無量を生ず云何明心謂く不疑慮の法に於いて
 是非するを性と爲す云何靜心謂く自己に於いて是非を生ず云何阿修羅心謂く
 非俱に捨つ云何か天心謂く心念に隨つて成就せんと思ふ云何阿修羅心謂く生死

に處せんと樂ふ云何が龍心謂く廣大の資財を思念す云何が人心謂く利地を思念
 す云何女心謂く欲法に隨順す云何が自在心謂く思惟して我一切意の如くならん
 と欲ふ云何が商人心謂く初には收聚して後には分析する法に順修す云何が農夫
 心謂く初に廣く聞いて後には求むる法に隨順す云何が河心謂く二邊依因する法に
 順修す云何が破池心謂く渴して厭足なき法に隨順す云何が井心謂くかくの如
 く思惟すること深くして復甚深なり云何が守護心謂く唯し此の心のみ實なり餘
 心は不實なり云何が慳心謂く己が爲にして他に與へざる法を隨順す云何が狸
 心謂く徐進の法に順修す云何が狗心謂く少分を得て以て喜足と爲す云何が迦樓
 羅心謂く朋黨羽翼の法に隨順す云何が鼠心謂く諸の繫縛を斷せんと思惟す云
 何が歌詠心云何が舞心謂く是の如く法を修行して我れ當に上昇して種々に神
 變すべし云何が擊鼓心謂く是の法に修順して我れ當に擊つべし云何が室
 宅心謂く自ら身を護る法に順修す云何が師子心謂く一切の無怯弱の法を修行
 す云何が鵝心謂く常に暗夜に思念す云何が鳥心謂く一切處に驚怖の思念あ
 り云何が羅刹心謂く善の中に於いて不善を發起す云何が刺心謂く一切處に惡
 作を發起するを性と爲す云何が窟心謂く窟に入ることを爲す法を順修す云何

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第一

が風心謂く一切處に遍して發起するを性と爲す、云何が水心謂く一切不善を洗濯する法に順修す、云何が火心謂く熾盛の炎熱を性と爲す、云何が泥心、云何が顯色心謂く彼に類するを性と爲す、云何が板心謂く量に隨ふ法に順修して餘善を捨棄するが故に、云何が迷心謂く所執異に所思異なり、云何が毒藥心謂く無生分の法を順修す、云何が羅索心謂く一切處に我縛に住するを性と爲す、云何が械心謂く二足止住するを性と爲す、云何が雲心謂く常に降雨の思念を作す、云何が田心謂く常に増加す、云何が剃刀心謂く唯し是の如く剃除する法に依止す、云何が彌盧等心謂く常に思惟して心高擧なるを性と爲す、云何が海等心謂く常に是の如く自身を受用して住す、云何が穴等心謂く先には決定して彼れ後には復變改するを性と爲す、云何が受生心謂く諸の行業を修習して彼れに生ずることあり心かくの如く同性なり、祕密主一二三四五再數すれば凡そ百六十心あり、世間の三妄執を越えて出世間の心生ず謂く是の如く唯蘊無我を解し根境界淹留修行し、業煩惱株杌無明の種子の十二因縁を生ずるを抜く建立宗等を離れたり、一切の過を離れたり、祕は一切外道知ること能はざる所なり、先佛の宣説なり、一切の過を離れたり、祕

密主彼の出世間の心蘊の中に住するに是の如くの慧隨て生ずることあり、若し蘊等に於いて發起して離着するに當に聚沫浮泡芭蕉陽焰幻等を觀察して解脱を得べし、謂く蘊處界能執所執皆離れて法性なり、是の如く寂然界を證する是れを出世間心と名く、祕密主彼れ違順の八心の相續と業煩惱の網とを離るゝはこれ一劫を超越する瑜祇の行なり、復次に祕密主大乘の行あり、無緣乘の心を發して法に我を捨つれば心主自在にして自心本不生を覺る、何を以ての故に祕密主彼は是の如く實際不可得なるが故に是の如く自心の性を知る、是れ二劫を超越する瑜祇の行なり復次に祕密主眞言門に菩薩の行を修行する諸菩薩は無量無數百千俱那度多劫に積集する無量の功德智慧と具に諸行を修する無量の智慧方便と皆悉く成就す、天人世間の皈依する所一切聲聞辟支佛地に出過せり、釋提桓因等親近し敬禮す、所謂空性は根境を離れ無相無境界にして諸の戲論を越えたり、等虚空無邊の一切の佛法此れに依つて相續して生ず有爲無爲界を離れ、諸の造作を離れ、眼耳鼻舌身意を離れて極無自性心生ず、祕密主かくの如き初心をば佛成佛の因と説き給ふ、

故に業煩惱に於いて解脱すれども業煩惱の具依たり世間宗奉して常に供養すべし
 復次に秘密主信解行地には三心と無量波羅蜜多慧觀と四攝の法とを觀察す信解地
 は無對なり、無量なり、不思議なり、十心を建立し、無邊の智生ず、我が一切の
 諸有所説は皆此に依て而も得、この故に智者當に此の一切智の信解地を思惟して
 復一劫を越えて此の地に昇住すべし、此の四分の一に信解を度るなり。
 爾の時に執金剛祕密主、佛に白して言さく世尊願はくは救世者、心相を演説し給
 ひ、菩薩幾く種の無畏處を得ること有る、是の如く説き已て摩訶毗盧遮那世尊金
 剛手に告げて言たまはく諦に聽き極善思念せよ祕密主彼の愚童凡夫諸の善業を修
 し不善の業を害するときは當に善無畏を得べし、若し實の如く我を知るときは
 當に身の無畏を得べし、若し取蘊所集我身に於いて自の色像を捨て、觀るときは
 當に無我無畏を得べし、若し蘊を害して法攀緣に住するときは當に法無畏を得べ
 し、若し法を害して無緣に住るときは當に法無我無畏を得べし、若し復た一切
 蘊界處能執所執我壽命等と及び法と無緣と空にして自性無性なり、此の空智生ず
 るときは當に一切法自性平等無畏を得べし、祕密主若し、真言門に菩薩行を修
 する諸菩薩は深修して、十縁生句を觀察し、當に真言行に於いて通達作證すべし

云何が十と爲す、謂く幻陽焰夢影乾闥婆城響水月浮泡虛空華旋火輪の如し、祕密
 主彼れ真言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は當に是の如く觀察すべし、云何が幻
 と爲す謂く呪術藥力能造所造の種々の色像の如く自眼を惑はすか故に希有の事を
 見る展轉相生し十方に往來すれども然も彼れ去に非ず不去に非ず、何を以ての故
 に本性淨の故に是の如く真言幻も持誦成就して能く一切を生ず復次に祕密主、陽
 熾の性は空なり、彼れ世人の妄想に依て成立して談議する所あれば是の如く真言
 の想も唯し是れ假名なり、復次に祕密主夢中の所見の晝日牟呼栗多刹那歲時等に
 住し種種の異類ありて諸の苦樂を受くるが如きは覺め已て都べて所見なし、是
 の如く夢の真言行も應に知るべし復爾なり、復次に祕密主、影の喩を以て真言の
 能く悉地を發くことを解了す、面は鏡に縁て面の像を現するが如く、彼の真言の
 悉地も當に是の如く知るべし、復次に祕密主、響の喩を以て真言の聲を解了すべし、聲
 すること解了すべし、復次に祕密主、響の喩を以て真言の聲を解了すべし、聲
 に縁て響あるが如く、彼の真言者當の是の如く解すべし、復次に祕密主、月の出
 づるに因るが故の淨水を照して月の影像を現するが如く、復次に祕密主、月の出
 月の喩をもて彼の持明者當に是の如く説くべし、復次に祕密主、天より雨を降ら

す時泡を生ずるが如く彼の眞言の悉地種種の變化も當に知るべし、亦爾なり復次に
に祕密主、空中には衆生も無く、壽命も無く、彼の作者も不可得なり、心迷亂す
るを以ての故に是の如く種種の妄見を生ずるが如し、復次に祕密主、譬ば火燼の
若し人執持して手に在いて以て空中に旋轉するに輪の像生ずること有るが如し、
祕密主、應に是の如く大乘の句、心の句、無等等の句、必定の句、正等覺の句、
漸次大乘生の句を了知すべし、當に法財を具足し、種種の工巧大智を出生し實の
如く遍く一切の心想を知ることを得べし。

大毗盧遮那經入漫荼羅具緣眞言品第二

爾の時に執金剛祕密主、佛に白して言さく希有なり世尊この諸佛自證の三菩提を
説き給ふ、不思議法界は心地を超越せり、種々の方便道を以て衆生類の爲に本性
信解の如く而も法を演説し給ふ、唯し願はくは世尊次に眞言行を修して大悲胎藏
より大漫荼羅王を生ずることを説き給へ、彼の諸の未來世の無量の衆生を満足せ
しめんが爲め、救護し安樂ならしめんが爲の故なり、爾の時に薄伽梵毗盧遮那大
衆會の中に於いて遍く觀察し己て執金剛祕密主に告げて言まはく諦に聽け金剛手
今漫荼羅の行を修行して一切智智を満足する法門を説かん、爾の時に毗盧遮那世

尊本昔無盡法界を成就し無餘の衆生界を度脱せんと誓願し給ふが故に一切如来同
共に集會して漸次に大悲藏發生三摩地に證入し給ふ、世尊一切の文分より皆悉く
如来の身を出現し給ふ、彼の初發心より乃し十地に至るまでの諸の衆生の爲の故
に遍く十方に至つて佛身の本位に還來して本位の中に住して而も復還入し給ふ時
に薄伽梵復執金剛祕密主に告げて言はく諦に聽け金剛手漫荼羅の位の初めの阿闍
梨は菩提心を發し妙慧慈悲あつて兼ねて衆藝を綜べ善く巧に般若波羅蜜を修行し
三乘を通達し、善く眞言の實義を解し衆生の心を知り諸佛菩薩を信じ傳教灌頂
等を得、妙に漫荼羅の畫を解し、其の性調柔にして我執を離れ、眞言行に於いて
善く決定することを得、瑜伽を究習し勇健の菩提心に住すべし、祕密主かくの如
くの法則の阿闍梨は諸佛菩薩の稱讚し給ふ所なり、復次に祕密主彼の阿闍梨は若
し衆生を見るに法器となるに堪へて諸垢を遠離し大信解勤勇深信ありて常に利他
を念せんに若し弟子かくの如くの相貌を具せば阿闍梨自ら往いて勸發して是の如
く告げて言ふべし、佛子この大乘眞言行道の法を我れ今正しく開演せん、彼の
大乘器の爲めなり、過去の等正覺及與未來世現在の諸の世尊饒益衆生に住し給ふ、
是の如くの諸賢は眞言妙法を解して勤勇にして種智を獲無相の菩提に坐せり、眞

言の勢は無比なり、能く彼の大力の極忿怒の摩軍を摧く、釋師子救世なり、この故に汝佛子應に是の如くの慧方便を以て成就を作すべし、當に薩婆若を獲、行者悲念の心を以て發起して増廣せしめ、彼れ堅住して教を受けば當に爲に平地を擇ぶべし、山林に華果多く悦意の諸の清泉は諸佛の稱歎し給ふ所なり、圓壇の事を作すべし、或は河流の處に鵝雁等の莊嚴あらば彼れ此に慧解を以て悲生曼荼羅を作るべし、正覺と緣導師と聖者聲聞衆と會しこの地分に遊び給ふ、佛常に稱譽し給ふ所なり、及び餘の諸の方所僧坊と阿練若と華房と高樓閣と勝妙の諸池と苑と制底と火神祠と牛欄と河潭中と諸天廟と空室と仙人得道處と如上の所説と或は所意樂の處に弟子を利益せんが故に當に曼荼羅を畫すべし、祕密主彼れ地を揀擇して磔石碎瓦破器鬘毛髮糠糟灰炭、刺骨朽木等及び虫蟻蠅蝻毒螫の類を除くすべし、是の如くの諸過を離れ、良日辰に遇ひ、日を定めて時分宿直諸執皆悉く相應す食前の時に於いて吉祥の相に値うて先づ當に一切如來の爲に禮を爲し是の如くの偈を以て地神を警發すべし、

汝天視護者は諸佛導師に於て殊勝の行を修行し地波羅蜜を淨む、魔軍衆を破せん釋師子救世の如く我も亦魔を降伏す、我れ曼荼羅を畫くべし、彼れ長跪して手を

舒べ地を按じて頻りに此の偈を誦ふ、塗香華等を以て供養すべし、供養し己て眞言者復一切如來を歸命すべし、然して後に治地して其の次第の如く當に衆德を具すべし、爾の時に執金剛祕密主頭面を以て世尊の足を禮して偈を説いて言さく、佛法は諸相を離れたり、法は法位に住せり、所説は譬類なし、相も無く爲作も無し、何か故ぞ大精進して此の有相及與眞言行を説き給ふ、法然の道に順せず、爾の時に薄伽梵毗盧遮那佛、執金剛手に告げ給はく善く法の相を聽け、法は分別と一切の妄想とを離れたり、若し妄想と心思と諸の起作とを淨除すれば、我れ最正覺を成ず、究竟すること虚空の如し、凡愚は知らざる所なり、邪にして妄に境界を執す、時方相貌等の樂欲は無明に覆はる、彼等を度脱せんが故に隨順の方便を以て説く、而も實には時方なく作も無く造者も無し彼の一切の諸法は唯し實相に住せり、復次に祕密主、當來世の時に於いて劣慧の諸の衆生は癡愛自蔽するを以て唯し有相に依て恒に諸の斷常の時方と所造の業の善不善の諸相を樂ひ、盲冥にして、果を樂ひ求め、此の道を知解せず、彼等を度せんが爲の故に隨順して是の法を説く、祕密主かくの如く所説の處所に一地あるに隨つて治め堅固ならしめて未だ地に至らざる瞿摩夷及び瞿摸但羅を取て和合して之を塗れ次に香水の眞言を

以て灑淨せよ即ち眞言を説いて曰く、
 南麼三曼多勃駄喃一凡眞言の中に平聲字あらば皆稍上聲に阿鉢囉二底下同三迷伽伽
 那三迷三麼多奴揭帝鉢囉合吃栗合底微輸睇達摩駄略微成達爾莎訶
 行者次に中に於いて定意を以て大日を觀せよ、白蓮華座に處し髮髻を以て冠と爲
 す、種々の色香を放ち通身に悉く周遍せり、復當に正受到いて次に四方佛を想
 ふべし、東方をば寶幢と號く身色日暉の如し、南方は大勤勇なり、普く覺華開敷
 せり金色にして光明を放ち三昧にして諸苦を離れたり、北方は不動佛なり離惱清
 涼の定なり、西方は仁勝者なり是れを無量壽と名く、持誦者思惟して佛室に住せ
 よ、當にこの地を受持せんには不動大名を以てし、或は降三世を用ひ一切の利成
 就すべし、白檀を以て圓妙漫荼羅を塗畫せよ、中は第一我身第二は諸の救世第三
 は彼れと同じて等しき佛母虛空眼第四は蓮華手第五は執金剛第六は不動尊なり、
 想念して其の下に置いて塗香華等を奉れ、諸の如來を思念して誠を至して殷重を
 發し是の如くの偈を演説せよ、
 諸佛慈悲者、我等を存念し給ふが故に明日地を受持すべし、並に佛子當に降し給
 ふべし、是の如く説き已つて復當に此の眞言を誦じて曰く、

南麼三曼多勃駄喃一薩婆但他藥多二地瑟姪合那地瑟社合帝阿闍麗微麼麗

五 娑麼合羅囉六鉢囉合吃栗合底反鉢囉輸睇莎訶

持眞言行者次に悲念の心を發して彼の西方に依つて念を繋ぎ以て安寢して菩提心
 を清淨の中の無我を思惟せよ、或は夢の中に於いて菩薩大名稱と諸佛の量あるな
 きと衆の事業を現作したまふとを見、或は安慰の心を以て行者を勸囑し給ふ、
 汝衆生を念ふが故に曼荼羅を造作す、善哉摩訶薩畫する所甚だ微妙なり、復次
 に餘日に於いて受應度の人を攝受せよ、若し弟子の信心あつて種姓清淨に生れ、三
 寶を恭敬し深慧を以て身を嚴り、堪忍して懈倦無く尸羅淨を缺くこと無く忍辱に
 して慳慚ならず、勇健にして行願を堅くせん、是の如くならば應に攝受すべし、
 餘は則ち所觀なし、或は十或は八七或は五二一四に當に灌頂を作すべし、若し復
 數これを過ぎてもせよ、爾の時に金剛手祕密主復佛に白して言さく世尊當に云何
 が此の曼荼羅を名くる、曼荼羅とは其の義云何、佛の言はくこれをば諸佛を發生
 する曼荼羅と名く、極無比味、無過上味なり、この故に説いて曼荼羅と爲す、又
 祕密主無邊の衆生界を哀愍するが故にこれ大悲胎藏生曼荼羅の廣義なり、祕密主
 如來は無量劫に於いて積集せる阿耨多羅三藐三菩提の加持する所なり、是の故に

無量の徳を具へ給へり、當に是の如く知るべし、祕密主、一衆生の爲の故に如來は正等覺を成じ給へるにあらす、亦二に非ず、多に非ず、無餘記と及び有餘記との諸の衆生界を憐愍し給ふが爲の故に如來は正等覺を成す、大悲願力を以て無量の衆生界に於てその本性の如く而も法を演説し給ふ、祕密主、大乘の宿習無く未だ曾つて眞言乘の行を思惟せざるは、彼れ少分をも見聞し歡喜し信受すること能はず、又金剛薩埵若し彼の有情昔大乘眞言乘道の無量の門に於いて進趣し已て會て修行せよ彼等が爲の故に此に限つて名數を造立す、彼の阿闍梨亦當に大悲心を以て是の如くの誓願を立て、無餘の衆生界を度せんが爲の故に應當に彼の無量の衆生を攝受して菩提種子の因縁を作すべし。

持眞言行者是の如く攝受し已て彼れに命じ三たび自歸して説いて先の罪を悔いせしめよ、塗香華等を奉げ上り、諸の聖尊を供養せしめ、彼に三世無障礙智戒を授くべし、次に當に齒木を授くべし、若しは優曇鉢羅或は阿説他等を、結護し而も淨に作せ、香華を以て莊嚴せよ、端直にして本末に順せよ、東面或は北面にして嚼み已てこれを擲げしめよ、當に彼の衆生の成器と非器との相を知るべし三ところ修多羅を結んで次に等持の臂に繫げよ、是の如く弟子に受く、諸の塵垢を遠離

し信心を増發せしめんが故、當に隨順して法を説き慰諭して其の意を堅くせしむべし、是の如く偈を告げて言さく、

汝無等の利を獲て位大我に同せしめ一切の諸の如來この教の菩薩衆皆已に汝を攝受して大事を成辨す、汝等明日に於いて當に大乘の生を得べし、是の如く教授し已て或は夢寐の中に於いて僧の住處と園林の悉く巖好なると堂宇の相殊特なると顯敞諸の樓觀と幢と蓋と摩尼珠の寶と刀と悦意の華と女人の鮮白衣あつて端正にして色姝麗なると密親と或善友と男子の天身の如くなるると群牛の特乳に豊なるると經卷の淨無垢なると遍知と因縁覺と並に佛の聲聞衆と大乘の諸菩薩と現前に諸果を授け大海河池を度り及び所樂の聲を聞き空中に吉祥なりと言ふ當に意樂の果を與ふべしと云ふを觀見せん、是の如く等の好相を宜しく諦に分別すべし、此れと相違せんものをば當に知るべし善夢にあらすと、善く戒に住せんもの晨に起き師に白し已らんと、師この句法を説いて諸の行人を勸發せよ、此の殊勝の願道は大心の摩訶衍なり汝今能く志求す、當に如來を成就すべし、自然智の大龍を世間に敬ふこと塔の如し、有と無と悉く超越して無垢虛空に同じ、諸法は甚だ深奥なり、了し難し含藏無し、一切の妄想を離れ戲論本より無きが故に作業妙に無比に

して常に二諦に依る、これ殊勝の願に乗ず、汝當に斯の道に住すべし。
 爾の時に住無戲論執金剛、佛に白して言さく、世尊願はくは三世無礙智戒を説き
 給ひ、若し菩薩これに住する時は諸佛菩薩をして皆歡喜せしむる故に是の如く説
 き已て佛住無戲論執金剛等に告げて言給はく、佛子諦に聽け若し族姓の子この戒
 に住すれば身語意を以て合して一と爲る、一切の諸法を作さず、云何を戒と爲
 る、所謂觀察して自身を捨て、諸佛菩薩に奉獻す、何を以ての故に若し自身を捨
 つる時は彼の三事を捨つと爲す、云何が三と爲る、謂く身語意なり、是の故に族
 姓子身語意の戒を受くるを以て菩薩と名くることを得、所以何となれば彼の身語
 意を離れたるが故に菩薩摩訶薩かくの如く學すべし、次に明日に於いて金剛薩埵
 を以て自身を加持し、世尊毗盧遮那の爲に禮を作せ、淨瓶を取て香水を盛り滿て
 降三世の眞言を持誦して用つて之を加し初門の外に置いて用つて是の諸の人等
 に灑ぐべし、彼の阿闍梨次に淨香水を授與して彼れに飲ましめよ、心清淨の故に
 爾の時に執金剛秘密主偈を以て佛に問ひ上る、
 種智說中の尊、願はくは彼の時分を説き給へ、大衆は何の時に於いてか普く集めて
 靈瑞を現じ、曼荼羅の阿闍梨は慇懃に眞言を持たしめんと、爾の時に薄伽梵、持金

剛慧に告げ給はく、常に當にこの夜に於いて曼荼羅を作すべし、傳法阿闍梨、是
 の如く次に五色の修多羅を取つて一切の佛に稽首すべし、大毗盧遮那を以て親り
 自ら加持を作せ、東方を以て首と爲し對して修多羅を持せよ、齊に至し空に在
 て漸次に右に旋轉して是の如く南及び西、北方に終り竟はれ、第二に界を安立せ
 んとき亦初方より起せよ、諸の如來を憶念し所行上の説の如くせよ、右方及び後
 方、復た勝方に周せよ、阿闍梨次に廻りて涅哩底に依れ、受學對持のものは漸次
 に以て南に行ぐり、此れより右に旋轉して轉じて風方に依れ、師位は本處を移つ
 して火方に居せよ、持眞言行者復かくの如く法の修せよ、弟子は西南にあり、
 師は伊舎尼に居す、學者復旋轉して轉じて火方に依れ、師位は本處を移して、風方
 に住せよ、是の如く眞言者普く四方の相を作す漸次にその中に入る三位を以てこ
 れを分て、已に三分位を表して地相普く周遍せよまた一分に於いて差別し
 て以て三と爲よ、この中の最初の分は作業所行の道なり、その餘の中と後との分
 は聖天の住處なり、方に等しく四門あり、其の分劑を知るべし、誠心を以て殷重
 に諸聖尊を運布せよ、是の如く衆相を造さんには均調にして善く分別せよ、内心
 を妙白蓮にし、胎藏は正しく均等にして藏の中に一切の悲生漫荼羅を造れ十六央

具梨にせよ、此れを過ぎて是れその量なり、八葉正しく圓滿にして鬚髮皆嚴好に
 せよ、金剛の智印を遍く諸の葉の間に合せ、此の華臺の中より大日勝尊を現す
 金色にして暉耀具し、首に髮髻冠を持せり、救世圓滿の光ありて熱を離れ三昧に
 住せり、彼の東には一切遍知印を畫作すべし、三角にして蓮華の上にあり、その
 色皆鮮白なり、光焰遍く圍遶して皓潔にして普く周遍せり、次に其の北の維に
 於いて導師諸佛の母を以て晃曜あつて眞金色なり、縞素を以て衣と爲せり、遍く
 照すこと日光の猶し、正受にして三昧に住せり、復彼の南方に於ける救世の佛善
 薩大德聖尊の印を爲せり、號して滿衆願と名く、眞陀摩尼珠を白蓮の上に住まれり、
 北方の大精進觀世自在は光色皓月と商法と軍那華との如し、微笑にして白蓮に
 坐し、髻に無量壽を現せり、彼の右の大名稱聖者多羅尊をかけ青白色を相雜へ
 て中年の女人の状にせよ、合掌して青蓮を持し、圓光遍せざることを靡くして暉發
 せること猶淨金のごとし、微笑にして鮮白の衣なり、右邊に毗俱胝を以て手に數
 珠鬘を垂れ、三目にして髮髻を持し、尊形皓素の如し、圓光の色主なくして黃赤
 白相入せり、次に毗俱胝に近づきて得大勢尊を畫け、彼の服は商法の色にして大
 悲の蓮華手あり、滋榮して未だ敷けず、圍遶するに圓光を以てす、明妃をその側

に住めよ、持名稱者と號す、一切の妙瓔珞を以て金色の身を莊嚴せり、鮮妙の華
 枝を執り、左は鉢胤遇を持せり、聖者の多羅に近づきて白處尊に住めよ、髮冠に
 して純帛を襲うて鉢曇摩花の手あり、聖者の前に於いて大力持明王を作せ晨朝の
 日暉の色にして白蓮を以て身を嚴る、赫奕として焰鬘を成し吼怒して牙を出現せ
 り、利爪にして獸王の髮あり、何耶揭利婆なり、是の如くの三摩地は觀音の諸
 の眷屬なり、復次に華臺の表、大日の左方に能く一切願を滿せる持金剛慧者をお
 け、鉢孕遇華の色なり、或は復綠寶の如くせよ、首に衆寶の冠を戴き瓔珞を以て
 身を莊嚴せり、間錯を亦嚴飾し、廣多にして數無量なり、左に拔折羅を執り、周
 環して光焰を起せり、金剛藏の右には所謂忙莽雞をかけ、亦賢慧の杵を持せり、
 身を嚴るに瓔珞を以てせり、彼の右の次に大力金剛身を置くべし、使者衆圍遶し
 て微笑して同く瞻仰せり、聖者の左方には金剛商竭羅をかけ金剛鏢を執持せり、自
 部の諸使と俱なり、その身淺黃色にして智杵を以て標幟と爲せり、執金剛の下に
 於いて忿怒降三世をおけ、大障を摧伏するものなり號して月曆尊と名く三目にし
 て四牙現せり、夏時の雨雲の色にして阿吒吒の笑聲あり金剛寶を以て瓔珞とし衆
 生を護持するが故に無量の衆圍遶せり、乃至百千の手に衆の器械を操持せり、是

の如くの忿怒等は皆蓮華の中に住せり、次に西方に往いて無量の持金剛を畫け、
 種種金剛の印と形色と各差別にして普く圓滿の光を放つ、諸の衆生の爲の故なり
 眞言主の下に涅槃底の方に依て不動如來の使をかけ、慧刀縞索を持し、頂髮左肩
 に垂れたり、一目は諦に觀、威怒にして身に猛焰あり、安住して磐石に在す、面
 門に水波の相ありて充滿せる童子の形なり、是の如きは具慧者なり、次に風方に
 往きて復忿怒尊を畫すべし、所謂勝三世なり、威猛の焰圍繞し寶冠にして金剛を
 持せり、自の壽命を顧みず、専ら請うて教を受く、已に初の界域の諸尊の方位等
 を説く持眞言行人次に第二院に往く、東方の初門の中に釋迦牟尼を畫け、圍繞紫
 金色なり、三十二相を具せり、袈裟衣を被服し白蓮華臺に坐り、教をして流布せ
 しめん爲に、彼れに住して法を説く、次に世尊の右に於いて遍知眼を顯示せよ、
 熙怡の相にして微笑せり、遍體に圓淨の光あり、喜見無比の身なり、これを能寂
 母と名く、復彼の尊の右に於いて毫相の明を圖寫せよ、鉢頭摩華に住し圓照にし
 て商佉の色なり、如意寶を執持して衆希願を満足す、暉光あつて大精進なり救世
 の釋師子なり、聖尊の左方に如來の五頂を置け、最初をば白傘と名く勝頂と最
 勝頂と衆徳の火光聚と及與捨除頂とこれを五大頂と名く大乘の釋種なり應當に

是處に依て精心にして衆相を造るべし、次に其の北方に於いて淨居衆を布列せよ、
 自在と普華と光鬘と及び意生と名稱遠聞と等なり、各其の次第の如し、毫相の
 右に於て復三佛頂を畫け初をば廣大頂と名け次をば極廣大と名く、及び無邊音
 聲となり皆善く安立すべし、五種の如來の頂は白と黄と眞金色となり、復次の三
 佛頂は白黄赤兼備せり、其の光普くして深廣なり、衆嬰珞を以て莊嚴せり、所發
 の弘誓力、一切の願を皆滿す、行者の東の隅に於いて火仙の像を作せ、熾焰の中
 に住す、三點灰を以て標と爲す、身色皆深赤なり、心に三角の印を置く圓焰の中
 に在りて珠及び深瓶を持せり、左方に閻魔王をなせ、手に壇拏印を乗り水牛を以
 て座と爲す、震電玄雲の色なり、七母并に黑夜死後等圍繞せり、涅槃底鬼王をか
 け、刀を執るを恐怖の形にせよ、縛嚙拏龍王は縞索を以て印とせり、初方には釋
 天王をかけ、妙高山に安住せり、寶冠あつて瓔珞を被、跋折羅の印を持せり、及
 餘諸の眷屬の慧者善く分布せよ、左に日天衆を置く輿輅の中に在らしめよ、勝無
 勝の妃等翼從して侍衛せり、大梵を其の右に在け、四面にして髮冠を持せよ、唵
 字の相を印と爲し、蓮を執つて鵝の上に在け、西方には諸の地神と辯才と及び毗
 紐と塞建那と風神と商羯羅と月天となり、是等は龍方に依て之を畫して遺謬する

こと勿れ、持眞言行者不迷惑の心を以てせよ、佛子次に持明大忿怒を作すへし、
 右をば無能勝と號し、左をば無能勝妃といふ、持地神は瓶を奉けて虔敬にして長
 跪せり、及び二の大龍王難陀と跋難陀と對して、廂曲の中に處せり、通門の大護な
 り、所餘の釋種の尊の眞言と印壇との所説の一切の法は師具に開示すべし、持眞
 言行者次に第三院に至て先づ妙吉祥を圖せよ、其の身鬘金色なり、五髻の冠其の
 頂にあり、猶童子の形の如し、左に青蓮華を持す、上に金剛印を表せり、慈顏
 を以て遍く微笑して白蓮臺に坐せり、妙相圓普の光周布して互に暉映せり、右邊
 に次に網光童子の身を畫すべし、衆寶網を執持し種種の妙瓔珞あり、寶蓮華座に
 住して而も佛長子を觀す、左邊には五種の與願の金剛使を畫け所謂髻設尼と優婆
 髻設尼と及與質多羅と地慧と並に請召となり、是の如く五の使者に五種の奉教
 者あり、二衆共に圍繞して無勝者を侍衛せり、行者右方に於て次に大名稱の除
 一切蓋障を作せ、如意寶を執持せり、二分の位を捨て、當に入菩薩を畫すべく、
 所謂除疑恠と施一切無畏と除一切惡趣と救意慧菩薩と悲念具慧者と慈起大衆生と
 除一切熱惱と不可思議慧となり、次に復斯の位を捨て、北の勝方に至れ、行者一
 心を以て憶持し衆綵を布して而して具善忍の地藏摩訶薩を造れ、其の座極めて巧

麗ならしめよ、身焔胎に處せり、雜寶莊嚴の地綺錯し互相に間へたり、四寶を以
 て蓮華と爲し聖者の安住する所なり、及與大名稱の無量の諸の菩薩あり謂く寶
 掌と寶手と及與持地等と寶印手と堅意となり、上首の諸の聖尊各の無數の衆
 と前後に共に圍繞せり、次に復龍方に於いて當に虚空藏を畫すべし、勤勇にして
 白衣を被、刀の焔光を生ぜるを持す、及與諸の眷屬正覺所生の子、各其の次第
 に隨つて、正蓮の上に列坐せり、今彼の眷屬の大乗の菩薩衆を説かん、善く圖し
 藻續すべし、誦誠にして迷忘すること勿れ、謂く虚空無垢と次に虚空慧と名くる
 と及び清淨慧等と行慧と安慧等となり、是の如く諸の菩薩は常勤精進のもの
 なり、各其の次第の如く畫いて身を莊嚴せよ、略して大悲藏漫荼羅の位を説き竟
 んぬ、
 爾の時に執金剛祕密主、一切衆會の中に於いて誦に大日世尊を觀し上つて目暫く
 も瞬かす、而して偈を説いて曰く
 一切智慧者、世間に出現し給ふ彼の優曇華の時に乃ち一たび現はるゝが如し
 眞言所行の道は倍復甚だ遇難し、無量俱脰劫に作れる所の衆の罪業この漫荼羅
 を見るときは消滅して盡く餘なし、何に況や無量稱にして眞言行法に住せんをや

この無上句の眞言救世者を行すれば諸の悪趣を止斷し、一切の苦生せず、若し是の如くを行を修するときは妙慧深くして不動なり、時に普集會の一切大衆及び諸の持金剛者、一音聲を以て金剛手を讚歎して言く善哉善哉大勤勇、汝已に眞言の行を修行す、能く一切の眞言の義を問はんとす、我等も咸く意に思惟することあり、一切現に汝が證驗と爲るべし、眞言の行力に住するに依るなり、及び餘の菩提大心の衆も、當に眞言の法を通達することを得べし、

爾の時に執金剛祕密主復世尊に白して而して偈を説いて言さく云何なるか彩色の義復當に何の色を以てすべき、云何なるか運布せん是の色は誰をか初とせん、門標の旗量等をいかいせん、廂衛も亦是の如し、云何なるか諸門を建てん、願くは尊、その量を説き給へ、食華香等と及與衆の寶瓶とを奉じ、云何弟子を引かん、云何が灌頂せしめん、云何なるか師を供養せん、願くは護摩の處を説き給へ、云何なるか眞言の相、云何なるか三昧に住する、是の如く發問し已んぬ、牟尼諸法の王持金剛慧に告げ給はく、一心にして諦に聽くべし、最勝の眞言の道は大乗の果を出生す、汝今我に請問す、大有情の爲に説ん、彼の衆生界

を染むるに法界の味を以てす、古佛の宣説し給ふ所なり、是れを名けて色の義と爲す、先づ内色を安布す、外色を安布するに非ず、潔白を最も初めとなして赤色を第二と爲す、是の如く黃と及び青と漸次にして彩著せよ、一切の内は深玄にせよ、是を色の先後と謂ふ、立門の標幟を建てんこと量中胎の藏に同せよ、廂衛も亦是の如し、華臺は十六節なり、應に知るべし、彼の初門と内壇とは齊等せよ、智者外院に於いては漸次に増加す、彼の廂衛の中に於いて當に大護者を建つべし略して三摩地を説かん、一心にして縁に住せよ、廣義は復殊異なり、大衆生諦に聽け、佛一切空と正覺の等持とを説き給ふ、三昧を以て心を證知す、異縁に從て得るに非ず、彼れ是の如くの境界は一切如來の定なり、故に説いて大空と爲し薩婆若を圓滿す、

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第一終

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第二

入漫荼羅具緣眞言品第二之餘

爾の時に毗盧遮那世尊、一切の諸佛と同共に集會して各各に一切の聲聞と縁覺と菩薩との三昧道を宣説し給ふ、時に佛一切如來一體速疾力三昧に入り給ふ、於是世尊復執金剛菩薩に告げて言たまはく、
 我れ昔道場に坐して四魔を降伏し大勤勇の聲を以て衆生の怖畏を除く、是の時梵天等心に喜んで共に稱説す此れに由つて諸世間號して大勤勇と名けき、我れ本不生を覺り語言の道を出過す、諸過に解脱を得て因縁を遠離せり、空は虚空に等しと知る、如實相の智生ず、已に一切の暗を離れて第一實にして無垢なり、諸趣は唯し想と名となり、佛相も亦復然かなり、此の第一の實際は加持力を以ての故に世間を度せんが爲に而も文字を以て説き給ふ、
 爾の時に執金剛具德者、未曾有の開敷眼を得て一切智を頂禮して偈を説いて言さく
 諸佛甚だ希有權智不思議となり、一切の戲論を離れて法佛自然の智あり、世間の

爲に説いて衆の希願を満足せしめ給ふ、眞言の相かくの如し、常に二諦に依る、若し諸の衆生あつて此の法教を知るをば、世人供養すること猶し制底を敬ふが如くすべし、時に執金剛此の偈を説き已て諦に毗盧遮那を觀たてまつて目暫くも瞬かす、默然として住す、於是世尊復執金剛祕密主に告て言たまはく復次祕密主一生補處の菩薩は佛地の三昧道に住して造作を離れ、世間の相を知り、業地に住し堅く佛地に住す、復次に祕密主八地の自在の菩薩の三昧道は一切の諸法を得ず有の生を離れて一切の幻化なりと知る、この故に世に觀自在と稱す、復次に祕密主、聲聞衆は有縁の地に住して生滅を識り二邊を除き、極觀察智を以て不隨順の修行の因を得、これを聲聞の三昧道と名く、祕密主、縁覺は因果を觀察し無言説の法に住して無言説を轉せず、一切の法に於て極滅語言三昧を證せり、これを縁覺の三昧道と名く、祕密主、世間の因果及び業の若しは生、若しは滅して他の主に繋屬して空三昧生ず是れを世間の三昧道と名く、爾の時世尊、偈を説いて言たまはく
 祕密主當に知るべし、これ等の三昧道、若し佛世尊菩薩救世者縁覺聲聞の説に住する時は諸過を摧害す、若し諸天世間の眞言法教の道はかくの如きの勤勇者、衆

真言行者存意して遺忘すること勿れ、次に迦羅奢を具せ、或は六或は十八なり、
 諸の寶藥を備へ足し衆の香水を盛滿せよ、枝條上に垂れ布いて華の果實を間へ
 挿め、塗香等嚴飾す、結護して作淨すべし、頸に繫くるに妙衣を以てす、瓶の
 數或は増廣にす、上首の諸の尊等に各各に兼ねて服を奉れ、諸餘の大有情に一
 一に皆これを献せよ、是の如く供養を修して次に應度の者を引ひ、之に灑ぐに淨
 水を以てし、塗香華を授與し、菩提心を發して諸如來を憶念せしめよ、一切皆當
 に淨佛家に生るゝことを得べし、法界生の印及與法輪印を結んで金剛有情等而も
 用て加護を作せ、次に當に自ら諸佛の三昧印を結んで三轉して淨衣を加すべし、
 真言法教の如くせよ、而も用て其の首に覆ふて深く悲念の心を起して三たび三昧
 耶を誦すべし、頂に戴くに囉字を以てし嚴るに大空點を以てし周帀して燦鬘を開
 け、字門より白光を生ず、流れ出づること満月の如し、現に諸の救世に對して淨
 華を散せじめよ、其の所至の處に隨つて行人而も尊奉す、漫茶羅の初門の大龍廂
 衛の處に二門の中間に於て學人を安立せよ彼所に住して法教に隨つて而して衆の
 事業を作せ、是の如く弟子をして諸の過を遠離せしむべし、寂然護摩を作すべし
 護摩は法に依て住す、初めて中胎藏より第二の外に至つて漫茶羅の中に於いて無

疑慮の心を作す、其の自の肘量の如く陥りて光明の壇を作れ、四節を周界と爲し
 中に金剛印を表す、師位の右方に護摩の具支を分け、學人その左に住して蹲踞し
 て敬心を増す、自ら吉祥草を敷き、地に藉いて以て安座す、或は衆の綵色を布
 すべし彫輝し極めて嚴麗ならしめて一切の續事を成せよ、これ略護摩の處なり
 周帀して祥茅を布け端末互に相加して右に旋らせ皆廣く厚くして遍く灑ぐに香水
 を以てす、火光尊を思惟すべし、一切を哀愍するが故に應當に滿器を持して而も
 以て之を供養すべし、爾の時に善住者當に是の眞語を説くべし、
 南麼三曼多勃駄喃 一 嚧揭娜曳二 莎訶
 復三味手を以て次に諸弟子の慧手の大空指を持して略して護摩を奉持せよ、献す
 る毎に輒ち誠に誦して各別に三七に至せ、當に慈愍の心に住すべし、法に依つて
 眞實の言を以てす、
 南麼三曼多勃駄喃 一 阿去急摩訶 扇底下同 薩多 扇底羯囉 鉢囉合 腓摩達磨 爾入
 惹多 阿婆 嚧薩 嚧合 婆嚧 達麼 娑麼 多鉢囉 二合 鉢多 莎訶 鉢囉合 腓摩達磨 爾入
 行者護摩し竟て教へて觀施せしむべし、金銀衆珍寶象馬及車乘牛羊上衣服或は復
 た餘の資財なり、弟子當を誠を至して恭敬して殷重を起すべし、深心に自ら忻慶

して而して所尊に奉る淨捨を修行するを以て彼をして歡喜せしむるが故に已に爲
 に加護を作して召して而して告げて言ふべし今此の勝福田は一切の佛の所説なり
 廣く一切の諸の有情を饒益せんと欲ふが爲なり一切の僧に奉施せよ、當に大果
 を獲べし、無盡の大資財世説するに常に隨つて生ず、僧を供養するものは具徳の
 人に施すを以てなり、是の故に世尊應當に歡喜を發して力に隨つて肴膳を辨へて
 現前僧に施すべしと説き給ふ、爾の時に毗盧遮那世尊復執金剛祕密主に告げて偈
 を説いて言はく、
 汝摩訶薩埵、一心に諦に聽くべし、當に廣く灌頂を説くべし、古佛の開示し給ふ
 所なり、師第二の壇を作して中漫茶羅に對して外界に圖畫せよ、相距ること二肘
 量なり、四方正に均等なり、内に向へて一門を開け、四執金剛を安して其の四肘
 の外に居せしむ謂く住無戲論と及び虚空無垢と無垢眼金剛と被雜色衣等なり、内
 心には大蓮華をなせ、八葉及び鬚髮あり、四方の葉の中に於て四伴侶の菩薩あり
 彼の大有情の往昔の願力に由るが故に云何か名けて四と爲る、謂く惣持自在と念
 持と利益心と悲者菩薩等なり、所餘の諸の四葉には四奉教者を作る、雜色と衣滿
 願と無礙と及び解脱となり、中央に法界の不可思議の色を示す、四寶所成の瓶に

衆の藥寶を盛り滿つ、普賢と慈氏尊と及與除蓋障と除一切惡趣と而もこれを以て
 加持を作す、彼れ灌頂の時に於いて當に妙蓮の上に置くべし、献するに塗香華燈
 明及び闍伽を以て上に幢幡蓋を以て蔭ひ、攝意の音樂、吉慶伽陀等の廣多の美妙
 言を奉れ、是の如く供養して歡喜を得しめ已れ、親り諸の如來に對し上つて而
 も自ら其の頂に灌ぐ、復た當に彼の妙善の諸の香華を供養すべし、次に金篋を執
 つて彼が前に在て住して慰諭して歡喜せしめ是の如くの伽陀を説くべし、佛子佛
 汝が爲に無智の膜を次除し給ふ、猶し世の醫王の善く金篋を用ふるが如し、持眞
 言行者復た當に明鏡を執て無相の法を顯さんが爲にこの妙伽陀を説くべし、諸法
 は形像無し、清く澄んで垢濁なし、執無く言説を離れたり、但し因業より起る、
 是の如く此の法の自性染汗なきことを知る、世の無比の利を爲す、汝佛心より生
 すと、次に當に法輪を授けて二足の間に置き慧の手に法螺を傳へて復た是の如く
 の偈を説くべし、汝自ら今日に於て救世の輪を轉ず、其の聲普く周遍せんとし
 て無上の法螺を吹くべし、異慧を生ずること勿れ、當に疑悔の心を離るべし、世
 間の勝行の眞言の道を開示す、常に是の如くの願を作し佛の恩徳を宣昌よ、一
 切の持金剛皆當に汝を護念すべし、次に當に弟子に悲念の心を起すべし、行者應

中に入て三昧耶の偈を示すべし、佛子汝今より身命を惜まざるが故に常に法を
 捨て菩提心を捨離し一切の法を慳吝し衆生を利せざる行をすべからず、佛三昧耶
 を説き給ふ、汝善く戒に住するもの自の身命を護るが如く戒を護ること亦是くの
 如くせよ、誠を至して恭敬して聖尊の足を稽首したてまつるべし、所作教に隨つ
 て行せよ疑慮の心を生ずること勿れ。
 爾の時金剛手佛に白して言さく世尊若し諸の善男子善女人有て此の大悲藏生
 大漫荼羅王三昧耶に入れば彼れ幾所の福德の聚を獲ん、是の如く説き已ぬ。佛金
 剛手に告て言まはく秘密主初發心より乃し如來を成ずるに至る迄所有の福德の聚
 なり、是の善男子善女人の福德の聚は彼れと正等なり、秘密主此の法門を以て當
 に是の如く知るべし、彼の善男子善女人は如來の口より生ぜる佛心の子なり、若
 し是の善男子善女人の所在の方所には即ち爲に佛有して佛事を施作したまふ、是
 の故に秘密主若し佛を供養せんと樂欲は即ち當に此の善男子善女人を供養すべし、
 若し佛を見たてまつらんと樂欲は即ち當に彼を觀すべし、時に金剛手等の上首
 の執金剛及び普賢等の上首の諸の菩薩同聲に説いて言さく世尊我等今より已後
 應當にこの善男子善女人を恭敬供養すべし、何を以ての故に世尊彼の善男子善女

人を見るは佛世尊を見たてまつるに同じきが故に。
 爾の時毗盧遮那世尊復た一切衆會を觀じ執金剛秘密主等の諸の持金剛者及び大
 衆に告げて言はく善男子、如來の出世の無量の廣長の語輪の相を有す、巧色摩
 尼の如く能く一切の願を満して無量の福德を積集し、不可害の行に住する三世無
 比力の眞言句なり、是の如く言たまひ已ぬ、金剛手秘密主等の諸の執金剛及
 び大會の衆同聲に説いて言さく世尊今正しくこれ時なり、善逝今正しく是れ時な
 り。
 爾の時毗盧遮那世尊、一切の願を満する廣長の舌相を出して遍く一切佛刹に
 覆ふ清淨法幢高峯觀三昧に住したまふ、時に佛定より起て爾の時に一切如來法
 界に遍じ無餘の衆生界を哀愍し給ふ聲を發しこの大力大護の明妃を説いて曰く、
 南麼薩婆他引藥帝弊下同一薩婆佩野微藥帝弊二微濕縛合二契弊三薩婆他引唵四
 缺羅吃沙合摩訶引沫麗五薩婆他六藥多奔呢也合爾入闍引帝七吽吽八怛囉合磔但
 囉合磔九阿鉢囉合底反訶諦十莎訶
 時に一切如來及び佛子衆この明を説き已て即時に普遍く佛刹六種に震動す、一切
 の菩薩未曾有の開敷眼を得て諸佛の前に於いて悅意の言音を以て偈を説いて言た

まはく、諸佛は甚だ奇特なり、この大力護を説きたまふ、一切の佛護持し給ふことと城地皆固密が如し、彼の心を護て住するに由てあらゆる障を爲すもの毗那夜迦等の悪形の諸の羅刹一切皆退散す、眞言を念する力の故に時に薄伽梵廣大法界の加持を以て即ち是の時に於いて法界胎藏三昧に住したまふ、この定より起つて入佛三昧耶の持明を説いて曰く、南麼三曼多勃駄喃一阿三迷二咀囉合三迷三三麼曳四莎訶即ち爾の時に一切佛刹一切菩薩衆會の中に於てこの入三昧耶の明を説き已ぬ、諸の佛子等同くこれを聞くもの一切の法に於いて遠越せず、時に薄伽梵復た法界生の眞言を説いて曰く

薩嚩合婆嚩句痕三
 金剛薩埵の加持の眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 達摩駄賭二

痕
 金剛鎧の眞言に曰く
 南麼三曼多伐折囉合 一 伐折囉合 迦嚩遮併二
 如來眼又觀の眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 但他引 揭多 斫吃 莖合 尾也合 嚩
 路迦也三 莎訶

塗香の眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 微輸上 駄健杜引 納婆合 嚩二 莎訶、
 華の眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 摩訶引 妹咀囉也合 毗度合 弩藥帝三 莎

燒香の眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 達摩駄賭 弩藥帝二 莎訶
 飲食の眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 阿囉囉二 迦羅羅隣 捺那引 沫隣捺泥三
 摩訶引 沫履四 莎訶
 燈の眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 但他引 揭多 喇旨合 薩叵合 囉嚩嚩婆
 去袈娜三 伽伽狻陁哩耶四 二合 莎訶

闍伽の眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 伽伽那三 摩引 三摩二 莎訶
 如來頂の相眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 伽伽那難多 薩發合 囉嚩二 微輸上
 馱達摩爾入 閣引 多三 莎訶
 如來甲の眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 伐折囉合 入嚩合 羅二 微薩普合 囉併
 三 莎訶

如來圓光の眞言に曰く
 南麼三曼多勃駄喃一 入嚩合 羅引 摩履爾二 但他引 藥多
 引 嚩旨三 莎訶

如來舌相の眞言に曰く

薩底也合達摩鉢羅合底反 瑟恥合多四 莎訶

息障品第三

爾の時に金剛手又復毗盧遮那世尊に請問して偈を説いて言さく、云何か道場の時に諸の障者を淨除して修眞言行人をして能く惱害を爲すこと無き、云何か眞言を持する、云何か彼れ果を成ずる、是の如く發問し已つて大日尊歎じて言はく、善哉摩訶薩、快く是の如くの語を説く、汝が心の所問に隨つて今當に悉く開示すべし、障者は自心より生ず、昔の慳慳に隨順す、彼の因を除かんが爲の故に此の菩提心を念すべし、善く妄分別の心思より生ずる所を除かんは菩提心を憶念せよ、行者諸過を離る、常に當に意に不動摩訶薩を思惟し彼の密印を結んで能く諸の障礙を除くべし、祕密主復た聽け散亂の風を繫除せんこと阿字を我が體と爲し、心に訶字門を持せよ、健陀以て地に塗つて而して大空點を作して嚩臽の方に依つて闔ふに捨囉梵を以てす、彼の器に大心の彌盧山を思念せよ、時時にその上にあり、阿字の大空點あり、先佛の宣説したまふ所なり、能く大風を縛す、大有情諦に聽け行者駛雨を防ぐには囉字門を思惟す、大力火光の色

南麼三漫多勃駄喃一摩訶摩訶二但他葉多爾訶嚩三合

なり、威猛にして熾なる熾鬘あり忿怒にして遏伽を持せり、所起の方分に隨つて地を治め陰雲を興す、斷するに慧刀の印を以てす、昏蔽して尋ち消散す、行者無畏の心を以て或は箭羅劍を作し、是の金剛槩を以て一切、金剛に同じ、復次に今當に一切の諸障を息むることを説く眞言の大猛不動大力者を念るべし、本漫茶羅に住すと行者或は中に居して彼の形像を三昧の足を頂戴すと觀せよ、彼の障當に淨除すべし、息滅して生ぜず、或は羅迦迦を以て微妙と共に和合して行者形像を造つて而も以てその身に塗れ、彼の諸の執着のもの斯の對治に由るが故に彼の諸根熾然なり、疑惑の心を生ずること勿れ、乃至釋梵の尊我が教に順はざるが故に尙し當に爲に焚せらるべし、況や復た餘の衆生をや。爾の時に金剛手、佛に白して言さく世尊我れ佛の所説の義を解るが如くに我も亦是の如し、諸の聖尊の本漫茶羅の位に住し威神あらしむること無し、何を以ての故にの如く住するに由るが故に如來の教勅を能く隱蔽すること無し、何を以ての故に世尊即ち一切の諸の眞言の三昧耶とし、所謂自種性に住するが故なり、是の故に眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は亦當に本位に住して諸の事業を作すべし、又祕密主若しは諸色と彼の諸の聖尊の漫茶羅位とを説く、諸尊の形相も

當に知るべし、亦爾なりこれ則ち先佛の所説なり、祕密主未來世に於いて劣慧無信の衆生かくの如くの説を聞きて信受すること能はず、無慧を以ての故に疑惑を増す、彼れ唯し聞くが如く堅く住して修行せざれば自ら損し他を損す、是の如く言ふを作さば彼の諸の外道に是の如きの法あり、佛の所説に非ずと彼の無智の人當に是の如くの信解を作すべし、爾の時に世尊偈を説いて言く、
一切智の世尊は諸法に自在を得たり、その通達する所の如く方便を以て衆生を度したまふ、是れ諸の先佛の説なり、法を求むるものを利益したまふ、彼の愚夫は諸佛の法相を知らず、我れ一切の法は所有の相皆空なりと説く、常に眞言に住して善く決定して業を作すべし。

爾の時に諸の執金剛には祕密主を上首を爲し、諸の菩薩衆には普賢を上首と爲し毗盧遮那佛を稽首したてまつり各各の言音を以て世尊に清白して此の大悲藏生大漫荼羅王に於て通達する所の如くに法界の清淨門の眞言の法句を演説せんと樂欲す
爾時に世尊無壞の法爾の加持を以て諸の執金剛及び菩薩に告げて言く善男子當に

通達する所の如くに法界の衆生界を淨除する眞實の語句を説くべし、時に普賢菩薩即時に佛境界莊嚴三昧に住して無礙力の眞言を説いて曰く
南麼三曼多
勃駄喃一三麼多引奴揭多二微囉閣達摩哩入闍多三摩訶引摩訶四莎訶
時に彌勒菩薩、發生普遍大慈三昧に住して自心の眞言を説いて曰く
南麼三曼多
曼多勃駄喃一阿爾單若耶二薩婆薩埵引捨耶弩藥多三莎訶
爾の時に虚空藏菩薩、清淨境界三昧に入て自心の眞言を説いて曰く
南麼三曼多
三曼多勃駄喃一阿引迦奢三麼多引弩藥多二微質怛囉引嚩羅達羅三莎訶
其の時に除一切蓋障菩薩、悲力三昧に入て眞言を説いて曰く
南麼三曼多
吠喃一阿去薩埵係多引毗庾合弩藥多二但嚩合嚩嚩三莎訶
爾の時に觀世自在菩薩、普觀三昧に入て自心及び眷屬の眞言を説いて曰く
南麼三曼多
南麼三曼多勃駄喃一薩嚩怛他引藥多嚩盧吉多二羯嚩儻摩也三囉囉囉吽若四莎訶
得大勢眞言に曰く
南麼三曼多勃駄喃一
多羅尊眞言に曰く
南麼三曼多勃駄喃一
大毗俱胝眞言に曰く
南麼三曼多勃駄喃一薩婆陪也二但囉合散爾平吽吽薩破

合二也二莎囉合詞

白處尊眞言に曰く

南麼三曼多勃駄喃一但他引藥多微灑也二三婆去吠三鉢曇

摩合摩履爾四莎詞

南麼三曼多勃駄喃一吽法引陀畔闍二薩破合吒也三莎

何耶揭唎囉眞言に曰く

南麼三曼

多勃駄喃一詞詞二素上但弩三莎詞

曼多勃駄喃一係係俱摩囉迦二微目吃底二合鉢他悉體下同多三薩麼合囉薩麼合囉

爾の時に金剛手、大金剛無勝三昧に住して自心及び眷屬の眞言を説いて曰く

忙莽計眞言に曰く 南麼三曼多伐折囉根一但囉合吒輕但囉合吒二若衍底反三

金剛鎖眞言に曰く 南麼三曼多伐折囉根一滿陀滿陀也二慕吒慕吒也伐折路合

唵婆合二吠三薩囉但囉引鉢囉合底反詞語四莎詞

金剛針眞言に曰く 南麼三曼多伐折囉根一韻喇合吽發吒二莎詞

合素旨嚩入囉泥三莎詞 南麼三曼多伐折囉根一薩婆達麼你入喇吠合達爾二伐折囉

一切持金剛眞言に曰く 南麼三曼多伐折囉根一吽吽吽二發吒發吒發吒鬚髯三

一切諸奉教者眞言に曰く 南麼三曼多伐折囉根一係係緊質囉引也徒二訖唎合

曼多勃駄喃一薩婆吃麗合奢爾入素捺那二薩婆達摩囉始多鉢囉合鉢多三伽伽那三摩

引三摩四莎詞 南麼三曼多勃駄喃一勃囉泥二囉囉鉢囉合鉢帝吽三莎詞

毫相眞言に曰く 南麼三曼多勃駄喃一跋鏤鏤二吽吽三發吒發吒莎詞

一切諸佛頂眞言に曰く 南麼三曼多勃駄喃一地入噉合地入噉合噉駮駮合駮駮合

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第三

世間成就品第五

その時に世尊また執金剛祕密主に告げて偈を説いて言たまはく
 眞言教法の如くすれば彼の果を成就す、當に字字相應すべし、句句亦かくの如し、
 心想を作して念誦して善く一落及に住せよ初の字は菩提心なり、第二をば名けて
 聲と爲す、句を想ふて本尊と爲す、而も自處に於いて作すべし。第三の句は當に
 知るべし即ち諸佛の勝句なり、行者觀じて彼の極圓淨の月輪に住すと、中に於
 て誦に誠に諸字を想ふて次第の如くす、中に字句等を置いて想ふてその命を淨
 む、命とは所謂風なり、念出入の息に隨ふべし、彼れ等を淨除し已て先持誦の法
 を作せ、眞言に善住するもの次に一月念誦すべし、行者前方便に一一の句通達す、
 諸佛大名稱この先受持を説きたまふ、次に當に所有に隨て塗香華等を奉る
 べし、正覺を成せんが爲めの故に自の菩提に廻向すべし、是の如く兩月に於て
 眞言當に無畏なるべし、次にこの月を滿し已て行者持誦に入るべし、山峯と或は
 牛欄と及び諸の河潭等と四衢道と一室と神室と大天室となり、彼の漫荼羅處は

悉く金剛宮の如くせよ、この處にして結護し、行者成就を作せ、即ち中夜分
 を以てし或は日出の時に於て智者應當にかくの如き相現ありと知るべし、吽聲あ
 り或は鼓音あり、若しまた地震動し及び虚空の中に悦意の言辭あるを聞く知るべ
 し是の如くの相あらば悉地の物意の如し諸佛兩足尊彼の果を宣説したまふ、この
 眞言行に住すれば必定して當に成佛すべし、一切の種類に應じて常に眞言を念持
 せよ、古佛大仙の説なり、故に應當に憶念すべし、

悉地出現品第六

その時に世尊また諸大衆會を觀じて一切の願を満足せしめんと欲ふが爲めの故に
 また三世無量門決定智圓滿の法句を説きたまふ、
 虚空は無垢にして自性なれば、能く種種の諸の巧智を授く、本より自性
 常に空なるに由るが故に、緣起甚深にして見るべきこと難し、長恒の時に於
 て殊に勝進して、念に隨て無上の果を施與す、譬へば一切趣の宮室、虚
 空に依ると雖も着行なきが如く、この清淨の法も亦かくの如し、三有をして
 餘りなからしめ清淨生ず、昔の勝生これを嚴修するが故に、一切如來の行
 あることを得たり、他句の有にあらす得べきこと難し、世遍明を作すこと世

尊の如し、極清淨修行の法を説きたまふ、深廣にして無盡なり分別を離れ
 たり、その時に毗盧遮那世尊この偈を説き已て金剛手等の諸の大衆會を觀察し
 て執金剛に告げて言はく善男子各各に當に法界の神力悉地流出の句を現すべし、
 若し諸の衆生かくの如きの法を見る、歡喜踊躍して安樂の住を得べし、かくの
 如く説き已て諸の執金剛、毗盧遮那世尊の爲に禮を作すことは是くの如し、法主
 の教勅したまふ所に依る、また佛に請じて言さく唯し願くは世尊、我等を哀愍し
 て悉地流出の句を示現したまへ、何を以ての故に尊者薄伽梵の前に於て自ら通
 達する所の法を宣示せばこれ宜しき所にあらず、善哉世尊唯願くは未來の衆生を
 利益し安樂したまふ故に時に薄伽梵毗盧遮那、一切の諸の執金剛に告げて言は
 く、善哉善哉善男子如來所説の法毗奈耶の一法を稱讚す、所謂差あるなり若し有
 羞の善男子善女人かくの如き法を見れば速に二事を生ず謂くなすべからざること
 を作さざると衆に稱讚せらるゝとなり、復二事あり謂く未だ至らざる所に至らし
 むる、佛菩薩と同處なることを得、また二事あり謂く尸羅に住すると人天に生ず
 るとなり、善哉諦に聽き善く思ひこれを念せよ、われ當に眞言の成就流出相應
 の句を宣説すべし、諸の流出相應の句は眞言門に菩提を修むる諸の菩薩速

にこの中に於て眞言の悉地を得べし、若しは行者曼荼羅尊を見印可せられ眞
 語を成就し菩提心を發す、深信し慈悲あつて慳悞あることなく調伏に住し能善く
 從緣所生を分別し禁戒を受持し善く衆學に住し巧方便を具し勇健し、時非時を知
 り好んで惠捨を行じ心に怖畏なく、眞言行法を勤修し、眞言の實義を通達し常に
 坐禪を樂ひ成就を作さんと樂ふ、秘密主譬へば欲界に自在悦滿意の明あり乃至一
 切の欲處の天子こゝに於て迷醉す衆妙の雜類戲笑を出だし及び種種の雜類の受用
 遍受用を現じて自の變化する所を他化自在天等に授與し而して亦自らこれを受用
 するが如く、又善男子、摩醯首羅天、勝意生の明あり、能く三千大千世界の衆生
 の利益を作し、一切の受用遍受用を化して淨居の諸天に授與し亦復自らこれを受
 用するが如く、又幻術の眞言の能く種種の園林人物を現するが如く、阿修羅の眞
 言の幻化の事を現するが如く、世の咒術の毒及び寒熱等を攝し、摩怛哩神の眞言
 の能く衆生の疾疫灾癘を作し及び世間の咒術の衆毒及び寒熱等を攝除し能く熾な
 る火を變じて清涼を生ずるが如し、この故に善男子當に是の如くの流出の句の
 眞言の威徳を信すべし、この眞言の威徳は眞言の中より出づるにもあらず、亦衆
 生に入るにもあらず、持誦者の處に於て得べきことあるにもあらず、善男子眞言

加持力の故に法爾にして生ず、過越する所なし、三昧を越えざるを以ての故に甚
 深不思議の縁生の理なるが故に、この故に善男子當に不思議法性に隨順し通達し
 て常に眞言道を斷絶せざるべし、
 その時に世尊また三世無礙力の依如來加持不思議力の依たる莊嚴清淨藏三昧に
 住したまふ、即時に世尊三摩鉢底の中より無盡界の無盡の語表を出したまふ、法
 界力と無等力と正等覺の信解とに依て一音聲を以て四處に流出したまふなり普
 一切法界に遍して虚空と等しくして至らざる所なし眞言に曰く
 南摩薩婆他引藥帝弊反一微濕嚩合目契弊反二薩婆他三阿阿三聞囉四
 正等覺の心これより普く遍す即時に一切法界の諸の聲聞正等覺標幟の音より互
 に聲を出す、諸の菩薩これを聞き已て未曾有の開敷眼を得微妙の言音を發して
 一切智、離熱者の前に於いて頌を説いて曰さく
 奇哉眞言行、能く廣大の智を具す、若しこれを遍布するもの佛の兩足尊と成る、
 この故に勤めて精進して、諸佛の語心に於て常に無間の修を作し、心を淨うして
 我を離るべし、爾の時に薄伽梵またこの法句を説きたまふ、正等覺心に於て成
 就を作さんとおもはば園苑と僧房とに於てし若しは巖窟の中に在てし或は意所樂

の處にせよ、彼の菩提心を觀じて乃し初安住に至れば疑慮の意を生せず、隨て
 彼の一の心を取て心を以て心に置き、極淨の句を證して無垢なり安すること不
 にして分別せざることを鏡の如し、現前すること甚だ微細なり、若し彼れ常に觀察
 し修習して相應すれば乃至本所尊と自身との像皆現す、第二正覺句、鏡漫茶羅の
 大蓮華王座に於いて深邃にして三昧に住す、捨持の髮髻冠にして圍繞するに無量
 の光あり、妄執分別を離れて本寂なること虚空の如し、彼の中に於いて思惟して
 攝意の念誦を作せ、一月に等引を修して持して一落又を滿せよ、これを最初月の
 持眞言の法則と爲す、次に第二月に於いて塗香華等をたてまつりて而も以て種種
 の衆生類を饒益することを作せ、またまた他月に於いて諸の利養を捨棄せよ、
 時に彼れ瑜伽に於いて思惟すること自在なり、一切障なうして諸の群生を安樂
 ならしめんと願うて、如來の稱讚したまふ所の圓果を成せんと樂欲し、或は一切
 有情の衆の希願を滿足す、理に應じて障蓋なく、而してこの攀縁を生ず、傍生
 相瞰食する所有の苦永く除き常に諸の鬼界をして飲食皆充滿せしめ、地獄の中
 の受苦種種の諸の楚毒、當に願くは速に除滅すべし、我が功德を以ての故に
 及び餘の無量の門、數數に心に思惟して廣大の悲愍を發し三種の加持の句を以て

一切を想念して心に眞言を誦持す、我が功德力と如來加持力と及與法界力と衆生界に周遍せるを以て、諸の念求の義利悉く皆これを饒益す、彼れ一切理に如へば所念皆成就す、

ここに薄伽梵即ちその時に於いて虚空等力虚空藏轉明妃を説いて曰く、南麼薩婆他引葉帝弊反一微濕嚩合目契弊反二薩婆他三欠四唱弩藥帝薩叵合囉係門五伽伽娜劔六莎訶

これを持すること三轉すれば彼の所生に隨て善願皆亦成就す、行人滿月に於いて次に作持誦に入るべし、山峰と牛欄の中と寒林と或は河灘と四衢と獨樹下と忙但哩天室となり、一切金剛色にせよ嚴淨にして金剛に同じ、彼の中の諸の障者、攝伏せられて心迷亂せん、四方相周布せよ、一門及び通道あり、金剛互に連屬し金剛結して相應せよ、門門に二一の守護あり、不可越と相向となり、手を擬して指を上げ、朱目にして奮怒形あり慇懃に隅角に輪羅燭光の印を畫せよ、中に妙金剛座あり方位正しく相直てよ、その上に大蓮華あり八葉にして鬚髮較けたり、當に金剛手の金剛の慧印を結ぶべし、一切佛を稽首し數數に堅く誓願して是處を護持し及び諸の藥物を淨むべし、この夜に於いて持誦すれば清淨

にして障礙なし、或は中夜分に於き或は日出の時に於いて彼の藥物當に轉じて圓光普く暉燦なるべし、眞言者自ら取て大空に遊歩し、住壽にして大威徳あり、生死に於いて自在あり、世界の頂を行いて種種の色身を現す、具徳吉祥者展轉して供養せよ、眞言の所成物これを名けて悉地と爲す、分別の藥物を以て無分別を成就す、
祕密主一切世界の諸の現在等の如來應正等覺は方便波羅蜜を通過したまへり、彼の如來、一切の分別は本性空なりと知れども方便波羅蜜の力を以ての故に無爲に於いて有爲を以て表と爲し展轉相應して衆生の爲に示現して法界に遍す、法を見安樂に住し歡喜の心を發すことを得しめ、或は長壽を得、五欲に嬉戲して自ら娛樂し佛世尊の爲に供養を作す、是の如くの句を證すること一切世人は信ずること能はざる所なり、如來この義利を見たまふ、故に歡喜の心を以てこの菩薩の眞言行道の次第法則を説きたまふ、何を以ての故に無量劫に於いて勤求して諸の苦行を修すれども得ること能はざる所なり、而るに眞言門に道を行ずる諸の菩薩は即ちこの生に於いてこれを獲得す、復次に祕密主眞言門に菩薩の行を修する菩薩はかくの如く計都竭伽と傘蓋と履屣と眞陀摩尼と安膳那藥盧遮那等を以て

三落叉を以て成就を作し亦悉地を得、祕密主若し方便を具する善男子善女人は樂求する所に隨て所作あれば彼れ唯心自在にして成就を得、祕密主諸の因果を樂欲するものは祕密主、彼の愚夫の能く眞言と諸の眞言の相とを知るにあらす何を以ての故に因は作者にあらす彼の果は則ち不生なりと説く、この因は因すら尙し空なり、云何が果あらん、當に知るべし眞言の果は悉く因業を離れたり、乃至身に無相三摩地を證觸するときは眞言者當に悉地は心より生ずることを得べし、その時に金剛手、佛に白して言さく世尊唯願くはまた此の正等覺の句の悉地成就の句を説きたまへ、諸の此の法を見る善男子善女人等は心に歡喜を得、安樂を受けて住し法界を害せず、何を以ての故に世尊法界とは一切如來應正等覺説いて即不思議の界と名く、是の故に世尊眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩はこの法界の分折し破壊すべからざるを通達することを得、かくの如く説き已て世尊、執金剛祕密主に告げて言まはく善哉善哉祕密主汝また善哉よく如來に是の如くの義を問ふ、汝當に諦に聽き善く之を思ひ念すべし、吾れ今演說せんと祕密主の言さく、是の如し世尊願くは聞かんと樂欲す、佛、祕密主に告げたまはく阿字門を以て而も成就を作すべし、若しは僧の所住の處に在て、若しは山窟の中にし或

は淨室に於いてせよ、阿字を以て遍く一切の支分に布して三落叉を持せよ、次に滿月に於いてその所有を盡くして以て供養すべし、乃至普賢菩薩、文殊師利執金剛等或は餘の聖天現前し摩頂し唱へて言く善哉行者と當に稽首作禮し闍伽水を奉るべし、即時に不忘菩提心三昧を得、又かくの如く身心輕安なるを以てこれを誦習すれば當に隨生と心清淨と身清淨とを得べし、耳の上に置いてこれを持すれば當に耳根清淨なることを得べし、阿字門を以て出入の息に作し、三時に思惟せよ、行者その時に能く持すれば壽命長劫にして世に住す、囉闍等に愛敬せられんと願せば即ち訶字門を以て度すべき所のものを作して鉢頭摩華を授與し自ら商估を持して互相に觀て即ち歡喜を生ず、その時に毗盧遮那世尊また一切大會を觀じて執金剛祕密主に告げて言はく金剛手、諸の如來の意より生じて業戲の行舞をなすことあり、廣く品類を演ぶ四界を攝持して心王に安住し、虚空に等同なり、廣大の見非見の果を成就し、一切の聲聞及び辟支佛諸の菩薩位を出生し、眞言門修行の諸の菩薩をして一切の希願皆悉く満足して種々の業を具して無量の衆生を利益せしむ、汝當に諦に聽き善くこれを思念すべし、吾れ今演說せん、祕密主、云何ん行舞して一切廣大

の成壞の果を作し持眞言者一切を親り證するや、その時に世尊頌を説いて曰く
 行者次第の如く、先づ自の眞實を作せ、前の如く法に依て住し、正しく如來を思
 念せよ、阿字を自體と爲し、並に大空點を置き、端嚴にして遍く金色なり、四角
 金剛の標をなせ、彼の中に於いて一切處尊佛を思念せよ、これ諸の正等覺、自
 の眞實想を説く、修行して疑慮せざれば、自の眞實の相生す、當に世間の一切衆
 の爲に利樂を得べし、廣大の希有を具し、如幻の句に住す、無始の時より宿植の
 無智諸有の迫めは、行者等引を成ずるを以て、一切皆消除す若し、彼の心の無上
 菩提心を觀すれば、眞言葉を持するが故に、淨非淨の果に於いて、理に應じて常
 に染なし、蓮の淤泥を出づるが如し、何に況んや自體に於いて、人中尊と成るこ
 とを得んをや、
 その時に毗盧遮那世尊、又復降伏四魔金剛戲三昧に住して四魔を降伏し六趣を解
 脱して一切智を満足する金剛字句を説きたまふ、
 南麼三曼多勃駄喃一阿呼 味囉吽欠呼之聲
 時に金剛手祕密主等の諸の執金剛普賢等の諸の菩薩及び一切大衆、未曾有の
 開敷眼を得、一切薩婆若を稽首して而して偈を説いて言はく、

これは諸佛菩薩、救世の諸の庫藏なり、これに由て一切の佛、菩薩救世者、及
 與因縁覺、聲聞の煩惱の害る、能く所行地に遍して、種々の神通を起し、彼れ無
 上智、正覺無上智を得、この故に願くは廣くこの教の諸の方便及與布想等の種
 々の衆の事業を説きたまへ、諸の大乗無上の眞言行を志求せんもの法を見る
 べし、安住せるもの當に歡喜住を得べし、是の如き偈を説き已て、大日世尊の言
 はく、普く皆諦に聽き一心にして等引に住すべし、大金剛地際を以て、時に下
 身を加持す、この法を説かんが爲の故に、菩提座を現す、最勝の阿字の句、大因
 陀羅輪なり、當に知るべし内外等、金剛漫荼羅なり、中に一切を思惟す、説いて
 瑜伽座と名く、阿字は第一命なり、これを引攝の句と爲す、常に大空點を安せよ、
 能く攝し諸果を授く、行者一月に於いて、金剛慧印を結んで、三時に持誦を作せ、
 無智の城を摧毀し、不動堅固なることを得、天脩羅壞ること莫れ、乃至自意に隨
 て、増益の事成就す、行者一切常漫荼羅の中に金色光明の身を作せ、上に髮髻
 冠を持す、正覺三昧に住せり、大金剛句と名く、金剛と蓮華と刀と素鵝と及び金
 と地と、眞陀末尼寶と、これ等の衆の器物を大因陀羅に觀じて諸の悉地をな
 すべし、今攝持の法を説かん、一切一心に聽くべし、行者一縁に八峯の彌盧山を

想へ、上に妙蓮華を觀せよ、金剛智印を立てたり、瑜伽者上に於いて、字門をおもへ威熾の光あり、用てその頂に置き、安住して傾動せず、百轉所持の藥、行者これに服すべし、先世業生の疾、これ等悉く除愈す、佛子また聽くべし、第一の轉字門は、雪乳商佉の色なり、齊の中より鮮白の蓮華臺を起して彼の中に於いて住す、甚深寂然の定なり、秋の夕の素月の光あり、是くの如くの漫荼羅は、諸佛希有なりと説きたまふ、思惟するに純白し、輪圓九重を成す、霏霧の中に住して、一切の熱惱を除く、淨乳は珠鬘と水精と月光との猶くして、普遍して流注す、一切處に充滿せり、行者心に思惟すれば、諸の障毒を出離す、是の如く圓壇に於いて、等引して成就をなせ、乳、酪、生熟酥、頗胆迦、珠鬘、藕水等の衆物、次第に悉地を成す、當に無量壽を得べし、殊特の身を應現し、一切の患を除息し、天人悉く恭敬し、多聞にして惣持を成し、善慧にして淨無垢なり、斯に山て成就を作せ、速に悉地の果に登る、これを寂災者の吉祥漫荼羅と名く、第一攝持の相は、安するに大空點を以てす、囉字勝眞實なり、佛火の中と説きたまふ、所有の衆の罪業、無擇の報を受くべし、瑜祇善修のもの、等引して皆消除す、所住の三角形、悅意にして遍く形亦なり、寂然にして燔鬘を周らし、

三角をその心に在け、相應して彼の中に囉字大空點を觀せよ、智者瑜伽に如へぬれば、これを以て衆事を成す、日曜の諸の眷屬と、及び一切の火を作すと、攝取と怨對を發すと、衆の支分を消枯すると、これ等作すべきところは、皆智火增長す、彼の一切を摧壞するには、並に大空點を以てす、今彼の色像を説く、深玄にして大威徳あり、暴怒の形を示現し、燔鬘普く周遍して、漫荼羅位に住す、智者眉間に深青の半月輪を觀せよ、次に幢幡の動する相あり、而して彼の中に於いて最勝の訶字門を想へ、彼の漫荼羅に住して、所應の事を成就するとき、一切の義利を作し、諸の衆生に應現す、此の身を捨てずして、神境通を速得し、空位に遊歩して、身祕密を成す、天耳眼根淨なり、能く深密處を開く、この一心壇に住して、衆の事業を成す、菩薩大名稱、初て菩提場に坐して、魔軍衆を降伏し、諸の因不可得なり、因無性なれば果も無し、是くの如くの業も不生なり、彼の三無性なるが故に、空の智慧を得、大徳正遍智、彼の色を宣説したまふ、佉字及び空點は、尊勝にして虚空の空なり、兼ねて慧刀印を持ちぬれば、所作速に成就す、法輪と及び絹索と、竭伽那刺遮と、並に目竭嵐等と、久しから

すしてこの句を成す、
 その時に毗盧遮那世尊、大衆會を觀じて執金剛祕密主に告げて偈を説いて言はく
 若し眞言門に於いて修行せん諸の菩薩の阿字を自身と爲して内外悉く
 同等なり、諸の義利皆捨て、礫石と金寶とを等しくす、衆の罪業及與貪
 嗔等を遠離して、當に俱に清淨なることを得べし、諸佛牟尼に同く能く諸
 の利益を作し、一切の諸過を離る、復次に阿字に於いて行者瑜伽に依るときは
 作業儀式を解す、衆生を利益するが故に内身に救世者一切皆是くの如し、心
 水湛へて盈満す、潔白なること猶し雪乳のごとし、當に決定の意を生ずべし、一
 切の身に出て悉く諸の毛軀に遍じ流注して極めて清淨なり、この内よ
 り充溢して遍く大地に滿つこの悲愍の水を以て世苦の衆生を觀よ、諸あ
 らゆる飲用するもの、或は復身に觸れらるゝもの一切皆決定して菩提を成就す
 ることを得、思惟して等引にあれば一切阿字門なり、周輪にして焰光を生じ
 寂然として普く照す、瑜祇の光外に轉じ一切處に遍じて世を利し樂欲に隨ひ
 行者神通を起す、身上に阿字門あり、阿字阿輪の中にあり、火を出し雨を降らし
 俱時に應現して、地獄の極寒の苦をば、阿字能く消除し、阿字熾然を顯く、眞言

法に住するが故に、阿字を下身に爲し、阿字を標幟に爲す、作業速に成就す
 ば、重罪の衆生を救ふ、大因陀羅に住して、水龍の事業を作せ、一切の攝除等
 眞言者疑ふことなかれ、風は一切處に遍じて、一切悉く開壞す、この種種の雜
 類、各々の衆の事業、色漫茶羅の中に於いて、法に依てこれを作せ、心に觸して
 念持すれば、意根淨を逮得す、輕擧を習ひ、經行の中に誦じ、神足を獲べし、宴座し
 て、阿字を觀じ、耳根にあると想へ、念持して一月を滿れば、當に耳清淨を得べし、
 祕密主かくの如く等は、意生悉地の句なり、祕密主これを觀るに形色あること無けれ
 ども、種種の雜類の衆、行生ず、思念の頃に於て、纒にこれを轉誦するときは、能く是
 の如くの一切の善業の種子を作す、復次に祕密主如來は作さざる所無し、眞言門
 に於いて修行する諸の菩薩は、影像に同く一切處に隨順し、一切衆生の心に隨順
 して、悉くその前に住して、諸の有情をして、咸く歡喜を得しめ、皆如來は分別
 の意なく、諸の境界を離るゝに由るが故なり、偈を説いて言く
 時方造作なく、法非法を離るれども、能く悉地の句を授くること、眞言行より發
 生す、この故に一切智の、如來悉地の果は、最も尊勝の句と爲す、應當に成就を
 作すべし

成就悉地品第七

時に吉祥金剛奇特開敷眼あり、手に金剛印を轉ず、流散して火光の如し、その明
 普遍く一切の諸の佛刹を照す、微妙の音を以て法自在牟尼を稱歎す、諸の眞言の
 行を説きたまへ、彼の行は不可得なり、眞言は何より來る、所去何れの所にか至
 る、諸佛是くの如くの更無過上の句を説きたまへ、一切の法の既趣すること衆流
 の海に赴くが如し、
 是くの如く説き已て世尊、執金剛祕密主に告げて言はく
 摩訶薩の意處を説いて漫荼羅と名く、諸の眞言の心位を了知するときは果を成ず
 ることを得、諸分別するところあるは悉く皆意より生ず、白黃赤を分辨する、
 これ等心より起るなり、決定の心を以て歡喜するを説いて内心處と名く、眞言こ
 の位に住して能く廣大果を授く、彼の蓮華處を念せよ、八葉にして鬚髮敷けたり、
 華臺に阿字門あり、鬚髮皆妙好なり、光暉普く周遍して衆生を照明するが故に、
 千電を合會するが如くして佛の巧色の形を持せり、深く圓鏡の中に居して諸の方
 所に應現すること猶し淨水の月の如くして普く衆生の前に現す、心性かくの如し
 と知りぬるは眞言行に住むことを得、次にその首上の頂會の交際せる中に於いて

標するに大空點を以てして闍字を思惟せよ、妙好にして淨無垢なること水精月
 電の如し、寂靜法身なりと説く、一切の依持する所なり、諸の眞言の悉地、能
 く殊類の形を現じ、天の樂しみの解脱とを得、如來の句を速見す、囉字を眼界に
 爲せ、輝燭猶し明燈のごとし、頸を俛せ小しき頭を偃る、舌を齶の間に近づけて
 以て心處を觀せよ、當に心に等引を現すべし、無垢にして妙清淨なること圓鏡の
 如くにして常に現前す、是くの如く眞實の心は古佛の宣説したまふ所なり、心明
 道を照了するときは諸色皆光を發す、眞言者當に正覺兩足尊を見るべし、若し
 見るときは悉地の第一の常恒の體を成す、これより次に思惟してこの囉字門を轉
 せよ、囉字大空點なり、これを眼位に置け、一切空の句を見、不死句を成ずるこ
 とを得、若し廣大智と或は五神通を起すと長壽の童子の身と成就持明等とを欲ふ
 に眞言者未だ得ざる、これに隨順せざるに由てなり、眞言の智を發起するはこれ
 最勝の實知なり、一切の佛菩薩救世の庫藏なり、これに由て諸正覺と菩薩救世者
 と及び諸の聲聞等と他方所に遊涉し、一切の佛刹の中に於いて皆是くの如くの説を
 作す、故に無上智佛の無過上智とを得、

轉字輪漫荼羅行品第八

ひ悉地を求めんと欲ひ一切智智を求めんと欲は、この一切佛心に於て當に勤めて修習すべし、

その時に毗盧遮那世尊また決定して大悲藏生曼荼羅王に聖天の位を敷置する三昧神通の眞言行不思議の法を説きたまふ、彼の阿闍梨先づ阿字の一切智門に住して修多羅を持して一切諸佛を稽首したてまつる、東方よりこれを申べて旋轉して南より以て西方に及ぼし周くし北方に於いて次に金剛薩埵と作して執金剛を以て自身を加持し或は彼の印を以てし或は嚩字を以てして内心に入て曼荼羅を置け是くの如く第二曼荼羅亦本寂を以て自身を加持するが故に無二瑜伽の形如來の形空性の形なり次に所行の道と二分の聖天處とを捨て、三分を遠離し如來の位に住して東方より修多羅を申べて周市し旋轉す、所餘の二曼荼羅亦當にこの方便を以て諸の事業を作すべし、また大日を以て自身を加持し廣法界を念じて衆色を布せよ、眞言行者潔白を以て先と爲すべし、伽陀を説いて曰く、
この淨法界を以て 諸の衆生を淨除すること 自體、如來の如し 一切の過を遠離せり、是くの如く觀想して 嚩字門を思惟せよ 寂然にして光燦の鬘あり、淨月商佉の色なり、第二に赤色を布せよ、行者當に憶持すべし、字を思惟せよ明

照にして 本無の大空點あり 煖炳にして初日の輝あり、最勝にして能く壞するものなし、第三に眞言者 次に黄色を運布せよ、意を迦字門に定め 當に法教に隨ふべし 身相猶し眞金のごとし 正受にして諸毒を害し 光明一切に遍す、金色にして牟尼に同なり、次に當に青色を布すべし 生死を超越せんには麼字門を思惟せよ、大寂の菩提座あり、身色虹霓の如し、一切の怖畏を除く、最後に黑色を布せよ、その彩甚だ玄妙なり 訶字門を思惟せよ、周遍して圓光を生ず、劫災の猛熾の如し 寶冠にして手印を擧ぐ、能く一切の惡を怖し、諸の魔軍を降伏す。その時に世尊毗盧遮那、三昧より起ちて無量勝三昧に住したまふ、佛定中に於いて遍一切無能害力明妃を顯示したまふ、一切如來の境界の中より生ず、その次に曰く
南麼薩婆他 引 薩婆 反一 薩婆 目 契 弊 二 阿 婆 迷 三 鉢 囉 迷 四 阿 者 麗 五 伽 泥 薩 麼
合 囉 囉 六 薩 婆 恒 囉 合 弩 薩 帝 七 莎 訶
次に彩色を調ふるには世尊及び般若波羅蜜を頂禮してこの明妃八遍を持せよ、座より起ちて曼荼羅を旋轉し内心に入て大慈大悲の力を以て 諸の弟子を念じ、阿闍梨また羯磨金剛薩埵を以て自身を加持す、嚩字門及び施願金剛を以てすること

己つて當に大悲藏生大曼荼羅を畫すべし、彼れ安祥として内心に在て大日世尊を造すへし、白蓮華に坐して首に髮髻を戴き鉢陀を裙と爲し、上に絹縠を被たり、身相金色にして周身に燦鬘あり或は如來頂印を以てし、或は字句を以てし謂く阿字門なり、東方の一切諸佛には阿字門及び大空點を以てす、伊舍尼の方の一切如來母虛空眼には伽字を書くべし、火天の方の一切諸菩薩には眞陀摩尼寶を畫け、或は迦字を置け夜叉の方の觀自在には蓮華印なり、並に一生補處の菩薩眷屬を畫け、或は娑字を作せ、焰摩の方には三分の位に越いて金剛慧印と持金剛秘密と並に眷屬とを置け、或は嚙字を書け、彼れまた三分の位を棄て、一切の諸執金剛の印を畫け、或は字句を書け所謂吽字なり、次に涅槃底の方には大日如來の下に於いて不動尊を作せ、石の上に坐して手に絹索と慧刀とを持せり、周帀して焰鬘あり、作障のものを擬ざる、或は彼の印を置け、或は字句を書け所謂唵字なり、天の方には降三世尊をなせ、大障のものを摧く上に光焰あり大勢威怒にして猶し焰摩の如し、その形黑色にして可怖の中に於いて極めて怖畏せしめん、手に金剛を轉す、或は彼の印を作せ、或は字句を書け所謂訶字なり、聲次に四方に於いて四大護を畫せよ帝釋の方をば無畏結護者と名く、金色にして白衣なり、面に少し

忿怒の相を現はし手に檀茶を持せり、或は彼の印を作せ、或は字句を置け所謂嚙字を作せ、夜叉の方をば壞諸怖結護者と名く白色にして素衣なり、手に羯伽を持し並に光焰あり能く諸怖を壞す、或は彼の印を畫け或は字句を置け、所謂博字なり、龍方をば難降伏結護者と名く赤きこと無優華の色の如し、朱衣を被たり、面像微笑にして光焰の中にあり一切の衆會を觀す、或は彼の印を置け或は字句を置け所謂索字なり、焰摩の方をば金剛無勝結護者と名く黑色にして玄衣なり毗俱臆形にして眉の間に浪の文あり、上に髮冠を戴き自身に威光あつて衆生界を照らす、手に檀茶を持し能く大に障をなすものを壞す、或は彼の印を作す、或は字句を置く所謂吃識合字なり及び一切の眷屬使者は皆白蓮華の上に坐せしめよ、眞言者かくの如く敷置し已て次に當に外に出で第二分に於いて釋迦種牟尼王を畫すべし、袈裟衣を被たり三十二導師の相あり、爲に最勝教を説いて一切衆生に無畏を施すが故に或は袈裟鉢の印なり或は字句を以てす、所謂婆字なり、次に外漫荼羅に於て法界性を以て自身を加持して菩提心を發すべし、彼れ三分の位を捨て、當に三たび禮を作して心に大日世尊を念すべし、前の調色の如く、第三分に於いて帝釋の方には施願金剛童子の形を作せ、三昧の手には青蓮華を持し上に金剛慧杵

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第四

密印品第九

その時に薄伽梵毗盧遮那、諸の大衆會を觀察して、執金剛祕密主に告げて言はく、
 祕密主、如來莊嚴の具に同く法界趣に同じき標幟あり、菩薩これに由て身を嚴る
 が故に生死の中に處し諸處に巡歴すれども一切如來の大會に於てこの大菩提幢を
 以てこれを標幟すれば諸の天龍夜叉健達婆阿蘇囉揭嚩茶緊那囉摩睺羅伽人非人等
 敬つて之を遠ざかり教を受けて行ず、汝今諦に聽き極めて善く思念へよ、吾當
 に演說すべし、是くの如く説き已て金剛手、佛に白して言さく世尊今正しくこれ
 時なり、世尊今正しくこれ時なり、その時薄伽梵即便ち身無害力三昧に住し、こ
 の定に住し、たまふが故に一切如來の三昧耶に入り一切に遍じて能く障礙するな
 き力ある無等の三昧力の明妃を説いて曰く。
 南麼三曼多勃駄喃一阿三迷二囉囉合三迷三三麼曳四莎訶祕密主かくの如くの明妃は
 一切如來の地を示現す、三法道の界を越えざれば、地波羅蜜を圓滿す、この密印の
 相は當に定慧の手を以て空心合掌に作り、定慧の二の虚空輪を以て並べ合せてこ

れを建立すべし頌に曰く。

これ一切の諸佛の救世の大印、正覺の三昧耶なり、此の印に於て住す。

又定慧の手を以て拳になして、虚空輪を掌中に入れて風輪を舒べこれ淨法界の

印となす、真言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一達摩駄略二薩轉合婆嚩句痕三

また定慧の手を以て、五輪皆等迭に翻いて相鉤す、二虚空輪の首俱に相向へよ、

頌に曰く。

これを名けて勝願の吉祥法輪の印となす、世依の救世者、悉く皆この輪を轉じ

たまふ。

真言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一伐折囉合囉麼〇句痕

また定慧の二手を舒べて、歸命合掌を作り、風輪を相捻して二空輪を以て上に加

へよ、形羯伽の如し、頌に曰く。

この大慧刀の印は、一切の佛の所説なり、能く諸見を斷ず、謂く俱生の身見なり。

真言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一摩訶羯伽微囉閣二達摩珊捺囉奢合迦沙訶閣

三薩迦耶捺唎瑟致合掣反、諾八迦四怛他引菓多地目吃底二合你一社多五微囉引伽

達摩你入社多吽

また定慧二手を以て虚心合掌になし、二風輪を屈し、二空輪を以てこれに絞ふ、形商法の如し、頤に曰く

これを名けて勝願の吉祥法螺の印と爲す、諸佛世の師、菩薩救世者、皆無垢の法を説いて、寂靜の涅槃に至る。

真言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一暗

また定慧の手を以て相合せて、普くこれを舒べ散す、猶し健吒の如し、二地輪二空輪相持して、火風輪をして和合せしむ、頤に曰く

吉祥願の蓮華は、諸佛救世者の、不壞金剛の座、覺悟するを名けて佛となす、菩提と佛子と、悉皆これより生ず、

真言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一阿去急

また定慧の手を以て五輪を外に向けて拳に爲し、火輪を建立して二風輪を舒べ、屈して鉤形になせ、傍にあつて之を持せよ、虚空地輪を並べて直く上げ、水輪を交へ合せて跋折囉の如くせよ、頤に曰く、

金剛大慧の印は、能く無智の城を壊し、睡眠のものを曉寤す、天人も壊ること能はず、

真言に曰く 南摩三曼多伐折羅赧一吽

また定慧の手を以て五輪を内に向けて拳に爲せ、火輪を建立して二風輪を以て傍に置き二虚空を屈して相並べよ、頤に曰く

この印は摩訶の印なり、所謂如來頂なり、適に纒に結びこれを作せば、即ち世尊に同じ、

真言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一吽

また次に智慧手を以て拳に爲して眉間に置き、頤に曰く

これを毫相藏、佛常滿願の印と名く、纒にこれを作すを以ての故に即ち人中の勝に同なり、

真言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一阿去急 痕惹呼下同

瑜伽の座に住して鉢を持するに相應す、定慧の手を以て俱に臍の間に在く、これを釋迦牟尼の大鉢の印と名く

真言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一婆呼

また次に智慧の手を以て上に向へて、持無畏の形に作す、頤に曰く

能く一切衆生類に無畏を施與す、若しこの大印を結ぶを、施無畏者と名く、

眞言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一薩婆他二爾娜爾娜二佩也那奢那四莎縛訶
また次に智慧手を以て下し垂れて、施願の形に作す、頌に曰く、
是くの如き與願の印は、世依の所説なり、適に纒にこれを結ぶものは、諸佛の
願を満たしたまふ、

眞言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一轉囉娜伐折囉引二合たま二きや二莎縛合訶
また次に智慧の手を以て拳になして、風輪を舒べ毗俱胝の形を以て等引に住せよ、
頌に曰く

かくの如くの大印を以て、諸佛救世の尊、諸の障者を恐怖し、意に随つて悉地を
成せしめたまへ、

この印を結ぶに由るが故に、大悪の魔軍衆及び餘の諸の障者、馳散して礙ふると
ころ無し、

眞言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一摩訶引沫囉囉底反二捺奢囉路盪婆合吠三摩
訶引味但囉也合毗庚合盪藥合底反四莎囉訶
また次に智慧の手を以て拳に爲し、火輪と水輪とを舒べよ、虚空輪を以てその下
に在け、頌に曰く

これを一切佛の世依の悲生眼と名く、眼界に置くと想へ、智者佛眼を成す、

眞言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一伽伽那囉囉落吃灑合儻二迦嚕儻摩耶三但他

引藥多斫吃菊四二合 莎囉合訶
また次に定慧の手を以て、五輪を内へ向へて拳になして、風輪を舒べ、圓に屈し

て相合せよ、頌に曰く

この勝願の索の印は、諸の悪を造るものを壊す、眞言者これを結べば、能く諸
の不善を縛す、

眞言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一係係摩訶引播奢二鉢羅合娑嚩那履也三薩

捶駄賭四微模訶迦五但他引藥多引地目吃底二合 你入社多六莎訶

また次に定慧の手を以て一に合して拳に爲し、智慧の手の風輪を舒べて、第三の
節を屈すること猶し環の相の如くせよ、頌に曰く

かくの如くなるを鉤印と名く、諸佛救世者、一切の十地の位に住する菩提大心と

及び悪思の衆生とを招集す、

眞言に曰く 南摩三曼多勃駄喃一阿呼薩婆但囉合 鉢囉合底反 訶諦二但
他引藥黨矩奢三菩提漸囉耶合鉢履布囉迦四莎訶

即ちこの鉤印、その火輪を舒べて少しこれを屈せよ、これを如來心印と謂ふ彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一壞怒嗔婆合轉二莎囉合訶

またこの印を以て、その水輪を舒べて、これを豎立よ、如來齊印と名く、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一阿沒唎合觀嗔婆合轉二莎囉合訶

即ちこの印を以て直く水輪を舒べ、餘亦これを豎てよ、如來腰の印と名く、彼の眞言に曰く、南麼三曼茶勃駄喃一但他引藥多三婆囉二莎囉合訶

また定慧の手を以て空心合掌に作し、二風輪を以て内に屈して入れよ、二の水輪亦然なり、その二の地輪少し屈せしめて火輪を伸べよ、これは如來藏印なり、彼の眞言に曰く、南麼薩婆但他引藥帝弊反一嗔囉囉囉二莎囉合訶

即ちこの印を以て、その水輪を散じて上に向へてこれを置き、大界印と名く、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一麗魯補履微矩麗二莎囉合訶

即ちこの印を以てその二の火輪鉤屈して相合せて風輪を散じ舒べよ、無堪忍大護の印と名く、彼の眞言に曰く、南麼薩婆但他引藥帝弊反一薩婆佩也微藥帝弊二微濕囉目契弊三薩婆他四唎欠五囉吃灑合摩訶引沫麗六薩婆但他引藥多本泥也合你入社帝七吽吽八但囉合引二吒經但囉吒九阿鉢囉合底反訶諦十莎囉合

また風輪を以て之を散じ舒べ空輪を並べてその中に入れよ普光印と名く、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一入囉合羅引摩履你二但他引藥修唎旨三莎囉合

又定慧の手を以て空心合掌に作して、二風輪を以て火輪側を持せよ、如來甲印と名く。

二水輪を屈し、二空輪を合せて掌中に入れて、二水輪の甲の上を押せ、これを如來舌相の印と名く、眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一但他引藥多爾訶囉合薩底也合達摩鉢囉合底瑟耻合多三莎囉合

この印を以て風水輪をして屈して空輪を相捻し上に向て少しこれを屈し、火輪を正しく直して、相合せよ、地輪亦かくの如くせよ、如來語門印と名く、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一但他引藥多摩訶引轉反吃但囉二合微濕囉合壞引

曩摩護那也三莎囉合

前の印の如くして二風輪を以て屈して掌中に入れて上に向へよ、如來牙印と名く、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一但他引藥多能去瑟吒羅二囉娑囉娑引

鉞囉二合參鉢囉合博迦四薩婆但他引藥多五微灑也參婆上囉六莎囉合

また前の印相の如くして二風輪を以て上に向けてこれを置き、第三の節を屈せよ、

如來辯舌の印と名く、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一阿振底夜合那部
 合多二路波嚩引増三麼修上鉢囉合鉢多三合微輪上駄婆嚩合囉四莎嚩合訶
 また次に定慧の手を以て和合して一相に空心合掌に作し、二の地輪空輪を屈し入
 れて相合せよ、これはこれ如來の持十力の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三
 曼多勃駄喃一捺奢麼浪伽輕達囉二吽參髻去莎訶
 又前の印の如くして二空輪と風輪とを以て上節を屈して相合せよ、これ如來念處
 の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一但引藥多麼囉合底二薩
 埵係修弊反毗庚と唵藥多三伽伽那慘忙引慘麼四莎訶
 また前の印の如くして、二空輪を以て水輪の上に在り、一切法平等開悟の印と名
 く、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一薩婆達麼三麼修鉢囉合鉢多二合
 但引藥修藥多三莎訶
 また定慧の手を以て合せて一と爲し二風輪を以て火輪の上に加へよ、餘は前の如
 し、これ普賢如意珠の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一參麼修
 弩藥多二微囉惹達摩你入社多三摩訶引摩訶四莎訶
 即ちこの虚心合掌、二風輪を以て屈して二火輪の下に在り餘は前の如し。これ慈

氏の印なり、彼の眞言に曰く

南麼三曼多勃駄喃一阿爾單惹也二薩婆薩埵引

奢夜弩藥多三莎訶

また前印の如くして、二の虚空輪を以て中に入れよ、虚空藏印と名く、眞言に曰

南麼三曼多勃駄喃一阿去迦引奢參麼修藥多二微質但嚩合嚩囉達囉三莎

又前の印の如くして、二の水輪、二の地輪を以て屈して掌中に入れ、二の風輪火

輪相合せよ、これ除一切蓋障の印あり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃

一阿呼薩埵係修弊反毗庚と唵藥多二但嚩但嚩三嚩嚩四莎訶

前の如くして定慧の手を以て相合せ五輪を散じ舒べよ、猶し鈴鐸の如し、虚空

地輪の如きは和合して相持して蓮華の形に作れ、これ歡自在の印なり。

眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一薩婆但引藥修囉路吉多二羯嚩儂麼也三囉

囉囉吽若四莎訶

前の如くして定慧の手を以て空心合掌に作して猶し未開敷蓮の如し、これ得大勢

の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一髻髻娑二莎訶

前の如くして定慧の手を以て五輪を内に向へて、拳を爲して二の風輪を擧げよ、

猶し針の鋒の如くせよ、二虚空輪、これに加へよ、これ多羅尊の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一哆囉囉拏二羯嚩拏婆合吠三莎訶
 前の印の如く二風輪を擧げ、參差に相押せ、是れ毗俱胝の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一薩婆佩也但囉合引二散你入毘娑破合吒也三莎訶
 前の如くして定慧の手を以て空心合掌せよ、水輪空輪皆中に入れよ、これ白處尊の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一但引葉多微灑也三婆上吠
 平鉢曇摩合忙履你三莎訶
 前印の如く、二の風輪を屈して、虚空輪の下に置き、相去ること猶穢麥の如くせよ、これ何耶揭哩嚩の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一佉那也
 昨惹娑破合吒也二莎訶
 前印に同じ、二水輪風輪を伸べよ、餘は拳の如くせよ、これ地藏菩薩の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一訶訶訶二蘇上怛弩三莎訶
 また定慧の手を以て空中合掌に作して火輪水輪交へ結んで相持す、二風輪を以て、二虚空輪の上に置き、猶し鉤の形の如し、餘は前の如し、これ聖者文殊師利の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一係係矩忙囉二微目吃底合鉢他悉

體二合多三娑麼合囉娑麼合囉鉢囉合底然五莎訶
 三昧の手を以て拳に爲して風輪を擧ぐることを猶し鉤形の如くせよ、これ光網鉤印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一係係矩忙囉二忙引耶葉多娑嚩
 合婆去嚩悉體二合多三莎訶
 即ち前の印の如し、一切輪の相にして皆少しこれを屈せよ、これ無垢光の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一係矩忙引囉二微質怛囉合葉底矩忙引囉
 二麼弩娑麼合囉四莎訶
 前の如く智慧の手を以て拳と爲して、その風火輪相合せし一に爲す、これを舒べよ、これ繼室尼の刀印なり、彼の言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一係係矩忙
 引履計二娜耶壤難娑麼合囉三鉢囉合底然四莎訶
 前の如く智慧の手を以て拳に爲して火輪を伸べ、猶し戟の形の如くせよ、これ優波髻室尼の戟の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一頻去娜夜壤難
 二係矩忙引履計三莎訶
 前の如くして三昧の手を以て拳に爲し、水輪地輪を舒べよ、これ地輪慧幢の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一係娑麼合囉壤那計觀二莎嚩合訶

慧の手を以て拳に爲して風輪を舒べ、猶鈞形の如くせよ、これ請召童子の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一阿去羯囉灑合也薩鉸引矩魯阿去然三矩

忙引囉寫四莎訶

前の如くして定慧の手を以て拳に爲し、二風輪を舒べ、屈して節を相合せよ、これ諸奉教者の印なり彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一阿呼微娑麼合也

澤曳二莎訶

前の如くして定慧の手を以て拳に爲し、火輪を舒べ第三の節を屈せよ、これ除疑佐の金剛印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一微麼底掣反鴉曳諾迦二

莎訶

毗鉢舍那の臂を擧げて施無畏の手を作す、これ施無畏者の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一阿佩延娜娜二莎訶

前の如くして智の手を舒べ上にこれを擧げよ、これ除惡趣の印なり、彼の眞言に

曰く、南麼三曼多勃駄喃一阿弊反毗夷達囉儂一薩捶駄敦二莎訶

前の如くして慧の手を以て心に覆ひ稍火輪を屈せよ、これ悲念者の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一係摩訶引摩訶二娑麼合囉鉢囉合底然三莎訶

前の如くして慧の手を以て持華の狀に作せ、これ大慈生の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一娑嚩合制妬唵藥合多二莎訶

眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一羯囉儂沒灑合呢夜二莎訶

前の如くして慧の手を以て施願の相に作せ、これ除一切熱惱の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一係囉囉娜二囉囉鉢囉合鉢多三莎訶

前の如く智慧の手を以て眞多摩尼寶を執持する形の如くせよ、これ不思議慧の印

なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一薩磨舍鉢履布囉二莎訶

前の如く定慧の手を以て拳に爲して二の火輪をして開敷せしむ、これ地藏旗の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一訶訶訶微娑麼合曳二莎訶

慧の手を拳に爲して三輪を舒べよ、これ寶處の印なり、彼の眞言に曰く、南

麼三曼多勃駄喃一係摩訶引摩訶二莎訶

この慧の手を以てその水輪を舒べよ、これ寶手菩薩の印なり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一囉怛怒合唵婆上嚩二莎訶

定慧の手を以て反相又合掌に作れ、定の手の空輪慧の手の地輪相交ふ、般若を二

前の如く定慧の手を以て拳に爲し、二の風輪を建立して以て相持せよ、これ金剛針の印なり、彼の真言に曰く、南摩三曼多伐折囉赧一薩婆達磨你入吠達你二伐折囉合素旨囉囉泥三莎囉合訶

前の如く定慧の手を以て拳に爲して心に置き、これ金剛拳の印なり、真言に曰く、南摩三曼多伐折囉赧一薩破合吒也伐折囉合三波吠二莎訶

三昧の手を以て拳に爲して翼を擧げ開敷す、智慧の手亦拳に作して、風輪を舒べよ、猶し忿怒して相擬する形の如くせよ、これ無能勝の印なり、彼の真言に曰く、南摩三曼多伐折囉赧訶達哩沙合摩訶盧灑拏二佉引捺耶薩鉞引薩他引藁單然矩嚕三莎訶

慧の手を以て拳に爲し相撃つ勢に作してこれを持せ、これ阿毗目佉の印なり、彼の真言に曰く、南摩三曼多伐折囉赧一係阿毗目佉摩訶鉢囉合戰拏二佉引那也

緊旨囉引也徒三三麼耶麼弩薩麼合囉四莎訶

前の持鉢の相の如くなるこれ釋迦鉢の印なり、彼の真言に曰く、南摩三曼多勃馱喃一薩囉吃麗合奢你入素捺那二薩婆達摩囉始多四鉢囉合鉢多三伽伽那三迷四娑囉合訶

釋迦毫相の印、上の如し、また慧の手の指の峯を以て聚めて頂上に置き、これ一切佛頂の印なり、彼の真言に曰く、南摩三曼多勃馱喃一鍍鍍二吽吽吽三發吒四莎訶

三昧の手を以て拳に爲して火風輪を舒べ、虚空を以て地水輪の上に加へよ、その智慧の手、風火輪を伸べ、三昧の掌の中に入れよ、また虚空を以て地水輪の上に加す、刀の鞘に在くが如し、これ不動尊の印なり、前の金剛慧の印の如くなるは

これ降三世の印なり。

前の如く定慧の手を以て合せて二相とせよ、其の地水輪皆下に向へよ、而して火輪を伸べ二の峯相連す、二風輪を屈して第三の節の上に置く、虚空輪を並ぶること

と三目の形の如し、これ如來頂の印佛菩薩の母なり、また三昧の手を以て覆せて

これを舒べよ、慧の手拳になして風輪を擧ぐることを猶し蓋の形の如し、これ白傘

佛頂の印なり。

前の刀印の如くなるは、これ勝佛頂印。

前の輪印の如くなるは、これ最勝佛頂印。

前の鈎印の如く慧手を拳になし其の風輪を擧げ、少し之を屈せよ、これ除業佛頂

の印。
 前の佛頂の印の如くするは、これ火聚佛頂の印なり。
 前の蓮華印の如くするは、これ發生佛頂の印。
 前の商佉の印の如くするは、これ無量音聲佛頂の印、智慧の手を以て拳に爲して眉間に置在け、これ眞多摩尼豪相の印。
 前の佛頂の印の如き、これ佛眼の印。また少し異あれば所謂金剛の標相なり。
 智慧の手を心に在け、蓮華を執る像の如くせよ、直く奢摩他の臂を伸べ、五輪あげ舒べて外に向へて之を拒ぐ、これ無能勝の印なり。
 定慧の手、内に向へ拳を爲して、二の虚空輪上に向へこれを屈すること口の如くせよ、これ無能明妃の印なり。
 智慧の手を以て頰を承くるは、これ自在天の印なり。
 即ちこの印を以て風火輪をして差に戻へてこれを伸べしむ、之普華天子の印なり。
 前の印に同じく虚空輪を以て、掌中に在け、これ光鬘天子の印なり、前印に同じく虚空風輪を以て華を持ちたる相に作れ、これ滿意天子の印なり。
 智慧の手を以て虚空水輪相加し、その風火輪地輪皆これを散じ舒べて以てその耳

に掩ふ、これ遍音聲天の印なり。
 定慧の手相合せて二虚空輪圓に屈せよ、その餘四輪また是くの如くす、これを地神の印と名く。
 前の如く智慧の手を以て施無畏の相に作り、空輪を以て掌中に在け、これ請召火天の印なり。
 即ち施無畏の形を以て、虚空輪を以て水輪の第二の節を持す、これ一切諸仙の印その次第に随つて相應してこれを用ひよ、
 前の如く定慧の手を以て相合せて風輪地輪掌中に入れよ、餘は皆上に向へよ、これ焰摩但茶の印なり。
 慧の手下に向ふること猶し健陀の如し、これ焰摩妃の鐸の印なり。
 三昧の手を以て拳に爲して風火輪を舒べよ、これ暗夜天の印なり、即ち此の印を以て又風輪を屈せよ、これ嚕達羅の戟の印なり。
 前の印の如く蓮華を持する形に作れ、これ梵天明妃の印なり。
 前の印の如く其の風輪を屈して火輪の背の第三の節に加ふ、これ嬌末離燦底の印なり。

比旨比旨二莎訶

前の如く定慧の手を以て相合す、虚空輪を並べて之を建立す、これ一切執曜の印、

眞言に曰く

南麼三曼多勃駄喃一葉囉合醯濕鞋合履耶合鉢羅合鉢多二合嚩底

反以麼耶三莎訶

復この印を以て虚空火輪相交ふ、これ一切宿の印、眞言に曰く 南麼三曼多

勃駄喃一娜吃灑合但囉二合你入囊捺你平曳三莎訶

南麼三曼多

即ちこの印を以て二水輪を屈して掌中に入れよ、これ諸の羅刹婆の印、眞言に

曰く 南麼三曼多勃駄喃一囉吃灑合娑引地鉢多曳二莎訶

三昧の手を伸べ面門に覆ふ、爾賀嚩を以てこれに觸れよ、これ諸の茶吉尼の印、

眞言に曰く 南麼三曼多勃駄喃一頡履合訶二急呼

秘密主かくの如く上首の諸の如來の印は如來信解より生ぜり、即ち同く菩薩の

標幟なり、その數無量なり、又秘密主乃至身分の舉動住止、皆知るべしこれ密印

なり、舌相の所轉の衆多の言説は知るべし皆これ眞言なり、この故に秘密主眞言

門に菩薩の行を修する諸の菩薩は已に菩提心を發し、當に如來地に住して漫茶

羅を畫すべし、若しこれに異なるものは諸佛菩薩を謗するに同じ、三昧耶を越ゆ

決定して惡趣に墮せん。

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第四終

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第四

土を觀るに、この遍一切處の法門を見ざることを無し、彼の諸の如來宣說せざるものあるなし、この故に秘密主若し眞言門を了知せんと欲は、菩薩の行を修し諸の菩薩はこの遍一切處の法門に於いて勤めて修學すべし、阿遮陀多波に於て初中後相加し、等持の品類を以て相入るれば自然に菩提心と行と成等正覺と及び般涅槃とを獲得す、これ等の所説の字門、相與に眞言法教に和合して初中後俱なることあり、眞言者若しかくの如く知るときは其の自心に隨つて自在を得、この一の句に於て決定の意を以てこれを用ふる慧を以て覺知するときは當に無上殊勝の句を授けらるべし是の如く一輪より字輪を輪轉す、眞言者これを了知するが故に常に世間を照らしたまふ、大日世尊の如くして、法輪を轉す

秘密漫荼羅品第十一

その時に薄伽梵毗盧遮那、如來眼を以て、一切法界を觀察して法界俱舎に入りたまふ、如來、平等莊嚴藏三昧を奮迅したまふを以て法界無盡嚴を現じたまふを以ての故に、この眞言行門を以て無餘の衆生界を度したまふ、本願を満足したまふ故に時に佛、三昧の中に在して是の如く無盡の衆生界に於て衆々の聲門より隨類の音聲を出したまふ、其の本性の如く業生成熟して果報を受用する顯形

の諸色と種種の語言と心の思念とにおいて爲に法を説いて一切衆生をして皆歡喜を得しめたまふ、また一一の毛孔より法界の増身を出現したまふ、出で已つて虚空に等同なり、無量世界の中に於いて一音聲の法界の語表を以て、如來發生の偈を演説したまふ。

能く隨類の形、諸法の法相を生ず、諸佛と聲聞と、救世の因緣覺と勤勇の菩薩衆と、及び人尊も亦然なり、衆生と器世界と次第にして而も成立し、生住等の諸法常恒に是くの如く生ず、智と方便とを具ふるに由て無慧の疑ひを離る、この道を觀たまふが故に諸の正遍知を説きたまへり。

その時に法界生の如來身一切法界に於て自身表を化して雲の如く遍滿せり、毗盧遮那世尊、纔に心を生じたまふあひだに、諸の毛孔の中より無量の佛を出して展轉して加持し已つて還て法界宮の中に入りぬ、こゝに於て大日世尊また持金剛秘密主に告げて言はく、秘密主、漫荼羅の聖尊の分位と種子と標幟とを造ることあり汝當に諦に聽き善く思ひ、これを念ひよ、吾今演說せん、持金剛秘密主言さく、是の如く世尊願樂くは聞かんと欲ふ時に薄伽梵、偈頌を以てのたまはく眞言者圓壇を先づ自體に置き、足より齋に至ては、大金剛輪を成す、これより心に至て、

當に水輪を思惟すべし、水輪の上に火輪あり、火輪の上に風輪あり、次に持地を念じて、衆の形像を圖すべし。

その時に金剛手、大日世尊の身語意地に昇つて、法平等の觀を以て彼の未來の衆生を念じて一切の疑を斷せしめんが故に大眞言王を説いて曰く、

南麼三曼多勃駄喃一阿三忙引鉢多合達磨駄觀二藥登反藥修喃三薩婆他四暗引欠引暗噫五糝索六含鶴七嚙嚙八鏤嚙九急呼莎訶吽十囉嚙訶囉合鶴一莎訶嚙落二莎訶持金剛秘密主この眞言王を説き已んぬ、時に一切如來、十方世界に住して各右手を舒べて執金剛の頂を摩で善哉の聲を以て稱歎して言く善哉善哉佛子汝已に毗盧遮那世尊身語意地に超昇せり、一切の場所の平等の眞言道に住る諸菩薩を照明せんと欲ふが爲の故にこの眞言王を説く、何を以ての故に毗盧遮那世尊應正等覺、菩提の座に坐すとき十二句の法界を觀じて四魔を降伏したまふ、この法界生は三處より流出して天魔軍衆を破壊す、次に世尊の身語意平等を得て身量、虚空に等同なり、語意の量も亦かくのごとし、無邊智生を逮得して一切の法に於て自在に法を演説したまふ、所謂この十二句は眞言の王なり、佛子汝今毗盧遮那世尊の平等の身語意を現證するが故に衆に知識せらるゝこと正遍知者に同じ而して

偈を説いて言さく、

汝、一切智の大日正覺尊に最勝の眞言の行を問ひたてまつる、當に法教を演説すべし、我れ往昔にこれに由て妙菩提を發覺し、一切の法を開示して滅度に至らしむ、現在十方界の諸佛咸く證知したまふ、

その時に具德金剛手、心大に歡喜す、諸佛の威神に加持せらるゝが故に偈を説いて言さく、

この法は盡くることあることなく、自性無く住なし、業生に於て解脱して正遍知に同なり、諸の救世方便を以て、悲願に隨つて轉じて、無生智を開悟したまふ、

諸法かくの如くの相なり。

時に執金剛秘密主また優陀那の偈を説いて毗盧遮那世尊に請問してこの大悲藏生大漫荼羅に於て所疑を決斷す、未來世の諸の衆生の爲の故に、

已に一切の疑ひを斷じたまへる種智の離熱惱なり、我れ衆生の爲の故に、導師に請問す、漫荼羅は何をか先とする、唯し大牟尼説きたまへ、阿闍梨に幾くかある、弟子に復幾種かある、云何が地相を知る、云何が擇治せん、云何が當に作淨すべき、云何が彼れに堅住せん、及び諸弟子を淨むる、唯願はくば導師説きたまへ、

行者その地を淨むべし、祕密主、淨にあらざれば菩提心を離るゝを以てなり、故に分別を捨て、一切の地を淨除すべし、我れ廣く法教にあるところの漫荼羅を説くべし、この中に先とする所の事を愚癡にして知解せざれば、世間の覺と名くるにあらず、亦一切智にあらず、乃至分別の諸の苦因を捨つること能はず、應當に弟子の爲に菩提心を淨むべし、護るに不動尊を以てし、或は降三世を用ふ、若し弟子妄執の爲に動せられざれば當に最正覺を成すべし、無垢なること虚空に喩ふ、初にはこの地を加持すること諸佛の教に依る、第二は心自在なり、唯これ餘教にあらずして四種の蘇多羅あり、謂く白と黄と赤と黒となり、第五に念すべき所は所謂虚空の色なり、空の中に等しく持ちて漫荼羅を印定す、第二に經經を持して道場の地に置き、一切如來の座と及び諸佛智子には悦意妙蓮華なり、世間に吉祥なりと稱す、緣覺と諸聲聞と所謂邊智のものなれば當に知るべし敷く所の座は芰荷青蓮の葉なり、世界の諸天神は梵衆を以て初と爲す、赤色の鉢曇華なり、彼れを稱て座の王と爲す、これに降るには所應の如し、念じてその地分に居らしめよ、供養に四種あり謂く作禮合掌と并及に慈悲等と世間の華香を與ふると手より發生する華とを諸の救世者にたてまつる、支分生の印を結んで菩提心を觀せよ、

各各の諸の如來と彼の所生の子等とにこの無過の華の芬妙に、また光顯にして法界に樹王たるを以て人中の尊に供養す、眞語を以て加持し三昧自在に轉ず、勝妙にして廣きこと大雲の如し、法界の中より出生す、彼れより衆華を雨ふらし、常に諸佛の前に遍す、その餘の世天等に亦この華を散すべし、奉獻せんときは隨つて本眞言と性類とに相應せよ、是くの如く塗香等も亦その所應に隨ふべし、空水輪を相持するこれを吉祥印といふ、彼の所奉の華等は自心に當て、これを獻す、若し諸の世天神ならば齊の位にありと知るべし、或は金剛拳の印若しはまた蓮華鬘を以て空中に在て導師救世者に獻せよ、乃至諸の世天、各その次第の如くすべし、護摩に二種あり、所謂内と外となり、業生解脱を得てまた芽種生することあり、能く業を燒くを以ての故に説いて内護摩と爲す、外用に三位あり、三位は三が中に住して三業の道を成就す、世間の勝護摩となり、若しそれに異にして作すものは護摩の業を解せざるなり、彼れ癡にして果を得ず、眞言の智、捨離す、如來部の眞言と及び諸の正覺の説とは知るべし白と黄となり、金剛には衆色を具す、觀自在の眞言は純素なり、事に隨つて遷れ、四方相重ねて普し、輪圓次第の如し、三隅と半月輪と形を説くこと亦然なり、初に色像を知るべし、所謂男

女の身なり、或はまた一切處にその類の形色に隨ふて不思議の智生ず、この故に不思議にして物に應じて殊異ありとも、智と智證と常に一なり。乃至心の廣博なること當に知るべし、これその量なり、座と印とも亦かくの如し、以て諸天神に及ばず、諸佛の所生の如し、印も彼れに等同にして生ず、この法生の印を以て諸の弟子を印持す、故に略して法界を説いて、これを用て標幟と爲す、灌頂に三種あり、佛子心を至して聽け、若し秘印の方便のときは作業を離る、これ初の勝法と名く、如來の灌頂したまふ所なり、所謂第二とは衆事を起作せしめよ、第三には心を以て授く、悉く時方を離る、尊をして歡喜せしむるが故に所説の如く作すべし、現前に佛灌頂したまふ、これ即ち最も殊勝なり。正等覺略して五種の三昧耶を説きたまふ、初めは漫荼羅の具足せるを見る三昧耶なり、未だ眞實の語を傳へず、彼の密印を受けず、第二の三昧耶は入て聖天の會を観るなり。第三は壇印を具し教に隨つて妙業を修す、復次に傳教を許すには三昧耶を具ふることを説く、印壇の位を具して教の所説の如くすと雖も未だ心灌頂に逮ばず、秘密の慧生せず、この故に眞言者祕密道場の中に於て第五の要誓を具へ法に隨つて灌頂すべし、當に知るべし此れに異なるものは三昧耶と名くるにあらず。善く住して

若し意を観ずれば眞言者心を覺て三處を得ざれば彼れを説いて菩薩と爲す。無縁の觀行を得て方便を以て衆生を利す、衆善本を植ゑしめんが爲なり、故に人中勝と號す、諸法の本寂にして常に自性なき中に於て安住すること須彌の如し、これを名けて見諦と爲す。これ空うして即ち實際なり、虚妄の言説にあらず、所見猶し佛の如し、先佛もかくの如く見たまへり。菩提心を速得する悉地は最も無上なり。これより五種の諸の悉地の差別あり、所謂修行に入ると諸地に勝進すると世間の五神通と諸佛と縁覺等となり、修業に間息なうして乃し心續淨に至り未だ熟せざるを成熟せしむ、その時悉地成ず、彼の一時の頃に於て淨業と心と俱に等し、眞言者當に悉地、意に隨つて生ずることを得べし。悉地、空界に昇ること幻の無畏者の如し。呪術の網に惑はさるゝこと帝釋の網に同じ。乾闥婆城の所有の諸の人民の如く身の秘密もかくの如し、身にあらず亦識にあらず。又睡の夢に於て諸天の宮に遊ぶともこの身をも捨てず、亦彼れも至らざるが如く、是くの如く瑜伽の夢の眞言行に住まるもの所の功德の業の身相猶し虹霓のごとし。眞言の如意珠、意語身より出生して念に隨ひ衆物を雨ふらすとも、分別の想なし猶し十方の虚空の諸の有爲の行を離るゝがごとく、眞言者も一切の分別の行に染

せられず、唯有想なりと解了して、是くの如く遍く觀察すれば、その時に眞語者を諸佛同く隨喜したまふ。正覺兩足の尊、二種の護摩を説きたまふ。所謂内及び外なり、増威も亦かくの如し、諸尊の珠類の性を觀察して當に證知すべし。世間の諸の眞言には今彼の限量を説く、福德自在等ある衆の知識る天神と彼の所説の明呪と及與大力の印とは、彼れは皆現世の界なり、故に分量ありと説く、成ずと強も堅住せず、悉くこれ生滅の法なり、出世間の眞言は無作にして本不生なり、業生悉く已に斷じ、戰勝して三過を離れたり。麟角の無師と及び佛の聲聞衆と菩薩と諸の眞言は彼の量我れ當に説くべし、三時を超越して衆縁より生起する所なり、可見と非見との果、意語身より生ず。世間の所傳の果と數とは一劫を經。等正覺の所説の眞言は劫數を過ぐ。大仙正等覺と佛子衆との三昧は、清淨にして想を離れたり。有想をば世間と爲す。業に従つて果を獲るものは成熟と熟時とあり、若し悉地を成ずることを得れば、自在に諸業を轉ず、心自性なきが故に、因果を遠離し。業生を解脱す、生、虚空に等同なり。また次に秘密主、諦に聽け、彼の密印と形相と聖天の位を敷置すると、威驗現前すると、三昧の所趣とかくの如くの五つは往昔の諸佛の菩提を成じたまふ法界虛

空の行なり、本誓願したまふところは、無餘の衆生界を度脱し、彼の眞言門に菩薩の行を修むる諸の菩薩を利益し安樂せんと欲ふが爲の故なり。金剛手の言く、かくの如く世尊願樂は聞かんと欲ふ時に薄伽梵、偈頌を以て曰く、最初の正等覺、敷置の漫荼羅は、密が中の秘密なり。大悲胎藏より生ず。及び無量の世間と出世との漫荼羅の彼の所有の圖像、次第に説かん當に聽くべし、四方にして普く周布せよ。一門及び通道あらしめよ。金剛印を以て遍く嚴る中に羯磨金剛あり。その上に妙蓮華あり。開敷して果實を含めり。彼の大蓮の印に於て大空點莊嚴せり。八葉悉く圓整し。善好にして鬚髮を具す。十二支生の句普遍く華臺の中にあり。その上にして兩足尊の導師正覺を成じたまふ。八漫荼羅の眷屬を以て自ら圍繞せり。當に知るべしこれ最初の悲生漫荼羅なり。これより諸壇を流す。各その本教の如し。事業と形と悉地と、諸佛子を安置するなり。復次に秘密主、如來の漫荼羅は猶し淨圓月の如し。内に商法の色を現す。一切の佛三角にして、白蓮華に在す、空點を標幟と爲し、金剛印を以て圍繞せよ。彼の眞言主に從つて周布して光明を放つ。無疑慮の心を以て、普遍して流出す。また次に秘密主觀自在者の、秘密漫荼羅佛子一心に聽け、普遍く四方の相にして、中に吉

祥の商法あり。鉢曇華を出生す、開敷いて、果實を含めり。上に金剛慧を表はす。承るに大蓮の印を以てせり。一切の種子を布して、善巧に以て種と爲し、多羅と毗俱知と及與白處尊と明妃資財主と及與大勢至と、諸の吉祥の受教と皆漫茶羅にあり。得自在者の印は殊妙に標相を作せ。何耶揭哩婆は法の如く三角に住して漫茶羅に圍繞せり。嚴好にして初日の暉あり。當に明王の邊に在くべし。巧慧のもの安立せよ。

また次に秘密主いま第二壇を説かん、正等四方の相にして金剛の印を以て圍繞せよ。一切妙にして金色なり。内心に蓮華を敷け。臺に迦羅奢を現す。光色淨月の如し。亦大空點を以て周帀して自ら莊嚴せよ。上に大風の印を表す。鬘鬘として猶し玄雲の如し。鼓動る幢幡の相なり。空點を標幟と爲よ。その上に猛焰を生ず、劫災の火に同じて三角形を作せ、三角を以てこれを圍せ。光鬘相周普して晨朝の日の暉の色なり。この中に鉢頭摩あり。朱顯なること猶し劫火のごとし。彼の上に金剛印あり、流散して焰暉を發す。持するに吽字の聲を以てせよ。勝妙種子の字を置け。先佛もこれ汝が勤勇の漫茶羅なりと説くこと、部母と商慈羅と及び金剛部生と金剛鈎と素支と大德持明王とありて一切皆この大漫茶羅の中に於て印

と壇と諸の佛子の形色あり。各次の如く類に隨つて相應せよ。諸業善く成就すまた次に我が所説の金剛自在とは謂く虚空無垢と金剛輪と及び牙と妙住と名稱と大忿と迅利と寂然と大金剛と并に青金剛と蓮華と廣眼と妙金剛と金剛と住無戲論と無量虚空歩となり。これ等の漫茶羅に所説の白黃赤乃至黑色等と印と形と及び所餘となり。三戟と一股印と二首皆五峯なると或は執金剛の鬘と、色類に隨つて區別なり。一切種子を作せ。大福德當に知るべし。不動漫茶羅は風輪と火と俱なり。涅槃底の方に依て、大日如來の下にあり。及び種子を置け、圍繞するに微妙の大慧刀を以てせよ。或はまた絹索印を置け具慧のもの安布せよ。降三世は殊異なり、謂く風輪の中にあつて繞すに金剛印を以てせよ。三處に住せり。復次に秘密主先づ漫茶羅の諸佛菩薩母を説かん。壇の形像を安置せば方正にして眞金色なり。金剛印を以て圍繞せよ、最勝の漫茶羅なり。今當に尊相を示す、彼の中に大蓮華あり。暉燄遍くして黄色なり。中に如來頂を置け、中分を超越して三分の位に至つて、如來眼を作すべし。自ら光燄の中に住す。遍く彼の種子を布せよ。次に一切菩薩の大如意寶尊をかけ、謂く彼の漫茶羅は圓白にして四に出でたり、遍く寂にして極めて清淨なり。一切の希願を滿つ、また次に諦聽すべし。釋

迦師子の壇は、謂く大因陀羅なり。妙善眞金色にして、四方の相均等なること前
 の如く金剛印をかけ、上に波頭摩を現せよ。周遍く皆黄暉なり。一大鉢を置け光
 焰を具せり。金剛印を以て圍繞せよ。袈裟錫杖等これを置くこと次第の如し。五
 種の如來頂諦に聽け今當に説くべし。白傘には傘印を以てす。具慧者勝頂には
 圓すに大慧刀を以てす。普遍く皆流光あり。最勝頂には輪印なり。除障頂には
 鈎印なり。大士頂には髻の相なり。これを火聚印と名く、廣生には跋折羅なり。
 發生は蓮華を以てし、無量聲は商估なり。觀察して像類を知れ、毫相は摩尼珠な
 り。佛眼は次に當に聽くべし。頂髻にして遍黄色なり。圓すに跋折羅を以てす。
 無能勝妃の印は、手を以て蓮華を持す。無能勝に大口をなして黒蓮の上在け、
 淨境界の行は所謂淨居天なり。彼の諸の印相を置け、佛子應に諦に聽くべし。
 所謂思惟手と善手と笑手と華手と虚空手となり、これを畫けること法則の如し。
 地神には迦羅奢なり。圓白にして金剛を圍らせ、諸召火天の印には當に大仙の手
 を以てすべし。迦攝と驕答摩と末建拏と竭伽と婆私と倪刺婆とに各その次第の
 如くの章陀の手を畫くべし。而して火壇の内に居く、閻摩には但茶の印なり。常
 に風輪の中に處し、沒栗底には鈴の印なり。黑夜は計都の印なり。滂達羅には輪

羅なり。大梵妃には蓮華なり。俱摩利には鑠底なり。毗瑟女には輪の印なり。當
 に知るべし。焰摩后には沒揭羅印を以てす。嬌吠離耶后には劫跋羅印を用ひよ。是
 の如き等は皆風漫茶羅の中にあり。烏鷺及び婆栖野干等圍繞せり。若し悉地を成
 せんと欲は法に依て以て之を圖すべし。涅哩底には大刀なり。毗細には勝妙の
 輪なり。鳩摩羅には燦底なり。難陀跋難陀には密雲と電と俱なり。皆清潭の色を
 具す、門の廂衛を夾輔して釋師子の壇にあり。商羯羅には三戟なり。妃には鉢盂
 印を作す。月天には迦羅奢なり。淨白にして蓮華敷たり。日天には、金剛輪なり
 表するに輿輅の像を以てす。社耶毗社耶は當に知るべし。大力のものなり。俱に大
 弓の印を以てす、因陀羅輪にあり。風方には風幢の印なり。妙音には樂器の印な
 り。縛嚙擊には縞索なり。圓壇の中にあり。汝大我應に知るべし。種子の字環繞
 せり。是の如く等の標誌は次の如く漫茶羅の釋師子の眷屬なり。今已に略して宣
 説す。佛子次に諦に聽け、施願金剛の壇は四方相均うして普し。衛すに金剛印を
 以てす。當に彼の中に於て火生漫茶羅を作して、内心にまた妙善の青蓮の印を安
 置すべし。智者曼殊音の本眞言を以てこれを圍せ。法の如く種子を布して以て種
 子とせよ。またその四傍に於て嚴飾るに青蓮を以てす。勤勇の衆を圖作ること各

その次第の如し。光網は鈎印を以てす。寶冠は寶印を持す。無垢光童子は青蓮にして未だ敷けず。妙音具大慧の所説の諸の使者は、當に知るべし彼の密印各その所應の如し。髻設尼には刀印なり。優波には儉羅印なり。質怛羅には杖印なり。地慧には懂印を以てす。彼の招召使者には鶯俱尸の印を以てせよ。一切かくの如く作せ。圍すに青蓮華を以てせよ。所有の諸の奉教には、皆差揭梨の印なり。また次に南方の印、除一切蓋障は、大精進の種子、謂く眞陀摩尼なりと。火輪の中に住して、翼従して端嚴の衆あり。當に知るべし彼の眷屬の秘密の標誌、次第に圖畫すべし。我れ今廣く宣説せん。除疑は寶瓶を以て、一股金剛を置く、聖者に施無畏は施無畏の手に作せ、除一切惡趣は、發起手を相と爲す。救意慧菩薩は悲手常に心に在り、大慈生菩薩は執華の手を以てすべし。悲念、心上にあり。火輪手を垂れ屈す。除一切熱惱は施諸願手に作せ。甘露の水流注して遍く諸指の端に在れば、具不思議慧は如意珠を持する手なり。皆蓮華上に住して、漫茶羅の中にあり。北方の地藏尊の密印は次に當に説くべし。先づ莊嚴の座を作して因陀羅壇に在り、大蓮、光焰を發して間錯して衆色を備へたり。彼れに於て大幢を建て、大寶をその端に在り、これを名けて最勝密印の形像と爲す。また當に慇懃に上首

の諸の眷屬を作す。無量無數の衆あり。彼の諸の慕達羅は、寶作には寶上に於て三股金剛の印あり。寶掌には寶上に於て一股金剛の印あり。持地には寶上に於て二首金剛の印あり。寶印の手には寶上に於て五股金剛の印あり。堅意には寶上に於て羯磨金剛の印あり。一切皆かの漫茶羅の中に住すべし。西方の虚空藏は圓白悅意の壇にして大白蓮華の座あり。大慧刀の印を置け。かくの如くの堅利刀は鋒銳なほ氷霜のごとし。白種子を種と爲す。智者當に安布すべし。及び諸眷屬の印形を畫くこと法教の如く、虚空無垢尊は應當に輪印を以てすべし。輪像自ら圍繞す。具足の風壇にあり。虚空慧は商法を風漫茶羅に在り、清淨慧は白蓮を風漫茶羅に在り、行慧の印相は當に碇磔寶を以てすべし。上に青蓮華を挿さむ、風漫茶羅にあり。安慧は金剛蓮を風漫茶羅に在り。略して佛の秘藏の諸尊の密印を説き竟んぬ。

入秘密漫茶羅法第十二

その時に世尊又復入秘密漫茶羅の法を宣説したまふ優陀那に曰く。眞言遍學者、秘密壇を通過して法の如く弟子の爲に一切の罪を燒盡す。壽命悉く焚滅して、彼れをしてまた生ぜざらしむること灰燼に同じ已て彼の壽命還復す

謂く字を以て字を焼き、字に因て更に生ず、一切の壽と生と清淨にして遍く無垢なり、十二支句を以て彼の器に作せ、是くの如くの三昧耶は一切の諸如來と菩薩救世者と及び佛の聲聞衆と乃至諸の世間と平等にして違逆せず、この平等誓の秘密漫荼羅を解しなば一切の法教に入るに諸壇に自在なることを得。我が身かれに等同なり。眞言者も亦然なり。相異ならざるを以ての故に説いて三昧耶と名く。

入秘密漫荼羅位品第十三

その時に大日世尊、等至三昧に入て未來世の諸の衆生を觀たまふが故に定中に住したまふ。即時に諸佛の國土地平かなること掌の如し。五寶間錯し、大寶の蓋を懸けて門標を莊嚴す。衆色流蘇して、その相長廣なり、寶鈴と白拂と名衣と幡珮と綺綯垂布して、これを技飾す。八方の隅に於て摩尼幢を建て八功德水芬馥し盈満せり。無量の衆鳥鴛鴦鵝鵠あつて和雅の音を出す。種種の浴池時華雜樹敷榮し間列して芳茂嚴好なり。八方に合して五寶の瓔珞を繫けたり。その地柔軟なること猶綿續の如し。これを觸踐するもの皆快樂を受く、無量の樂器自然に韻を諧らぶ、その聲微妙にして人の聞かんと樂ふところなり。無量菩薩の隨福所感宮室殿堂意生の座あり。如來の信解願力より生るゝところの法界標幟なり大蓮華王を出

現して如來の法界性身その中に安住し、諸衆生種種の性欲に隨つて觀喜を得しめたまふ時に彼の如來の一切の支分に無障礙力あり。十智力信解より生ずるところなり。無量の形色莊嚴の相あり。無數百千俱胝那由他劫の布施持戒忍辱精進禪定智慧諸度の功德に資長せらるゝを以て身即時に出現す。かれ出現し已て諸世界大衆會の中に於て大音聲を發して偈を説いて曰く、諸佛は甚だ奇特にして權智不思議なり。無に於いて阿頼耶慧を以て含藏して諸法を説きたまふ。若し無所得を解するに諸法の法相に於て彼れ無得を得て諸佛の導師を得。

かくの如き音聲を説いて已つてまた如來不思議法身に入る。その時に世尊また執金剛秘密主に告げて言はく善男子諦に自心漫荼羅を聽け、秘密主彼の身地は即ちこれ法界自性なり。眞言密印の加持を以てこれを加持す。本性清淨なるを以ての故に羯磨金剛を以て護持せらるゝが故に一切の塵垢の我と人と衆生と壽者と意生と儒童と造立者等との株杓の過患を淨除す。方壇にして四門あり。西に向ふは通達せり。界道を周旋せよ、内に意生の八葉の大蓮華王を現す。抽莖敷葉綵綯端妙なり。其中に如來有ます。一切世間に最も尊特の身なり、身語意地を超越して

心地に至り、殊勝悦意の果を逮得す。彼れに於て東方に寶幢如來南方に開敷華王如來北方に鼓音如來西方に無量壽如來なり。東南方に普賢菩薩、東北方に觀自在菩薩。西南方に妙吉祥童子、西北方に慈氏菩薩なり。一切藥の中には佛菩薩母六波羅蜜三昧の眷屬を以て自ら莊嚴す。下には持明諸忿怒衆を列ぬ。持金剛主菩薩を以てその莖となして無盡の大海に處せり。一切の地居天等その數無量なり、これを環繞す。

その時に行者三昧耶を成せんが爲の故に意生の香華燈明塗香種種の肴膳を以て一切皆以てこれを献すべし。優陀那に曰く、眞言者誠諦漫荼羅を圖畫せよ、自身を大我と爲し、囉字を以て諸垢を淨む。瑜伽座に安住して諸の如來を尋念し、頂に諸弟子に阿字の大空點を授けよ。智者妙華を傳へて自身に散せしめ、爲に内に見らるゝ所の行人宗奉の處を説け、これ最上の壇なるが故に三昧耶を與ふべし。

秘密八印品第十四

その時に毗盧遮那世尊また諸の大衆會を觀じて、執金剛秘密主に告げて言はく、佛子、秘密八印あり最も秘密と爲す、聖天の位威神の同する所なり。自ら眞言道

を以て標幟となす。具漫荼羅を圖すること本尊の如く相應せよ。若し法教に依て眞言門に於て菩薩の行を修むる諸の菩薩は、かくの如く知るべし。自身本尊の形に住して堅固にして不動なり。本尊を知り已つて本尊の如く住すれば悉地を得。云何か八印謂く智慧三昧に手を以て空心合掌に作りて風輪地輪を散じて光焰を放つが如くす。これ世尊の大威徳生の印なり。その漫荼羅三角にして光明を具す。彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一嚩囉一莎訶

即ちこの印を以て風輪を屈して、虚空輪の上に於て嚩字の形の如くす。これ世尊の金剛不壞の印なり。その漫荼羅は嚩字の相の如くして金剛光あり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一嚩囉二莎訶

また初の印を以て水輪火輪を散ず、これを蓮華藏の印と名く、その漫荼羅は月輪の相の如く波頭摩華を以てこれを圍繞す。彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一嚩囉二莎訶

即ちこの印を以て二地輪を屈して掌中に入る、これ如來の萬徳莊嚴の印なり。その漫荼羅は猶し半月形の如し、大空點を以てこれを圍す、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一含鶴二莎訶

また定慧の手を以て未開敷華合掌に作して二虚空輪を建立てや、これを屈す。これ如來の一切支分生の印なり。その漫荼羅は迦羅捨滿月の形の如し。金剛を以てこれを圍らせ彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一暗噫二莎訶

即ちこの印を以てその火輪を屈す。餘の相は前の如し、これ世尊の陀羅尼の印なり、その漫荼羅は猶し彩虹の如くして遍くこれを圍らし、金剛の幡を垂る、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一勃駄陀羅尼一娑沒唎合底沫羅駄那羯囉三駄囉也薩鏤四簿伽輕轉底五阿去迦引囉轉底六三麼曳七莎訶

また虚心合掌を以て火輪を開散し、その地輪空輪和合して相持す、これを如來の法住印といふ、その漫荼羅猶し虚空の如くして雜色を以てこれを圍せ、二の空點あり、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一阿去吠娜尾泥二莎訶

前に同く虚心合掌にして智慧三昧の手を以て互相に加へ持して自ら旋轉す、これを世尊の迅疾持の印といふ。その漫荼羅は亦虚空の如くして青點を以てこれを嚴れ、彼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃一摩訶引瑜伽輕瑜擬反寧一瑜詣誥

嘽囉三欠若喇計四莎訶

祕密主これを如來祕密の印と名く、最勝祕密なり。輒く人に授與すべからず。已

灌頂のその性調柔精勤堅固にして殊勝の願を發して師長を恭敬し、恩徳を内に念ずるもの外清淨にして自身命を捨て、法を求むるものを除く。

持明禁戒品第十五

その時等剛手また偈頌を以て大日世尊に持明禁戒を請問したてまつる、眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩の爲の故なり。

云何が禁戒を成する、云何か尸羅に住する、云何か所住に隨つて修行して諸の着を離る。修行に幾くの時月あつてか禁戒終竟ることを得る。何の法教に住して、彼の威徳を知る、時方作業及び法非法等を離る。云何にして速に成する。願くは佛その量を説きたまへ。先佛の宣説したまふ所なり。悉地を得しめたまへ。我れ一切智の正覺兩足の尊に問ひたてまつる。未來衆生の爲なり。人中尊證知したまへり。

この時薄伽梵、毗盧遮那、衆生を哀愍したまふが故に偈を説いて言はく、善哉勤勇士、大徳持金剛所説の殊勝の戒は古佛の開演したまふ所なり。明に縁つて起る所の戒は戒に住すること正覺の如くして悉地を成することを得しむること世間を利するが爲の故なり。等しく自眞實を起して疑慮の心を生せず、常に等引

に住して戒を修行して當に覺るべし。菩提心と法と修學の業と果と和合して一相と爲り。諸造作を遠離す。具戒は佛智の如し、これに異なるは具戒にあらず、諸法に自在を得て通達して衆生を利す、常に無着の行を修すれば礫石と衆寶と等しくす。乃ち落叉を滿つるに至つて所説の眞言教、時月等を畢へて、禁戒の量終竟す。最初には金輪の觀、大因陀羅に住して當に金剛印を結び乳を飲むで以て身を資すべし。行者一月滿して能く出入の息を調ふ、次に第二月に於ては水輪の中に嚴整して、蓮華印を以て醇淨の水を服すべし。次に第三月に於ては勝妙火輪の觀、不食の食を噉せよ、印は大慧刀を以てす。一切の罪を燒滅して身言語を生ず。第四月には風輪、行者常に風を服して轉法輪の印を結んで心を攝して以て持誦せよ。金剛水輪の觀、瑜伽に住するに依てこれを第五月と爲す。得非得を遠離し、行者所着無うして三菩提に等同なり。風火輪を和合して、衆過患を出過す。また一月持誦して亦利と非利とを捨てよ、梵釋等の天衆摩睺毗舍遮遠く住して敬禮し一切守護を爲し。皆悉く教命を奉く。彼れ常にかくの如きことを得たり。人天の藥草神持明の諸靈仙その左右に翊侍して、所命に隨つて當に作すべし。不善爲障のもの羅刹五母等、持眞言者を見て恭敬して之を遠ざかる、この處の光明を見

て馳せ散ること猛火の如し、所住法教に隨つて皆明禁に依るが故に等王覺の眞子一切自在を得て難降のものを調伏すること大執金剛の如し。諸の群生を饒益すること觀世音に同じ、六月を経逾し已つて所願に隨つて果を成す。常に當に自他に於て悲愍して救護すべし。

阿闍梨眞實智品第十六

その時に持金剛者次にまた大日世尊に諸漫荼羅の眞言の心を請問したてまつりて偈を説いて言く、
 云何か一切の眞言實語の心とする。云何か解了して説いて阿闍梨と名くる。その時に薄伽梵大毗盧闍那、金剛手を慰諭したまふ。善哉摩訶薩、彼の心をして歡喜せしむ。またかくの如き言を告げたまふ。祕中の最祕眞言智の天心を解する。今汝が爲に宣説せん。一心に諦に聽くべし。所謂阿字とは一切の眞言の心なり。これより遍く無量の諸眞言を流出して、一切の戲論息んで能く巧智慧を生ず。祕密主何等か一切の眞語心なる。佛兩足尊阿字を説いて種子と名く、故に一切是くの如し諸の支分に安住す。相應の如く布し已つて法に依て皆遍く授けよ。彼の本初の字、増加の字、遍在するに由て衆字以て音を成す。支體これに由て生ず。故に一

切の身に遍して種種の徳を生ず。今分布する所を説くは佛子一心に聴け。心を以ては心と作せ。餘は以て支分に布せよ。一切是くの如く作せ。即ち我體に同じ。瑜伽座に安住して諸如来を尋ね念ふべし。若しこの教法に於てこの廣大智を解するは正覺大功徳なり。説いて阿闍梨と爲す。これ即ち如来と爲す。亦即ち名けて佛と爲す。菩薩と梵天と毗紐と摩醯羅と日月天と水天と帝釋と世間主と黑夜と焰摩等と心神と妙音と梵志と常浴となり。亦梵行者とも名く、漏盡と比丘衆と吉祥と持秘密と一切知見者と法自在と財富となり。若しは菩提心と及與聲智性とに住して、一切の法に着せざるを説いて遍一切と名く。即ちこれ眞語者と持吉祥眞言と眞實語の王と持執金剛印となり。所有の諸の字輪は若し支分にあらんには當に知るべし、眉間卍字金剛の句を住せしめ。娑字を膺の下に在く、これを蓮華句と謂ふ。我れ即ち心位に同じ、一切處に自在なり。普く種種の有情及び非情遍す。阿字は第一の命なり嚩字を名けて水と爲す。囉字を名けて火と爲す。卍字を忿怒と名く、佉字は虚空に同なり。所謂極空の點なり。この最眞實を知るを説いて阿闍梨と名く、故に應に方便を具し佛の所説を了知すべし。常に精勤に修することを作して當に不死の句を得べし。

布字品第十七

その時に世尊また金剛手に告げて言はく、また次に秘密主、諸佛の宣説したまふ所の諸の字門を安布すること、佛子一心に聴くべし。迦字は咽の下にあり。佉字は膺の上にあり。哦字を以て頸と爲す。伽字は喉の中にあり。遮字を舌根と爲す。車字は舌中にあり。若字舌端にあり。闍字は舌の生處なり。吒字を以て脛と爲す。陀字は知るべし髀なり。拏字を説いて腰と爲す、茶字を以て坐に安す。多字最後分なり。他字は知るべし腹なり。娜字は二手と爲す。駄字を名けて脇となす。波字を以て背と爲す。頗字は知るべし胷なり。麼字を二肘と爲す。婆字は次に臂の下なり。莽字は心に住す。耶字は陰藏相なり。囉字を名けて眼となす。邏字を廣額と爲す。縊伊は二の背にあり。塢鳥は二の脣と爲す。翳藹を二耳と爲す。汗奥を二の頬となす。暗字は菩提句なり。噫字は般涅槃なり。この一切法を知る行者正覺を成すべし。一切智の資財常にその心にあり。世に一切智と號す、これを薩婆若といふ。

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第五終

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第六

受方便學處品第十八

その時に執金剛祕密主、佛に白して言さく、世尊願はくは諸の菩薩摩訶薩等の智慧方便を具して、修學する所の句を説いて歸依者をして諸の菩薩摩訶薩に於いて二意あるなく疑惑の心を離れて生死流轉の中に於いて常に不可壞ならしめたまへ。かくの如く説き已つて毗盧遮那世尊、如來眼を以て一切法界を觀じて執金剛祕密主に告げて言はく、諦に聽け。金剛手今善巧修行の道を説かん。若し菩薩摩訶薩、こゝに住するものは當に大乘に於いて通達することを得べし。祕密主菩薩不奪生命戒を持して爲すべからざる所なり。不與取と欲、邪行と虚誑語と龜惡語と兩舌語と無義語との戒を持し、貪欲瞋恚邪見等皆作すべからず。祕密主かくの如く修學する所の句は菩薩修學する所に隨つて正覺世尊及び諸菩薩と同行なり。應にかくの如く學ぶべし。

その時に執金剛祕密主、佛に白して言さく、世尊薄伽梵、聲聞乘に於いて亦かくの如くの十善業道を説きたまふ。世間の人民及び諸の外道亦十善業道に於いて常

に願つて修行す。世尊彼れ何の差別がある。云何が種種に殊異なる。かくの如く説き已つて佛執金剛祕密主に告げて言く善哉善哉祕密主、汝また善哉能く如來にかくの如くの義を問ひたてまつる。祕密主應當に諦に聽くべし。我今差別の道、一道の法門を演説せん。祕密主若し聲聞乘の學處我れ慧の方便を離れて教令を以て成就し、邊智を開發す等く行するに十善業道を非すと説く。彼の諸の世間はまた我に執着するが故に他因に轉せらるゝを離る。菩薩は大乗を修行して一切法平等に入て智慧方便を攝受して、自他俱なるが故に諸の所作轉ず。この故に祕密主菩薩は、こゝに於いて智の方便を攝し一切法平等に入て當に勤めて修學すべし。その時に世尊また大慈悲眼を以て諸の衆生界を觀察して金剛手菩薩に告げて言く祕密主彼の諸の菩薩は盡形壽、不奪生命戒を持す。刀杖を捨て、殺害の意を離れ他の壽命を護ること猶し己身の如くなるべし。餘の方便あつて諸の衆生類の中に於いてその事業に隨つて彼の惡業の報を解脱せんが爲めの故に施作する所あれば怨害の心にあらず。復次に祕密主菩薩、不與取戒を持して若し他の所攝の諸の受用の物には觸取の心不起さず。況やまた餘の物の與へざるを取らんや。餘の方便あり、諸の衆生の慳

愆積聚して施福を修せざるを見ては、その像類に随つて彼の慳を害ふが故に自他
 を離れて、彼れが爲に施を行す。讚する時に因て施するは妙色等を獲、祕密主若
 し菩薩、貪心を發起して、これを觸取するは、この菩薩は菩提分を退して無爲の
 毗奈耶の法を越ゆ。
 また次に祕密主菩薩、不邪淫戒を持して若し他の所攝と自妻と自種族と標相の所
 護とに貪心を發さざれ。況んやまた非道に二身交會せんをや。餘の方便あれば度
 すべき所に随つて衆生を攝護せよ。
 また次に祕密主、菩薩盡形壽不妄語戒を持して設ひ活命の因縁の爲にも妄語すべ
 からず。即ち諸佛の菩提を欺誑するに爲る、祕密主これを菩薩の最上の大乘に住
 すと名く。若し妄語せば佛菩提の法を越失す。この故に祕密主この法門を是くの
 如く知つて不眞實語を捨離すべし。
 また次に祕密主菩薩、不麤惡罵戒を受持して應當に柔軟の心語隨類の言辭を以て
 諸の衆生等を攝受すべし。何を以ての故に祕密主菩提薩埵の初行は衆生を利樂
 す。或は餘の菩薩、惡趣の因に住するものを見ては、これを折伏せんが爲に麤語
 を現す。

また次に祕密主菩薩、不兩舌語戒を受持して間隙語を離れ惱害語を離るべし。犯
 せば菩薩と名くるに非ず、衆生に於いて離折の心を起さず。異の方便あり、若し
 かの衆生所見の處に隨つて着を生せばその像類の如く離間の言語を説いて一道に
 住せしめよ。所謂一切智智の道なり。
 また次に祕密主菩薩、不綺語戒を持して、隨類の言辭を以て時方和合して義利を
 出生し一切衆生をして歡喜の心を發し耳根の道を淨めしむべし。何を以ての故
 に、菩薩は差別の語あるが故に或は餘の菩薩、戲笑を以て先と爲す。衆生の欲樂
 を發起して佛法に住せしむるは、具に無義利の語を出すと雖も、かくの如くの菩
 薩は生死の流轉に着せざるなり。また次に祕密主、菩薩應當に不貪戒を持すべし
 彼の他の物を受用する中に於いて染思を起さざる、何を以ての故に菩薩は着心を
 生ずることあることなきが故に、若し菩薩心に染思あれば彼れ一切智門に於いて
 力無うして一邊に墮す、又祕密主菩薩應に歡喜を發起して是くの如くの心を生ず
 べし。我が作すべき所を彼れをして自然に生ぜしめ極めて善哉と爲す。數自ら
 慶慰す。彼の諸の衆生をして資財を損失せしむることなかれ、故に
 また次に祕密主菩薩、應當に不瞋戒を持して一切處に遍し常に安忍を修すべし。

瞋と喜とに着せず。怨及び親に於いて其の心平等にして轉ず。何を以ての故に菩提薩埵は悪意を懐くにあらず、所以いかなとなれば菩薩は本性清浄なるを以ての故に秘密主菩薩應に不瞋悲戒を持すべし。復次に秘密主菩薩應當に邪見を捨離して正見を行じ、他世を怖畏し害なく曲なく諂なく、その心端直にして佛法僧に於いて心に決定を得べし。この故に秘密主邪見は最も極大の過失と爲す。能く菩薩の一切善根を斷ず。これ一切の諸の不善法の母たり。この故に秘密主下戲笑に至るまで亦當に邪見の因縁を起さざるべし。

その時執金剛秘密主、佛に白して言さく、世尊願くは十善道戒の極根を斷ずる斷を説きたまへ。云何か菩薩王位自在にして宮殿に處し。父母妻子眷屬圍繞し。天の妙樂を受けて過を生ぜざる。是の如く説き已つて佛、執金剛に告げて言はく善哉秘密主汝當に諦聽すべし。善く思ひこれを念す。吾れ今菩薩の毗尼の決定善巧を演説せん。秘密主知るべし菩薩に二種あり。云何か二とする、所謂在家と出家となり。秘密主彼の在家の菩薩は五戒の句を受持す。勢位自在にして種々の方便道を以て時方に隨順し、自在に攝受して一切智を求む。所謂方便を具足して舞伎天祠主等の種種の藝處を示現し彼彼の方便に隨つて四攝の法を以て衆生を攝取し、

皆阿耨多羅三藐三菩提を志求せしむ。

謂く不奪生命戒及び不與取、虛妄語、欲邪行邪見等を持するこれを在家の五戒の句と名く、菩薩受持の所説の善戒の如き具に諦に信じ當に勤めて修學すべし。往昔の諸の如來の學處に隨順す。有爲の戒に住し。智慧の方便を具足して如來の無上吉祥の無爲戒蘊に至ることを得。四種の根本罪あり乃至活命の因縁にも亦應に犯すべからず云何か四とする謂く諸法を謗すると菩提心を捨離すると慳慳すると衆生を惱害するとなり、所以いかなとなればこの性はこれ染なり菩薩戒を持するにあらず。何を以ての故に過去の諸正覺及與未來世現在の人中の尊、智と方便とを、具足して無上覺を修行して無漏の悉地を得たまへり。亦餘の學處の方便智を離れたるを説くことは當に知るべし。大勤勇、諸の聲聞を誘進するなり。

說百字生品第十九

その時毗盧遮那世尊、諸の大會の衆を觀察して、不空敎の樂欲に隨つて一切を成就する眞言の自在と眞言の王と眞言の導師との大威德者を説きたまふ。三三昧耶に安住して三法を圓滿せんが故に妙音聲を以て大力金剛手に告げて言く勤勇士一心

諸の眞言を聴け、眞言の導師即時に智生三昧に住して而も種種の巧智を出生する百光遍照の眞言を説いて曰く、南麼三曼多勃駄喃暗、佛、金剛手に告ぐこれ一切眞言の眞言救世者なり、大威徳を成就したまへり、即ちこれ正等覺法自在牟尼なり諸の無智の暗を破ること日輪の普く現するが如く、これ我が自體なり。大牟尼加持を以て衆生を利益するが故に應化して神變を作し乃至一切をして思願に随つて生起せしむ。悉く能く爲に神變の無上の句を施作す。故に當に一切種に於いて淨身にして諸垢を離れ理に應じて常に勤修して佛菩提を志願すべし。

百字果相應品第二十

その時毗盧遮那世尊、執金剛秘密主に告げて言はく秘密主若し大覺世尊の大地灌頂地に入れば自ら見に三昧耶の句に住す。秘密主、薄伽梵の大智灌頂に入れば即ち陀羅尼形を以て佛事を示現す。その時大覺世尊隨つて一切の諸の衆生の前に住して佛事を施作し、三昧耶の句を演説したまふ。佛の宣く秘密主、我が語輪の境界の廣長にして遍く無量世界に至る清淨門を觀すべし。その本性の如く隨類の法界門を表示して、一切衆生をして皆歡喜を得しむること亦今者の釋迦牟尼世

尊の無盡虚空界に流遍して諸の刹土に於いて佛事を勤作するが如し。秘密主、諸の有情の能く世尊のこの語輪相より正覺の妙音莊嚴の瓔珞を流出し胎藏より佛の影像を生じて衆生の性欲に隨つて歡喜を發さしむるを知るにあらず。その時に世尊、無量の世界の門に於いて法界に遍じて慇懃に勸發して菩提を成就し、普賢菩薩の行願を出生したまふ。この妙華布地胎藏莊嚴世界の種性海の中に於いて受生して種種の性清淨の門を以て佛刹を淨除し菩提場を現じて佛事を作して、次にまた三藐三菩提の句を志求するもの心の無量を知るを以ての故に身の無量を知る。身の無量を知るが故に智の無量を知る。智の無量を知るが故に即ち衆生の無量を知る。衆生の無量を知るが故に即ち虚空界の無量を知る。秘密主、心の無量に由るが故に四種の無量を得已つて最正覺を成ず、十智力を具し四魔を降伏す無所畏を以て獅子吼す、佛偈を説いて言く、勤勇この一切の無上覺者の句は、百門の覺處に於いて、諸佛の説きたまふ所の心なり。

百字位成品第二十一

その時に執金剛秘密主、未曾有を得て偈を説いて言さく、佛の眞言救世者の能く

一切諸の眞言を生ずることを説きたまへ、摩訶牟尼云何か知る、誰れか能くこれを知る何の處にか従る。誰れか是の如くの諸の眞言を生ずる、生ずるものを誰と加する唯演説したまへ、大勤勇士説の中上なる人、かくの如くの一切を願はくは開示したまへ。

その時に薄伽梵法自在牟尼圓滿普く周遍して悉く諸の世界に遍じたまふ。一切智慧者の大日尊告げて言はく善哉摩訶薩大徳金剛手、吾れ當に一切を説くべし、微密にして最も希有なり。諸佛の秘要は外道は知ること能はず。若し悲生漫茶に大乘の灌頂を得つれば調柔にして善行を具し常に悲をもて他を利するものなり縁あつて菩提を觀する、常に見ること能はざる所なり。彼れよくこの内心の大我を知ることをあればその自心の位に隨つて導師所住の處あり。八葉の意より生ぜる蓮華は極めて嚴麗なり。圓滿の月輪の中に無垢にして猶し淨きこと鏡のごとし。彼れに於いて常に安住せば眞言救世の尊なり。金色にして光焰を具せん。三昧に住して毒を害す。日の觀るべきこと難きが如く諸の衆生も亦然なり。常恒に内外に於いて普く周遍して加持す。是くの如くの慧眼を以て意の明鏡を了知す。眞言者の慧眼を以てこの圓鏡を觀するが故に、當に自の形色の寂然として正覺相なる

を見るべし。身と身より生ずる影像と意は意より生ずるところなり。常に清淨の種種の自作業を出生す。次に彼の光現するに於いて圓照なること電燐の如し、眞言者能く一切の諸の佛の事を作す。若し清淨を見成せば、聞等も亦復然なり。意の思念するところの如く能く諸の事業を作す。また次に秘密主眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は是くの如く自身の影像生起す。殊勝なること三菩提に過ぎたることあること無し。眼耳鼻舌身意等の四大種の攝持し集聚するが如く、彼れかくの如く自性空にして唯名號の所執のみあり。猶し虚空の如くして、執着する所無きこと影像に等し、彼の如來、正覺を成じて互相に縁起したまふこと間絶あることなし。若し縁に従つて生ずること彼れ即ち影像の生ずるが如し。この故に諸の本尊は即ち我なり。我は即ち本尊なり。互相に發起す身より生ずる所の身より尊の形象生ずるなり。秘密主觀すべしこの法は通達惠により通達惠は法により彼れ等遞に作業を作し無住にして性空なり。秘密主云何か意より意を生じ能く影像を生ずる。秘密主譬へば若しは白若しは黄若しは赤作意するものの作す時に染着意生ずるが如く彼れと同類にして是くの如く身轉す。秘密主又内に意中の漫荼羅を觀するが如きは熱病を療治するに彼の衆生の熱

病即時に除癒して疑惑あることなし。漫茶羅の意に異なるに非ず。意の漫茶羅に異なるにあらす。何を以ての故に彼れ漫茶羅と一相なるが故に秘密主又幻者の男子を幻作して彼の男子又また化を作すが如きは、秘密主意に於いて云何が彼れ何なるものを勝とする、時に金剛手、佛に白して言さく世尊この二人は相異なること無し。何を以ての故に世尊實に生ずるに非ざるが故にこの二の男子は本性空なるが故に幻に等同なり。是くの如く秘密主意より生ずるもろくの事及び意の所生かくの如く俱に空にして無二無別なり。

百字成就持誦品第二十二

その時に世尊、執金剛秘密主に告げて言はく諦に聽け、秘密主眞言救世者は身と身と異分あることなし。意は意より生じて能く淨除せしむれば、普く皆光あり彼の處より流出す。相應して起して諸の支分に遍す。彼の愚夫の類は常に知らざるところなり。この道を達せず乃至身の所生の分無量種なるが故にかくの如くの眞言救世者の分説も亦無量なり。譬へば吉祥の眞陀摩尼の諸の樂欲に隨つて饒益をなすが如し。是くの如く世間に世を照らす者の身は、一切の義利成せずといふ所なし。秘密主云何が無分別の法界に一切の作業隨轉する秘密主また虚空界の衆生

にあらず。壽者にあらず、摩奴闍にあらず、摩納婆にあらず、作者にあらず、吠陀にあらず能執にあらず、所執にあらず、一切の分別及び無分別を離るれども彼の無盡の衆生界の一切の去來有所有作に疑心を生ぜざるが如く、かくの如くの無分別の一切智も虚空に等同にして一切衆生に於て内外に轉じたまふ。その時に世尊又復無盡衆生界を淨除する句。三味を流出する句。不思議の句。他門に轉ずる句を宣説したまふ。

若し本より所有なければども世間に隨順して生ぜば、云何か空を生ずることを了知せん。この瑜伽者若し自性かくの如し、覺不可得なりと名く當に等空の心生すべし。所謂菩提心なり。慈悲を發起して諸の世間に隨順すべし。唯想の行に住するこれを諸佛と名く。當に知るべし想より造立す。これを觀じて空空と爲す。下數法の轉じて一を増して分異なるが如く勤勇の空も亦然なり。增長すること次第に隨ふ。即ちこの阿字等の自然知の加持なり。

阿婆嚩 迦佉哦伽 遮車若社 吒唎弩茶 多他那駄 波頗摩婆 野囉邏嚩奢 沙娑訶乞灑 仰壤 拏 曩 菴

秘密主これを觀れば空の中より流散す。阿字にこれ加持せられて三味道を成就す

を以て照明を爲せ。故に阿字等の類の無量の眞言を想へ。

說菩提性品第二十四

譬へは十方の虚空の相の常に一切に遍じて所依なきが如く、かくの如く眞言救世者も、一切の法に於いて所依なし。又空中のもろ／＼の色像の現に見るべしと雖も依處無きが如く、眞言救世者も亦然なり。彼の諸法の所依の處にあらず。世間成立の虚空の量は去來現在の世を遠離せり。若し眞言救世者を見れば亦復三世法を出過せり。

唯し名趣に住して、作者等を遠離せり。虚空のもろ／＼の假名は導師の宣説したまふところなり。名字は所依なきこと亦復虚空の如し。眞言自在にして然なり。現見すれども言説を離れたり。火水風等にあらず、地にあらず日光にあらず、月の衆曜にあらず、晝にあらず、亦夜にあらず、生にあらず、老病にあらず、死にあらず、損傷にあらず、刹那の持分にあらず亦年歳等にあらず、亦成壞あるにあらず劫數不可得なり。淨染の衆生にあらず。或は果亦不生なり。若し是くの如く等の種種の世の分別なくば彼れに於いて常に勤修して一切智の句を求むべし。

三三昧耶品第二十五

その時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、世尊所説の三三昧耶は云何かこの法を説いて三三昧耶とするか。是くの如く言ひ已つて世尊、執金剛秘密主に告げて言はく善哉善哉秘密主汝吾れに是くの如くの義を問ふ、秘密主汝當に譯に聽き善くこれを思念すべし。吾れ今演説せん。金剛手の言さく是くの如し世尊願樂くは聞かんと欲ふ。佛の言さく三種の法相續することあり、除障と相應して生ずるを三三昧耶と名くと、云何か彼の法相續して生ずる、所謂初心には自性を觀せず、これより慧を發し、如實の智生じて無盡の分別の網を離る、これを第二の心と名く。菩提の相は無分別の正等覺の句なり。秘密主彼れ實の如く見已つて無盡の衆生界を觀察して悲自在に轉ず。無縁の觀をもて菩提心生ず。所謂一切の戲論を離れて衆生を安置し皆無相菩提に住せしむる、これを三三昧耶の句と名く。また次に秘密主、三三昧耶あり。最初は正覺の心なり。第二をば名けて法とす。彼れより。必相續して生ずれば、所謂和合僧なり。この三三昧耶を諸佛の導師説きたまふ。若しこの三等に住して菩提の行を修行すれば諸の導門の上首として諸の衆生を利することを得べし。當に菩提を成じ三身自在に轉ずることを得べし。秘密主三藐三佛陀、教を安立したまふが故に一身を以つて加持したまふ。所謂初變

化の身なり。また次に秘密主次に一身に於いて三種を不現したまふ。所謂佛法僧なり。また次に秘密主これより成立して三種の乗を説き廣く佛事を作し、般涅槃を現じ衆生を成熟したまふ。秘密主彼の諸の眞言門に菩提の行を修する諸の菩薩を觀すべし。若し三等を解りて眞言の法則に於いて成就を作して、彼れ一切の妄執に着せざれば、能く障礙をなすものなし。不樂欲と懈怠と無利の談話と不生信心と積集資財とのものを除く。また二事を作さざるべし。謂く諸の酒を飲むと及び牀の上に寝るとなり。

說如來品第二十六

その時に執金剛秘密主、世尊に白して言さく。云何か如來と爲くる、云何か人中の尊。云何が菩薩と名け、云何が正覺とする。導師大牟尼願はくは我が所疑を斷じたまへ、菩薩大名稱、疑慮の心を棄捨して當に修すべし摩訶衍の行の王として上あること無からんと。その時薄伽梵毘盧遮那諸の大會の衆を觀察して、執金剛秘密主に告げて言はく善哉善哉金剛手能く我れにかくの如きの義を問ふ、秘密主汝まさに諦に聽き善くこれを思念すべし。吾れ今摩訶衍の道を演說せん。頌に曰く

菩提は虚空の相なり。一切の分別を離れたり。彼の菩提を樂求するを菩提薩埵と名く、十地等を成就して、自在に善く諸法は空にして幻の如しと通達す、これ一切同なりと知り、もろもろの世間の趣を解す。故に名けて正覺と爲す。法は虚空の相の如く、無二にして唯一相なり。佛の十智力を成す故に三菩提と號す。ただし慧を以て無明を害し自性言説を離れたる自證の智慧あり、故に説いて如來と名く。

世出世護摩法品第二十七

また次に秘密主往昔に一時我れ菩薩となつて菩薩の行を行じて梵世に住せし時に梵天あつて來つて我れに問うて言はく大梵我れ等知らんと欲ふ、火に幾種かある。時に我れ是くの如く答へて言く。次は大梵天の子彼れを籤嚙句と名く、世間の火の所謂大梵天を我慢自然と名く。次に大梵天の子彼れを籤嚙句と名く、また詞嚙奴合初なり。その子を梵飯と名け。子を畢但囉と吠濕婆捺羅と名く。また詞嚙奴合毗嚙訶那と籤說三鼻觀及び阿闍未拏とを生ず。彼の子は鉢體多と補色迦路陶となり。かくの如くの諸の火次第にして以て相生す。また次に胎藏を置くに忙路多火を用ふる、後に身を澡盥せんと欲するときは嚙訶忙囊火なり。妻に浴せしむる

の所用には青蘘盧火を以てす。若し子を生じての後には鉢伽蒲火を用ふる。子の爲に初めて名を立つるを籛體無火を用ふる。飲食の時の所用には當に知るべし。戌脂火なり。子の爲に髻を作る時は殺毗火を用ふべし。次に禁戒を受くる時は三謨婆嚩火なり。禁滿して牛を施す時は素哩邪の火を用ふる。童子の婚媾の時は瑜赭迦火を以てす。もろくの事業を造作するには跋那易迦火なり。諸の天神を供養するには籛嚩句火を以てす。房を造るは梵火を以てす。惠施には扇都火なり。羊を縛ぐの所用には阿縛賀寧火なり。觸穢の所用には微吠脂火を以てし、熟食の所用には娑訶娑火を以てす。日天を拜するの用には合微誓邪火なり。月天を拜する時の用には所謂備地火なり。滿燒の所用には阿密栗多火なり。彼の息災の時

に於いては那嚩拏火を用ふ。増益の法を作す時は說栗旦多火なり。怨對を降伏する時には當に忿怒の火を以てすべし。もろくの資財を召攝するには迦摩奴火を用ふ。若し林木を焚燒するには使者火を用ふべし。所食をして消化せしむるには社陀路火を用ふ。若し諸火を授くる時には所謂薄叉火なり。海中に火あり縛拏婆目佉と名く、劫の燒盡の時の火をば名けて瑜軋多といふ。汝もろくの仁者の爲に已に略して諸火を説く、韋陁を修習するもの梵行の傳へ讀む所なり。この

四十四種はその時に我れ宣説しき。また次に秘密主我れ往昔の時に於いて諸火の性を知らずして諸の護摩の事を作し。彼れ護摩の行にあらず。能く業果を成ずるにあらず。我れ又菩提を成じて十二火を演説す。智火を最も初めと爲す。大因陀羅と名く、端嚴にして淨金の相なり、増益して威力を施す。燔鬘あつて三昧に住す當に知るべし智圓滿せり。第二をば行滿と名く普光あつて秋の月の華の如し。吉祥圓の輪中にして珠鬘鮮白の衣あり。第三の摩嚩多是黒色にして風燥の形なり。第四の盧醯多の色は朝日の暉の如し。第五の沒唎拏は髭多くして淺黄の色なり。頸脩くして大威光あり。一切に遍して哀愍す。第六をば忿怒と名く。眇目にして霏煙色なり。聳ゆる髪にして震吼す。大力にして四牙を現す。第七の闍吒羅は迅疾にして衆綵を備へ。第八は迄灑耶なり、猶し電光の聚るが如し。第九をば意生と名く、大勢あつて巧色の身なり。第十の羯攞微は赤黒にして唵字の印なり。第十一の火神は梵本に闕けたり、名なし。十二の謨賀那は衆生の迷惑するところなり。秘密主これ等の火色の所持はその自の形色に随つて藥物等も彼れに同じて外護摩を作せ、意に随つて悉地を成す。また次に内心に於いて一生にして三を具す、三處を合して一と爲す。瑜祇の内護摩なり。大慈大悲の心これを息災の法といふ。

彼れ兼ねて喜を具す、これを増益の法と爲す。忿怒は胎藏に從つてもろくの事業を造す。又かれ秘密主その所説の處の如く相應の事業に隨ひ信解に隨つて焚燒すべし。

その時に金剛手、佛に白して言さく世尊云何なるか火爐の三摩地、云何なるか用て散灑し。云何なるか順に吉祥草を敷く。云何なるか縁の衆物を具する、是くの如く説き已んぬ。その時に金剛手、佛に白して言さく世尊云何なるか火爐の定。云何なるか用て散灑し順に吉祥草を敷く。云何なるか衆物を具する。佛、秘密主持金剛者に告げて言く火爐は肘量の如くして四方の相均等なり。四節を縁の量と爲す。金剛印を周巾せよ。これを藉くに生茅を以てす爐を繞つて右に旋らす。末を以て本に加へざれ。本を以て末に加ふべし。次に吉祥草を持して法に依つて右に灑げ、塗香華燈を以て、次に火天に献せよ、行人一華を以て没栗茶に供養して坐位に安置す。また當に灌灑を用ふべし。當に滿施を作すべし。持するに本眞言を以てす。次に息災の護摩をば或は増益の法を以てす。是くの如くの世の護摩を説いて名けて外事と爲す。また次に内護摩は業生を滅除す。自の末那を了知して、色聲等を遠離せよ。眼耳鼻舌身及與語意業とは皆悉く心より起つて心王に依止

す。眼等の分別生じて及び色等の境界あり、智慧未生の障りは風燥火能く滅す。妄分別を燒除して淨菩提心を成す。これを内護摩と名く、諸の菩薩の爲に説く。

說本尊三昧品第二十八

その時に執金剛秘密主、佛に白して言さく世尊願はくは諸尊の色像威験の現前すること説きたまへ。眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩をして本尊の形を觀緣せしむるが故に即ち本尊の身を以て自身と爲す。疑惑あることなうして悉地を得かくのごとく説き已つて佛、執金剛秘密主に告げて言はく善哉々々秘密主、汝よく吾れに是くの如くの義を問ふ。善哉諦に聽き極めて善く作意せよ、吾れ今演説せん。金剛手、言はく是くの如し世尊願樂はくは聞かんと欲ふ。佛の言はく秘密主諸尊に三種の身あり、所謂字と印と形像となり。彼の字に二種あり謂く聲と及び菩提心となり。印に二種あり所謂有形と無形となり。本尊の身に亦二種あり所謂清淨と非清淨となり。彼の淨身を證すれば一切の相を離る。非淨有想の身は則ち顯形衆色あり。彼の二種の尊形二種の事を成就す。有想の故に有想の悉地を成就し無想の故に隨つて無想の悉地を生ず、而して偈を説いて言く。佛、有想を説きたまふが故に、樂欲して有想を成す。無想到に住するを以ての故に

無想の悉地を獲、この故に一切の種當に非想到に住すべし。

說無相三昧品第二十九

また次に薄伽梵毗盧遮那、執金剛秘密主に告げて言はく秘密主かの真言門に、菩薩の行を修する諸の菩薩、無想三昧を成就せんと樂欲せば、當にかくの如く思惟すべし。想は何に依てか生ずる。自身とやせん。自の心意とやせん。若し身より生せば身は草木瓦石の如し、自性かくの如し造作を離れたり。識知するところなし因業の所生なり。應當に等しく觀じて外事に同すべし、又造立せる形像の如く火にあらす、水にあらす、刃にあらす、毒にあらす、金剛等に傷壞せられ或は忿恚龜語なれども而も能く少分もそれをして動作せしむるにあらず。若し飲食衣服塗香華鬘を以て、或は塗香栴檀龍腦かくの如く等の類の種々の殊勝の受用の具を以て諸天人奉事し供給すれども亦喜びを生ぜず。何を以ての故に愚童凡夫は自性空の形像に於て自ら我分を生じて顛倒不實にして諸の分別を起して或はまた供養し、或は毀害を加ふ。秘密主當に是の如く循身念に住して性空を觀察すべしまた次に秘密主心は自性なし。一切の想を離なる、が故に當に性空を思惟すべし秘密主心は三時に於て求むるに不可得なり。三世を過ぎたるを以ての故にかくの

如くの自性諸相を遠離せり。秘密主、心想あるは即ちこれ愚童凡夫の分別するところなり。了知せざるに由て是の如く等の虚妄の横計あり。彼の不實不生の如く當に是の如く思念すべし。秘密主この真言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は無相の三昧を證得す。無相三昧に住するに由るが故に如來の所說の眞語親たり其の人に對して常に現在前す。

世出世持誦品第三十

また次に秘密主今秘密の持眞言の法を説かん。一一の諸の眞言に心意の念誦を作せ、出入の息を二と爲す。常に第一相應するなり。これに異にして受持すれば、眞言に支分を闕す。内と外と相應するに我れ四種ありと説く。彼の世間の念誦は所縁あつて相續して種子の字と句とに住し、或は心、本尊に隨ふ。故に攀緣ありと説く出入の息を二と爲す。當に知るべし出は心の心は諸字を遠離せり。自と尊と一相と爲す。二なく取着なし。意と色像とを壞せず。法則に異なることなかれ。所說の三落又にも種の持眞言あり。乃至衆罪除いて眞言者清淨なり。念誦の數量の如くして是の如くの教に異なること勿れ

囑累品第三十一

その時に世尊、一切衆會に告げて言はく汝今應當に不放逸に住すべし。この法門に於いて若し根性を知らずば他人に授與すべからず。我が弟子の標相を具せるものをば除く、我れ今演說せん汝等當に一心に聽くべし。若し吉祥の執宿の時に生すれば勝事を志求し、微細の慧あつて常に恩徳を念じ渴仰の心を生じ、法を聞いて歡喜して而も住せん、其の相青白なり。或は白色なり。首廣く頸長く額廣く平正にしてその鼻修直にして面圃圓滿し端嚴相稱ならん。是くの如くならば、佛子應當に慇懃にこれを教授すべし。その時に一切具威徳者威く慶悦を懷いて聞き已つて頂受し一心に奉持す。この諸の衆會、種々の莊嚴を以て廣大に供養し已つて佛の足を稽首し恭敬合掌してこの言を説かく、ただし願はくばこの法教に於て救世の加持の句を演說す。法眼道をして一切處に遍し世間に久住せしめたまへ。

その時に世尊この法門に於て加持句の眞言を説いて曰く
 南麼三曼多勃駄喃一薩婆他引勝勝二但稜合但稜三顛顛四達隣達隣五娑他合跋也
 娑他合跋也六勃駄薩底也合嚩引吽達摩薩底也合嚩八僧伽薩底也合嚩九吽吽十吠那
 尾吠一莎訶。

時に佛この經を説きたまひ已つて、一切の持金剛者及び普賢等の上首の諸の菩薩

佛の所説を聞いて皆大に歡喜し信受し奉行しき。

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第六

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第六

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第七

供養念誦三昧耶法門眞言行學處品第一

毗盧遮那佛の淨眼を開敷したまへること、青蓮の如くなるを稽首したてまつる、我れ大日經王により供養の所資ともろくの儀軌とを説かむ。次第の眞言の法を成せん爲に、彼の如く當に速に成就することを得べし。又本心をして垢を離れしむるが故に、我れ今要に隨へ略して宣説せん。然も初に自他の利成就すること無上智願の方便なり。彼れを成ずる方便無量なりと雖も、悉地を發起すること信解に由る。悉地もろくの勝願を満ちたまへる一切如來と勝生子と彼れ等の佛身の眞言形と所住の種種の印威儀と殊勝の眞言の所行の道と及び方廣乘とに於て皆諦信すべし。有情の信解に上中下あり、世尊彼の證修の法を説きたまへ。六趣に輪廻する衆を哀愍して、隨順し饒益するが故に開演したまふ。應當に恭敬して決定の意をもつてして亦勤誠深信の心を起すべし。若し最勝の方廣乘に於て、妙眞言の調伏の行を知り。善逝子の修習する所の無上持明の別律儀に隨ひ、具縁のもろくの支分を解了し、傳教の印可等を受くることを得たる。是くの如くの師

を見て恭敬禮して利他の爲の故に一心に住すべし。瞻仰すること猶し世の導師のごとし。亦善友及び所親の如くせよ。勸慰殊勝の意を發起して、供養し給侍して所作に隨へ。師の意に善順して歡喜せしめよ。慈悲攝受して相對はんととき、稽首して勝れたる善逝の行を請す。願はくは尊、應の如くわれを教授したまへ。彼の師自在に而も大悲藏等の妙圓壇を建立し、法によつて漫荼羅に召入し器に隨て三昧耶を授與すべし。道場と教本と眞言印と親たり尊のところにて口に傳授すべし。三昧耶及び護を獲勝し爾して乃ち應當に説の如く行すべし。然もこの契經の所説は眞言の平等の行を攝す。劣慧の弟子を哀愍するが故に漸次の儀式を分別す。勝利を造する天中の天、正覺の心より生ずる所の子に於て下世天の身語印に至るまで此の眞言の最上乘に入る。諸の密行に導く軌範のものを皆當に敬重て輕毀せざるべし。能く諸の世間を饒益するを以て、この故に捨離の心を生ずることなかれ、常に無間に而も彼等の廣大の諸の功德を繫念すべし。その力分相應の事は隨つて、悉皆承奉して而も供養せよ。佛と聲聞衆と及び緣覺との、彼の教門の盡苦の道を説く。學處を授けたる師と同梵行とに一切毀慢の心を懷くことなかれ。能く時宜の當に作すべき所を觀じて、和敬と相應して給侍すべし。愚童の

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第七

心行の法を造らざれ。諸尊に於て嫌恨を起さざれ。世の導師の契經に説きたまふが如く、能く大利を損するは瞋に過ぎたるはなし。一念の因縁悉く俱膺曠却の所修の善を焚滅す。この故に慇懃に常にこの無義利の根本を捨離すべし。淨菩提心の如意寶は、世出世の勝希願を満す。疑を除けば究竟して三昧を獲、自利利他これに因て生ず。故に守護せんこと身命より倍すべし、觀すれば廣大の功德藏を具す。若し身々意に衆生を燒すこと、下少分に至るまで皆遠離すべし。異の方便の濟ふところ多きをば除く、内に悲心に住して而も瞋を現せよ。恩徳を背く有情類に於て、常に忍辱を行じて過を觀せざれ。又常に大慈悲と及び喜捨無量の心とを具足して、力の能へたるところに隨て法食を施し、慈の利行を以て群生を化せよ。或は大利と相應する心に由て、時を俟つが爲の故に而も棄捨せよ。若し勢力の廣く饒益することなれば、法に住して但し菩提心を觀すべし。佛この中に萬行を具して、清白醇淨の法を満足すと説きたまふ。布施等の諸の度門を以て衆生を攝受して大乘に於て受持讀誦等及與恩惟正修習とに住せしめよ。智者六情根を制止して常に當に意を寂めて等引を修すべし。事業を毀壞することは諸の酒に由る。一切の不善法の根なり。毒と火と刀と霜雹等との如し、故に當に遠離すべし。

し親近することなけれ。また佛我慢を増すと説きたまふに由て、高妙の床に坐臥すべからず。要を取りこれを言はし具慧者は、悉く自損損他のことを捨つべし。我れ正三昧耶の道に依て、今已に次第に略して宣説す。佛説の修多羅を顯明して廣く知解して決定を生せしむ。これに依て正しく平等戒に住してまた當に毀犯の因を離るべし。謂く惡心を習ひ及び懈惰し安念し恐怖し談話する等なり。妙眞言門の覺心者は、かくの如く正しく三昧耶に住す、當に障蓋をして漸く消盡せしむべし、諸の福德増益するを以ての故に、この生に於いて悉地に入らんと欲はば、その所應に隨てこれを思念ふべし。親たり尊の所に於て明法を受けて觀察し相應すれば成就を作す。當に自ら眞言行に安住せんこと所説の明の次第儀の如くすべし、先づ灌頂傳教の尊を禮して眞言所修の業を請白せよ。智者師の許可を蒙り已つて地分の所宜の處に依れ。妙山と補峯と半巖との間、種種の龕窟と兩山の中と一切の時に於て安穩を得べし、芟と荷と青蓮との遍嚴の池と大河と涇川と洲と岸との側り、人物のもろくの憤鬧を遠離すべし。篠葉扶く疏き悦意の樹ありて、多く乳木及び祥草と饒ならん。蚊蚋の苦、寒熱惡獸毒蟲のもろくの妨難あることなく。或はもろくの如來聖弟子の嘗て往昔に遊居したまふところ。寺塔練若古

仙の室、當に自心意樂の處によるべし。在家を捨離し誼務を絶して勤めて五欲もろく、の蓋纏を轉せよ。一向に深く法味を樂ひ、その心を長養して悉地を求むべし。また常に堪忍の慧を具足して能く飢渴のもろく、の疲苦を安んずべし。淨命の善伴を以てせよ、或は伴なくば、常に妙法の經卷と俱にせよ。若しは諸佛菩薩の行に順じて、眞言に於て堅く信解し。淨慧力を具して能く堪忍し精進にして諸の世間を求めず。つねに樂みて堅固にて怯弱なし、自他の現法に成就を作せ。餘の天の無畏依に隨はず、これを具するを名けて良き助伴と爲す。

増益守護清淨行品第二

彼れ成就の處所を作し己て毎日に先づ念慧に住せよ。法に依て寢息して初めて起くる時に、もろく、の無盡の障をなすものを除け。この夜に放逸より生ずるところの罪を慇懃に還て淨く皆悔除せよ。根を寂にし慧を具し利益の心を以て、無盡の衆生界を度せんと誓ふべし。法の如く澡浴し或は浴せずとも、身口意をして清淨ならしむべし。次に齋室空靜のところに於て妙花等を散じて以て莊嚴せよ。隨て形像勝妙典を置き、誠心に十方の佛を思念すべし。心目に現觀して諦に明了なり。當に本尊所在の方に依て至誠恭敬一心に住し、五輪を地に投げて禮を作す

べし。十方正等覺の三世一切に三身を具ふるを歸命し、一切の大乘法を歸命し、不退の菩提衆を歸命し。諸明眞實の言を歸命し、一切の諸の密印を歸命す。身口意の清淨の業を以て慇懃に無量に恭敬し禮したてまつり。作禮方便の眞言に曰く、唵一南麼薩婆他引藥多迦引耶嚩引乞質合多三播娜鏤反 娜難迦嚩弭四 この作禮の眞實の言に由て即ち能く遍く十方の佛を禮したてまつる。右の膝を地に着け爪掌を合せ、思惟して説で先の罪業を悔いよ。我れ無明に由て積集する所身口意業に衆罪を造れり。貪欲恚痴心を覆ふが故に、佛を正法と賢聖僧と父母と二師と善知識と以及無量の衆生のところとに於て、無始生死流轉の中に具に極重の無盡の罪を作れり。親り十方現在の佛に對して、悉く皆懺悔してまた作らじ。出罪方便の眞言に曰く 唵一薩婆播波薩怖合吒二娜訶曩伐折囉合 也莎二嚩訶

十方三世の佛の三種の常身と正法の藏と勝願菩提の小心衆とを南無したてまつる我れ今皆ことごとく正しく歸依す。歸依方便の眞言に曰く 唵一薩婆勃駄菩提薩恒鏤合二設囉赧平菓車弭三伐折囉合達磨四頤唎五 我れこの身を淨めて諸苦を離れたると及び三世の身口意との大海と刹塵との數に